

一般国道127号拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査

そとみの わ  
君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳  
はちまんじんじや  
発掘調査報告書

1 9 8 9

建 設 省  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

君津市は房総半島のほぼ中央部に位置し、市中を流れる小糸川の恵みを受け、多くの貴重な文化遺産が遺されています。

現在、君津市は、日本国内でも屈指の工業地帯へと変貌し、急速な発展をとげました。一般国道127号は、この君津市の幹線道路であると同時に、房総半島西部を南北に結ぶ主要道路でもあります。したがって、近年の君津市及び周辺地域の発展に伴い交通量も激増し、道路環境の整備が急務となり、その一環として、建設省千葉国道工事事務所では、君津市外箕輪地先の拡幅工事を計画することになりました。

拡幅予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、千葉県教育委員会と建設省の間で協議が重ねられましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、昭和62年11月より、外箕輪遺跡と八幡神社古墳の2遺跡を対象として、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は63年8月には終了し、その結果、8世紀代の大建物群、13世紀代の居館跡・建物・井戸、条里関連遺構など多くの資料を発見することができました。これらの資料は、君津市周辺のみでなく、上総地域における古代から中世への歴史の流れを解明する上で貴重なものであります。

このたび、2遺跡の整理作業も終了し、発掘調査の成果を報告書として刊行する運びとなりました。本書が、学術資料はもとより、郷土歴史理解のための資料として広く活用されることを希望する次第であります。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで多々御指導をいただいた千葉県教育委員会をはじめ建設省、君津市教育委員会など関係諸機関各位の御指導・御協力に対し深くお礼申し上げるとともに、発掘調査・整理作業に協力くださった調査補助員の皆様には心から謝意を表します。

平成元年10月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬良三

## 凡　例

1. 本書は、建設省による一般国道127号拡幅工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、建設省の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもと財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 本書に収載する遺跡は、外箕輪遺跡（遺跡コード255-03）と八幡神社古墳（遺跡コード255-04）の2遺跡である。
4. 発掘調査は、調査部長 堀部昭夫、部長補佐 岡川宏道、班長 阪田正一、佐久間 豊の指導のもとに調査研究員 笹生 衛、高梨俊夫（昭和63年2月～3月）が担当した。
5. 整理作業及び報告書の執筆・編集は、調査部長 堀部昭夫、部長補佐 岡川宏道、阪田正一、班長 佐久間 豊の指導のもと技師 笹生 衛が担当した。
6. 外箕輪遺跡出土の木材・種子の自然科学分析については、株式会社パリノサーベイに委託した。
7. 八幡神社古墳の墳丘測量は、株式会社日経コンサルタントに委託した。
8. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関、諸氏の御指導・御協力をいただいた。深く感謝する次第であります。

千葉県教育委員会文化課 建設省千葉国道工事事務所 同木更津出張所 君津市教育委員会 財団法人君津郡文化財センター

浅田員由氏 大野房次郎氏 梶山林雄氏 関口広次氏 豊巻幸正氏、蔽川昭男氏

# 目 次

## 本 文

### 序 文

### 凡 例

## I章 序 章

1 調査に至る経過	1
2 遺跡の位置と環境	1

## II章 外箕輪遺跡

1 調査の方法と概要	6
2 遺構	8
3 遺物	28
4 小結	49

## III章 八幡神社古墳

1 調査方法と概要	53
2 遺構	55
3 遺物	67
4 小結	71

## IV章 まとめ

1 八幡神社古墳	73
2 外箕輪遺跡・八幡神社古墳検出遺構の性格について	76
3 結語	81
付篇 外箕輪遺跡出土の木材・種子の自然化学分析	83

## 挿 図

第1図 遺跡位置図	4
第2図 遺跡周辺図	5
第3図 外箕輪遺跡遺構全体図及びグリッド配置図	7
第4図 基本土層図	7
第5図 SB-1 実測図	9
第6図 SB-2 実測図	10
第7図 SB-3 実測図	11
第8図 SB-4 実測図	12
第9図 SB-5 実測図	13
第10図 SB-6 実測図	14
第11図 SK-1 実測図	15
第12図 SK-2 実測図	15
第13図 SK-3 実測図	15
第14図 SK-4、5 実測図	16
第15図 SE-1 実測図	16
第16図 SD・SX-1、2 土層断面図	17
第17図 外箕輪遺跡遺構全体図(1)	23
第18図 外箕輪遺跡遺構全体図(2)	24
第19図 外箕輪遺跡遺構全体図(3)	25
第20図 外箕輪遺跡遺構全体図(4)	26
第21図 外箕輪遺跡遺構全体図(5)	27
第22図 SB-1~6 出土遺物実測図	29
第23図 SK-1 出土遺物実測図	30
第24図 SK-2 出土遺物実測図(1)	31
第25図 SK-2 出土遺物実測図(2)	32
第26図 SK-3~5 出土遺物実測図	33
第27図 SE-1 出土遺物実測図(1)	35
第28図 SE-1 出土遺物実測図(2)	36
第29図 SE-1 出土遺物実測図(3)	37
第30図 SE-1 出土遺物実測図(4)	38

第31図	SE-1 出土遺物実測図（5）	39
第32図	SE-1 出土遺物実測図（6）	40
第33図	SD 出土遺物実測図（1）	42
第34図	SD 出土遺物実測図（2）	43
第35図	SX-1 出土遺物実測図（1）	45
第36図	SX-1 出土遺物実測図（2）	46
第37図	グリッド出土遺物実測図	47
第38図	外箕輪遺跡遺構変遷図	50
第39図	八幡神社古墳遺構全体図及びグリッド配置図	54
第40図	基本土層図	54
第41図	SB-1 実測図	55
第42図	SB-2 実測図	56
第43図	SB-3 実測図	56
第44図	SE-1 実測図	56
第45図	SD 土層断面図	58
第46図	八幡神社古墳遺構全体図（1）	62
第47図	八幡神社古墳遺構全体図（2）	63
第48図	八幡神社古墳遺構全体図（3）	64
第49図	八幡神社古墳遺構全体図（4）	65
第50図	八幡神社古墳遺構全体図（5）	66
第51図	八幡神社古墳出土遺物実測図（1）	68
第52図	八幡神社古墳出土遺物実測図（2）	69
第53図	八幡神社古墳遺構変遷図	72
第54図	八幡神社古墳 墳丘・周溝復元図	74
第55図	条里地割り復元図	77
第56図	遺構分布及び条里地割り図	79

## 卷末折り込み図面

- 第57図 八幡神社古墳全測図
- 第58図 八幡神社古墳々丘エレベーション図
- 第59図 八幡神社古墳周溝土層断面図

## 表

第1表	周辺関連遺跡一覧	3
第2表	外箕輪遺跡掘立柱建物一覧	22
第3表	外箕輪遺跡出土スラグ分類表	48
第4表	八幡神社古墳掘立柱建物一覧	61
第5表	富津古墳群と八幡神社古墳の墳丘比率	75

## 図版

- 図版1 遺跡周辺航空写真
- 図版2 外箕輪遺跡全景 1(北東から) 2(南から)
- 図版3 1 SB-1 全景(東から) 2 SB-2 全景(南から) 3 SB-3 全景(北から)
- 図版4 1 SB-1、2 全景(南から) 2 SB-2、3 全景(東から) 3 SB-4 全景(西から)
- 図版5 SB-2 柱穴セクション
- 図版6 1 SB-6 全景(北東から) 2 SB-5 全景(北から) 3 SK-1 全景(北から)
- 図版7 1 SK-2 全景(南西から) 2 SK-3 全景(北から) 3 SD-6、8、SK-4、5(東から)
- 図版8 1 SE-1 全景(西から) 2 灰層検出状況(西から) 3 遺物出土状況
- 図版9 八幡神社古墳全景 1(東から) 2(西から)
- 図版10 八幡神社古墳周溝 1(南から) 2(東から)
- 図版11 1 SB-2 全景(北東から) 2 SE-1(北東から) 3 SB-1(北から)
- 図版12 SD-12 1 全景(西南から) 2 全景(北東から) 3 完掘状況(西南から)
- 図版13 外箕輪遺跡 SB-1、6、SK-1、2、B-6 グリッド出土遺物
- 図版14 外箕輪遺跡 SK-1、2、4、B-6 グリッド出土遺物
- 図版15 外箕輪遺跡 SE-1 出土遺物
- 図版16 外箕輪遺跡 SE-1 出土遺物
- 図版17 外箕輪遺跡 SE-1 出土遺物
- 図版18 外箕輪遺跡 SE-1 出土遺物
- 図版19 外箕輪遺跡 SB-6、SK-1、2、SE-1、SX-1 出土遺物
- 図版20 外箕輪遺跡 SB-1、6、SK-2、SD-3、5、6、14、SX-1 出土遺物
- 図版21 八幡神社古墳 SD-11、12、14 出土遺物
- 図版22 八幡神社古墳 SX-1、SE-1、C-2 グリッド出土遺物
- 図版23 外箕輪遺跡出土木材顕微鏡写真
- 図版24 外箕輪遺跡出土種子顕微鏡写真

# I章 序 章

## 1. 調査に至る経過

一般国道127号は、房総半島の西部、木更津と館山を上下に結ぶ幹線道路であるが、近年の交通量の急増から、君津市外箕輪地先においても、その拡幅の必要性が生じてきた。そこで、この拡幅工事が実施に移されるのに先立ち、建設省関東地方建設局長より千葉県教育委員会教育長あてに、昭和61年11月6日付で拡幅用地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。この用地内には、当初より八幡神社古墳の周溝部分が存在することは知られていたが、県教育委員会が踏査した結果、更にもう一ヶ所の包蔵地（外箕輪遺跡）が確認され、県教育委員会は、この旨を同年11月27日付で建設省に回答した。その後、県教育委員会と建設省との間で、これらの遺跡の取り扱いについて慎重に協議をした結果、千葉県教育委員会の指導のもと、建設省との委託契約に基づき財団法人千葉県文化財センターが、外箕輪遺跡及び八幡神社古墳の発掘調査を実施する運びとなったのである。

## 2. 遺跡の位置と環境

### 遺跡の位置と立地（第1、2図）

外箕輪遺跡と八幡神社古墳（以後、外箕輪遺跡群）は、君津市外箕輪字新屋敷及び字辻に所在する。当遺跡群は、房総山塊に源を発し、西流して東京湾に達する小糸川下流、北岸の標高16m前後の河岸段丘面上に立地している。当遺跡群の所在する地点は、小糸川が大きく蛇行する場所に当たっており、遺跡の立地する段丘面は、蛇行により北岸が南側に迫り出した形状を呈している。外箕輪遺跡はその段丘面上の川に面する突端部分に、八幡神社古墳はその北約300m程の場所に、それぞれ位置している。

### 周辺の遺跡（第1図）

当遺跡群の周辺には多くの遺跡が確認されているが、現在までに発掘調査等によりその性格がある程度判明しているものは、縄文時代後期の三直貝塚以外は、年代的には弥生時代から歴史時代にかけての遺跡が主体を占めている。まず、小糸川北岸の集落遺跡から見てみると、標高20m前後の段丘面上から標高30m程の台地上にかけて南子安遺跡や畠沢遺跡といった弥生時代から歴史時代の集落遺跡が点在している。中でも南子安遺跡では製鉄関係の遺物が出土しており注目される（註1）。古墳については、八幡神社古墳の立地する段丘面上に法木作古墳群や李師古墳などの小円墳が数基存在する（註2）外は、殆どが台地上に立地している。特に八幡神社古墳北方1kmの台地上には4世紀代の前方後方墳である道祖神裏古墳、短甲が出土した5世紀代の八重原古墳群、6世紀代の前方後方円墳の星谷上古墳を始めとして多くの古墳が確認さ

れており(註3)、八幡神社古墳周辺とは対象的な様相を呈している。また、当遺跡群の北方約2kmには九十九坊庵寺跡があり、発掘調査により講堂と塔の跡が確認されている(註4)。

一方、当遺跡群の対岸の遺跡については、まず、郡条里遺跡が挙げられる。ここでは1町四方の坪地割を見ることができ、確認調査が実施されている(註5)。この遺跡の南には郡遺跡があり、6～7世紀代の集落が確認されており(註6)、この周辺には、「郡」の地名から周准郡衙跡に関連する遺跡が存在すると推定されている。また、郡条里遺跡の北、小糸川に面する地点には常代遺跡があり、弥生時代中期の方形周溝墓や歴史時代の掘立柱建物が発掘調査により検出されている(註7)。古墳については、これらの遺跡を見下ろす台地上に、元秋葉台古墳群・上野古墳群を始めとして多くの古墳群が存在し、馬具や古式須恵器などが出土しており注目される(註8)。

#### 文献から見た遺跡周辺

遺跡の所在する君津市は、律令期にはほぼ周准郡に属しており、それ以前においては須恵国造の支配領域に入っていたと考えられる。須恵国造については「先代旧事本記」卷十「国造本記」に「茨城国造祖（記紀）建許信命児大布日意弥命、定賜国造。」という記事を見る事ができるが(註9)、詳細については不明な点が多い。

律令期に入ると、周准郡に関する記録は多く見られるようになる。8世紀代のものでは、正倉院文書「丹裏古文書」(註10)、「万葉集」(註11)、「平城宮跡出土木簡」(註12)に周准郡に関する記事が見られる。中でも「丹裏古文書」と「万葉集」には額部郷戸主「若田部荒馬」、「占部國忍」や上丁「物部龍」といった周准郡の人名が認められる。9世紀代では、天長年間のものと推定される正倉院「黄布」に周准郡少領「日下部連口麿」の名を見る事ができる。更に、「日本三代実録」元慶元年(877年)閏二月廿六日条には「上総国、常世神」が從五位下に叙された記事があり、この「常世神」は、当遺跡群の南東約0.7kmの丘陵上に鎮座する常代神社に当たるものと考えられる(註13)。また、「倭名類聚抄」によれば、9・10世紀代には周准群は「山家・山名・額部・三直・丸田・湯坐・藤部・勝川（勝部）」の8郷に分割されていた事が知られ(註14)、当遺跡群周辺は、三直郷か藤部郷に属していた可能性が考えられる(註15)。この周准郡も、11世紀後半から12世紀にかけて所謂中世的郡制である周東・周西の2郡に分割されたと考えられ(註16)、そのまま中世へ移行している。中世では「上総国周東郡内東盛義所領等注文」など一連の文書により、当遺跡群周辺の情況を知ることが出来る(註17)。それによると、当遺跡群の所在する外箕輪に隣接する子安村は13世紀当時、千葉氏の支族である東氏の所領となっていることがわかるが、この所領も13世紀末期には幕府に没収され、幕府から称名寺に寄進されている。

註

- (1) 野中徹「南子安遺跡」『日本考古学年報』25 日本考古学協会 1972
- (2) 野中徹「李師古墳群調査報告」君津市教育委員会他 1980
- (3) 大塚初重「千葉県君津市道祖神裏古墳調査概報」千葉県教育委員会他 1976  
杉山晋作他「古墳時代研究III—千葉君津市所在八重原1号墳・2号墳の調査ー」古墳時代研究会 1989
- 平野雅之「千葉県君津市星谷上古墳・野馬木戸古墳」財團法人君津郡文化財センター他 1985
- (4) 森本和男「君津市九十九坊廃寺址確認調査報告書」財團法人千葉県文化財センター 1985
- (5) 豊巻幸正「千葉県君津市郡条里遺跡確認調査報告書」君津市教育委員会 1987
- (6) 甲斐博幸他「千葉県君津市郡条里遺跡確認調査報告書」君津市教育委員会 1988
- (7) 甲斐博幸「千葉県常代遺跡群確認調査報告書」君津市教育委員会 1989
- (8) 野中徹他「千葉県君津市元秋葉台32号墳発掘調査報告書」君津市教育委員会他 1977
- (9) 「先代旧事本紀」卷第十國造本紀 続日本古典全集 現代思潮社 1980
- (10) 「市原市史」資料集(古代編) 市原市教育委員会 1983
- (11) 註(10)に同じ。
- (12) 註(10)に同じ。
- (13) 「日本三代実録」国史大系本
- (14) 池辺 弥「和名類聚抄郡郷里駅名考證」吉川弘文館 1981
- (15) 「改訂 房總叢書 第4集」地誌・日記・紀行 房總叢書刊行会 1957
- (16) 「吾妻鏡」卷一 国史大系本
- (17) 「千葉県史料」中世篇 県外文書 1966

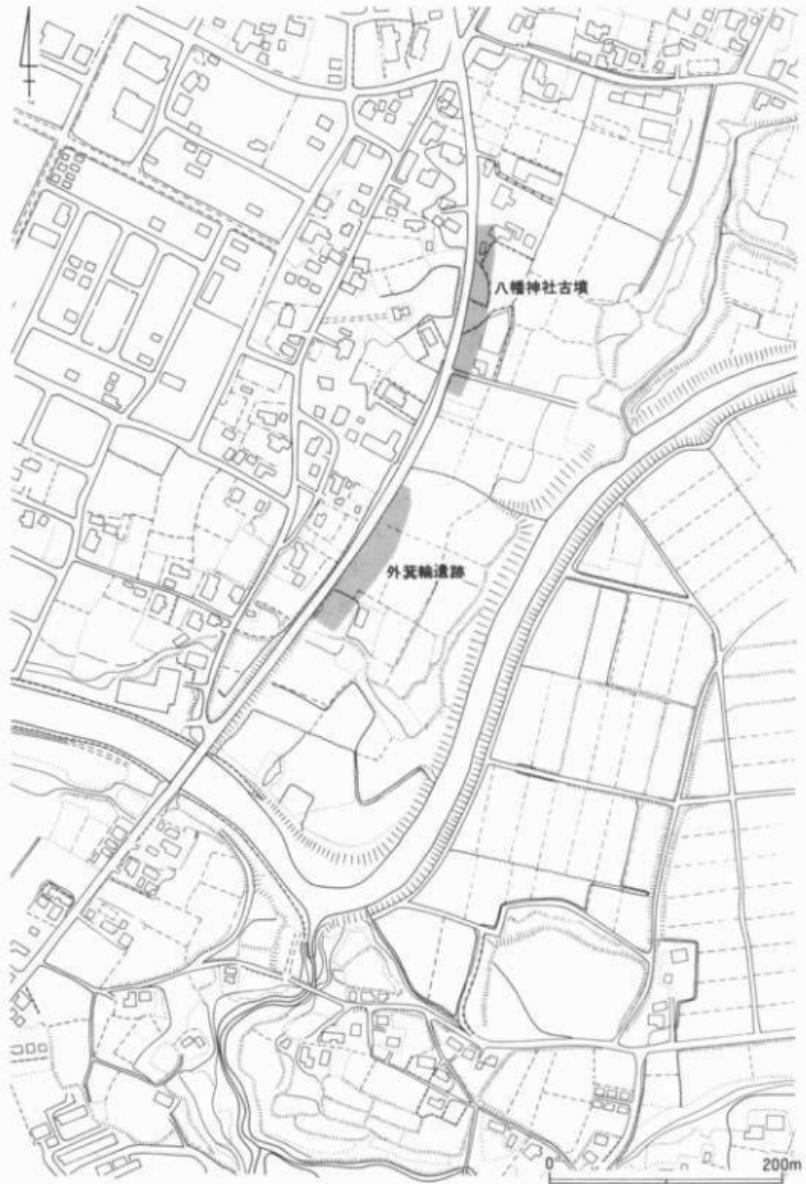
1	外宮輪遺跡	6	八重原古墳群	11	李師古墳群
2	八幡神社古墳	7	九十九坊廃寺	12	上野古墳群
3	法木作古墳群	8	南子安遺跡	13	元秋葉台古墳群
4	道祖神裏古墳	9	馬門古墳	14	郡条里遺跡
5	星谷上古墳	10	花輪堂古墳	15	郡遺跡

第1表 周辺関連遺跡一覧表

参考文献

「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)ー市原市・君津・長生地区ー」財團法人千葉県文化財センター  
1987





第2図 遺跡周辺図 (S = 1/5,000)

## II章 外箕輪遺跡

### 1. 調査の方法と概要

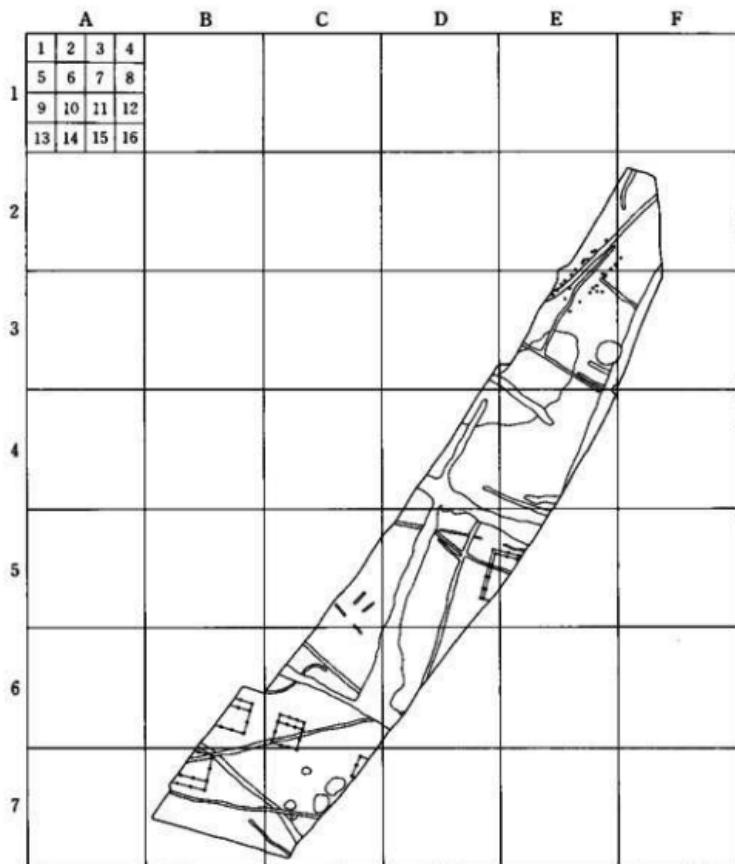
#### 調査の方法（第3・4図）

発掘調査の実施に当たっては、公共座標第IX系によりグリッドを設定した。まず、座標X=-76,540m、座標Y=+8,660mの地点を始点として調査区域全体に20m×20mの大グリッドを設定して、南北方向（Y軸方向）を算用数字で、東西方向（X軸方向）をアルファベットで、それぞれ表示し、各大グリッドはA-1、B-2…という形で呼称した。また、この大グリッドを5m×5mの小グリッドで16に区画し、大グリッドの北西角の小グリッドを1として、東に向かい2、3、4とした。従って大グリッド南東角の小グリッドは16となり、各小グリッドは、大グリッドA-1内であれば、それぞれA-1-1-1…A-1-1-16という形で呼称することとした。また、各グリッドの北東角の杭にそれぞれのグリッド名を付すこととした。

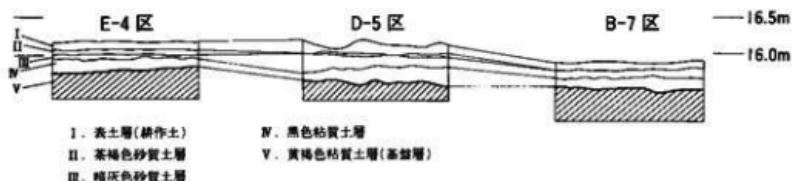
調査は、始めに確認調査を手掘りにより実施し、遺構の分布と基本層序を確認した後、バックホーにより表土除去を行い、本調査に移行した。バックホーによる表土除去は、確認調査の結果から基本層序のⅠ層からⅣ層までを対象として実施し、基本層序Ⅴ層上面を遺構確認面として遺構の平面プランの確認を行った。遺構の調査では、土坑（SK）、溝（SD）、井戸（SE）、不明遺構（SX）については土層観察用のベルトを任意に設定し、セクション図を作成した。また、掘立柱建物（SB）は、桁行、梁行の両方向の柱通りで土層観察を行い、セクション図を作成した。遺跡・遺構の実測では、グリッドの杭を利用して1m×1mの方眼を作成し、遺構平面図や遺物分布図は、基本的にはこれにより作成したが、補助的に平板実測も行った。遺物の取り上げに関しては、報告書では割愛したが、金属製品や5cm角以上の土器片等については原則として図示し、そのレベルを記録した。また、それ以外の遺物については各遺構・グリッドの一括として扱った。

#### 調査概要

確認調査は、3100m<sup>2</sup>の10%を対象として、昭和62年11月2日から13日まで実施し、その結果、2400m<sup>2</sup>の本調査範囲を決定し、その後直ちに、表土除去を行い本調査に移行した。遺構の発掘調査は、切り合い関係の新しい溝状遺構から開始し、昭和62年12月までに溝状遺構及び土坑の殆どと掘立柱建物の一部までの調査が終了した。昭和63年1月から掘立柱建物の残り部分とその他の遺構について調査を開始した。中でも井戸遺構では湧水が著しく、遺物の出土点数も遺跡内で最も多く、調査は難航を極めた。また、掘立柱建物においては、折からの乾燥により確認面が乾燥し、非常に固くなり、水を撒きながらの調査となった。しかし、1月中には残りの遺構の調査も終了し、遺跡完掘状況の記録を取り、外箕輪遺跡の発掘調査を終了した。



第3図 外箕輪遺跡構全体図及びグリッド配置図 ( $S = 1/1,000$ )



第4図 基本土層図 ( $S = 1/80$ )

## 2. 遺構

外箕輪遺跡では、掘立柱建物跡（SB）6棟、井戸（SE）1基、土坑（SK）5基、溝（SD）20条、不明遺構（SX）2基が検出され、年代的には古代から中・近世に亘るが、中でも奈良・平安時代から鎌倉時代にかけてのものが主体を占めている。

### SB-1 (第5図) (図版3・4)

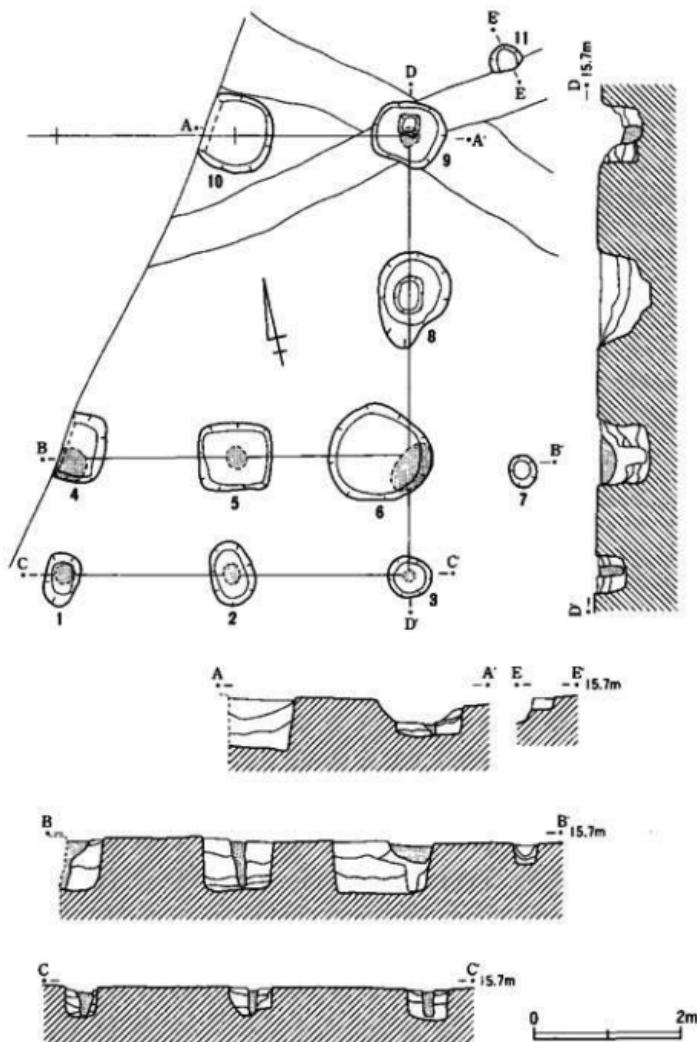
B-7区に位置する、南側に庇を持つ掘立柱建物である。身舎の梁間は2間で、桁行は2間分検出した。しかし、西側の妻柱が未検出のため、桁行が2間か、それ以上かは不明である。柱痕跡は、抜き取られた6、8、10の柱穴を除き明瞭に確認でき、身舎で径0.22m～0.2mを、庇で径0.18mをそれぞれ計測することができる。この柱痕跡から割り出した柱間は、桁行は8尺等間(2.4m)、梁間は7.5尺等間(2.25m)で、庇の出は5尺(1.5m)である。また梁行方位は、N～15°36'40"～Eである。身舎の柱穴掘形には、径1～1.4mの梢円形のものと1m×0.8m前後の矩形のものがあり、深さは0.7m前後にはほぼ統一されている。庇の柱穴掘形は、径0.6mの円形のものと0.9m～0.7m×0.6m～0.48mの梢円形のものからなり、深さは、0.4m前後である。柱穴の覆土には、黒褐色粘質土と黄褐色粘質土が互層に充填されている。また、この建物の東側には径0.3m、深さ0.3m～0.2mの円形の小柱穴が2本確認できた。これらの柱穴の覆土は、黒褐色粘質土が主体を占めている。出土遺物には、柱穴8及び10の抜き取り穴から須恵器高杯・杯・甕、土師器甕が、それぞれ出土している。切り合ひ関係ではSD-7、8に切られている。

### SB-2 (第6図) (図版3・4・5)

B-6区に位置する、北側に庇を持つ掘立柱建物で、SB-1の5m北側に当たる。身舎の梁間は2間で、桁行は2間分検出したが、西側の妻柱が未検出のため、桁行が2間かそれ以上かは不明である。柱痕跡は、全ての柱穴で明瞭に確認でき、身舎で径0.24m～0.2mを、庇で径0.2m～0.18mを、それぞれ計測することができる。柱痕跡から割り出した柱間は、桁行と梁間は、6.5尺等間(1.95m)で、庇の出は4尺(1.2m)である。また、梁行方位は、N～14°21'10"～Eを示す。身舎の柱穴掘形は、大形の矩形(1.2m×1～0.9m)、方形(一辺0.8m前後)及び梢円形(1.1m×1m)の3形態から構成されており、掘り込みの深さは、ほぼ0.8m前後に統一されている。庇の柱穴掘形は、0.5m×0.4mの矩形と径0.42mの円形の2種類が確認できたが、その平面規模は、身舎のものと比較して著しく小さく、掘り込みの深さも0.2m～0.25mと浅い。柱穴の覆土には、黒褐色粘質土と黄褐色粘質土が互層に充填されている。出土遺物は、身舎の柱穴掘形内から、実測不可能な土師器杯の細片が数片出土したのみである。

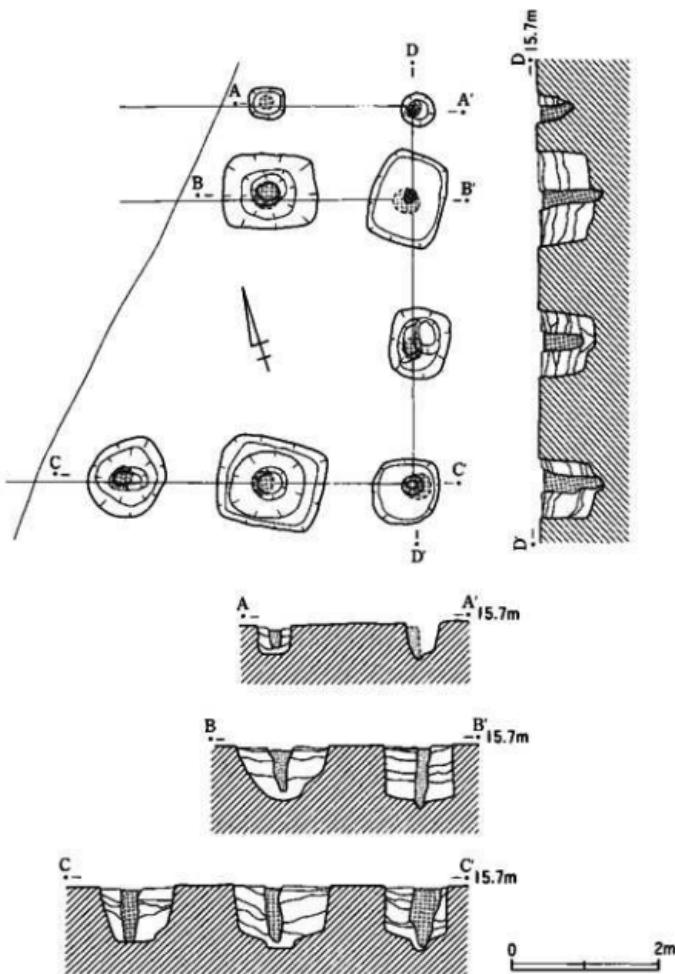
### SB-3 (第7図) (図版3・4)

C-6区に位置する、北側に庇を持つ掘立柱建物で、SB-2の5m東側に当たる。身舎は、桁行3間、梁間2間である。柱痕跡は、全ての柱穴で明瞭に確認でき、身舎で径0.2m～0.16



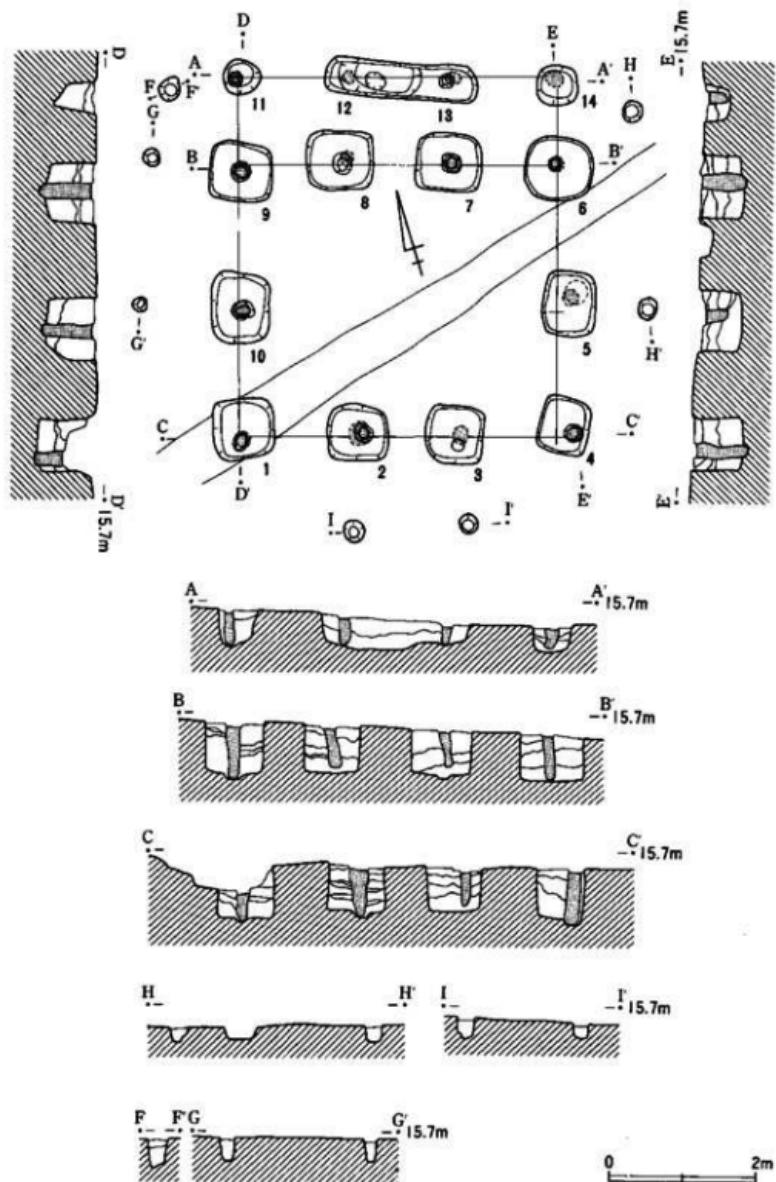
第5図 SB-1 実測図 ( $S = 1/80$ )

m、底で径0.18m~0.12mである。柱痕跡から割り出した柱間は、身舎梁間は6尺等間(1.8m)であるが、北側庇及び身舎の北側桁行と身舎南側桁行との柱間には多少のずれが認められる。身舎南側桁行は5尺等間(1.5m)であるが、底の柱穴11と12及び身舎北側桁行の柱穴9と8の柱間は4.5尺(1.35m)と、他の柱間よりは狭く設定されている。しかし、庇柱穴12~14と身舎桁

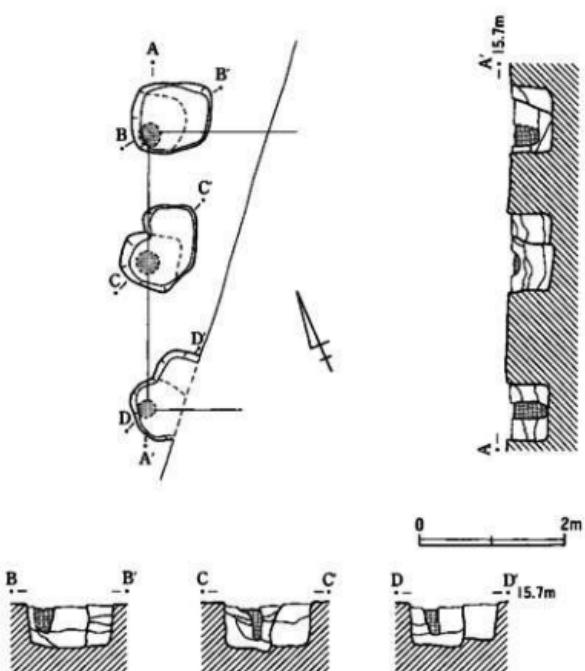


第6図 SB-2実測図 (S=1/80)

行柱穴 8～6 の柱間は 5 尺等間 (1.5m) である。また、庇の出は、4 尺 (1.2m) である。柱痕跡から割り出した梁行方位は N～18°55'34"～E である。柱穴掘形は、身舎で 0.9～0.8m×0.8m の矩形で、掘り込みの深さは、ほぼ 0.8m～0.7m に統一されている。庇部分では、両端の柱穴 11 と 14 の掘形は径 0.5m～0.55m の円形であるのに対し、庇桁行中央の 2 本の柱の掘形は幅 0.5m、長さ 2.1m の布掘りとなっている。掘り込みの深さは 0.6m～0.7m 前後である。これらの柱穴の覆土には、黒褐色粘質土と黄褐色粘質土が互層に充填されている。また、径 0.3m～0.2m、



第7図 SB-3実測図 (S=1/80)



第8図 SB-4 実測図 (S=1/80)

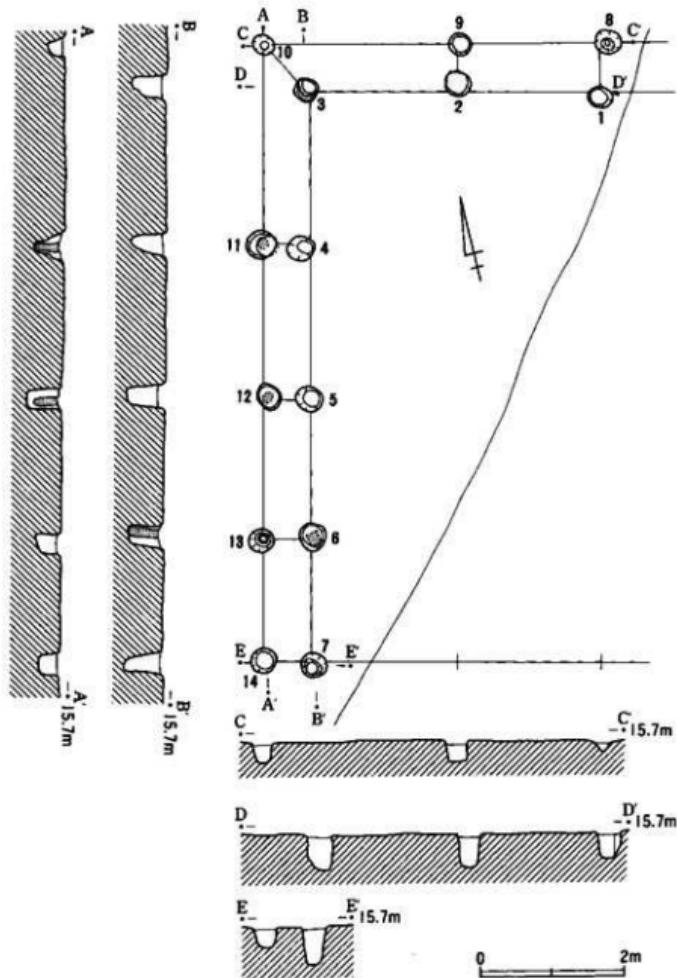
深さ0.4m～0.2mの円形の小柱穴が、この建物の東側と南側とで各2箇所、西側で3箇所それぞれ検出できた。この柱穴の覆土は、黒褐色粘質土が主体を占めている。出土遺物は、庇及び身舎の柱穴掘形から実測不可能な土器片が数片出土したに過ぎない。なお、他遺構との切り合い関係では、SD-7により柱穴1及び6が切られており、この建物はSD-7よりも古いことが確認できる。

#### SB-4 (第8図) (図版4)

C-7区に位置する、掘立柱建物でSB-3の10m東側に当たる。梁間2間で、西の側柱だけを検出し、1回の立て替えが確認できる。新・旧の柱穴掘形のうち、総ての新の柱穴で柱痕跡を認めることができ、径は0.2m～0.1mである。柱痕跡から割り出した柱間は、ほぼ6尺等間(1.8m)で、柱穴掘形の位置から、新・旧の建物は同規模と見られる。また、梁行方位はN~25°33'35"~Eである。柱穴掘形は、新・旧とともに0.7m×0.8m前後のやや歪んだ矩形であり、掘り込みの深さは、新のものが0.7m～0.6mで、旧は0.55m～0.5mと、新のものと比較してやや浅い。柱穴の覆土には、新・旧とともに黒褐色粘質土と黄褐色粘質土が互層に充填されている。出土遺物では、新の柱穴掘形総てから土器片が出土している。この遺物には、遺存状況の良いものが含まれている。

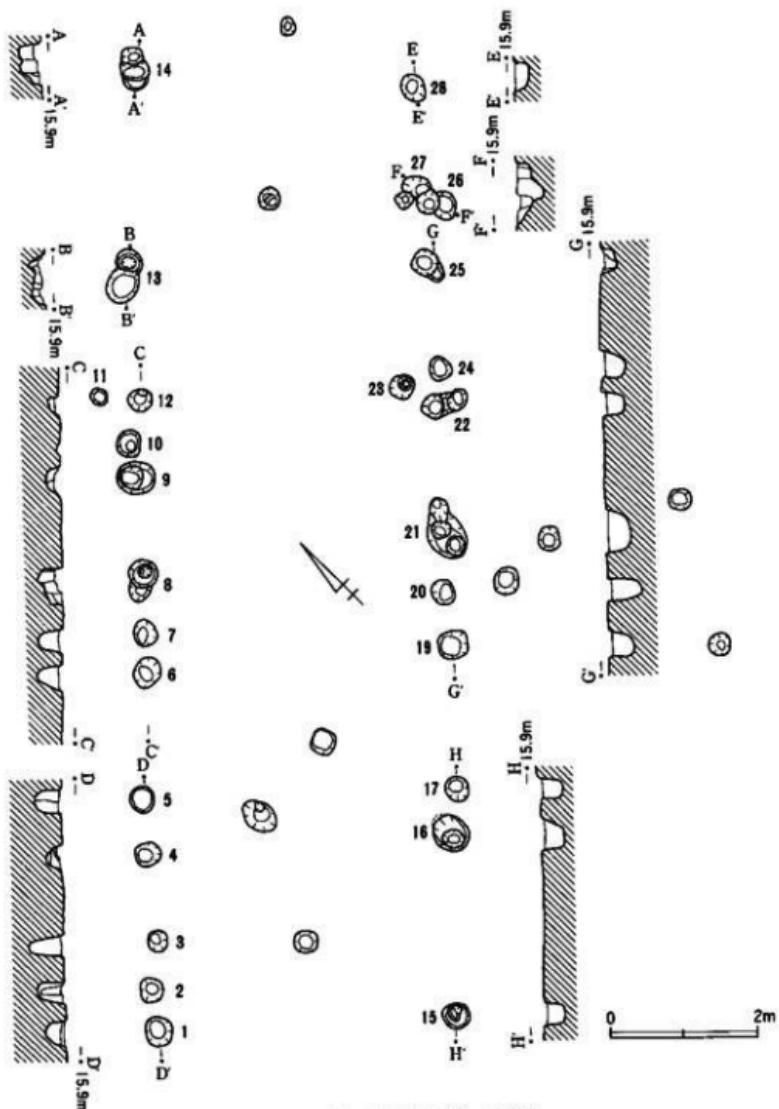
#### SB-5 (第9図) (図版6)

D-5区からE-5区にかけて位置する掘立柱建物である。建物の半分以上が調査区外であるため、全容は不明であるが、検出された範囲で見ると、梁間は4間で、桁行は2間かそれ以



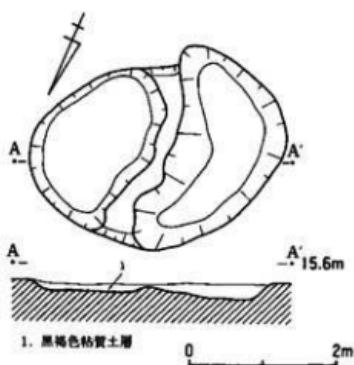
第9図 SB-5 実測図 ( $S = 1/80$ )

上であると考えられる。また、身舎の北側と西側には底状に柱穴が巡っており、身舎との間隔が狭いため、底よりも縁である可能性も考えられる。柱痕跡は全体的に不明瞭で、柱穴6、11、12において僅かに認められる。身舎の柱穴6の柱痕跡は一辺0.15mの方形のものであり、縁(底)の柱穴11、12の柱痕跡は径0.15m前後の円形である。柱穴掘形は、身舎・縁(底)部分とともに径0.3m程の円形のもので、掘り込みの深さは、身舎では0.5m前後に統一されており、縁(底)

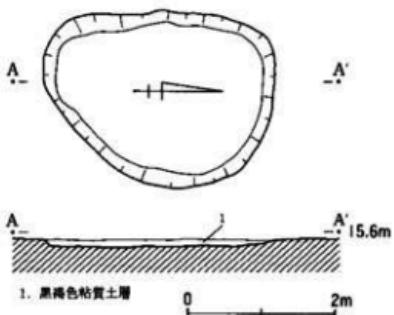


第10図 SB-6 実測図 (S = 1/80)

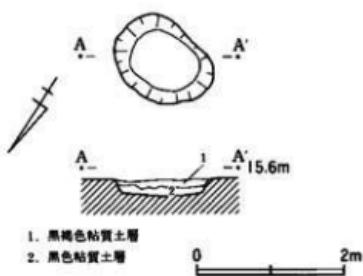
部分では0.5m～0.3mと統一されていない。柱穴の覆土は、黒褐色粘質土が主体を占めている。この柱穴掘形から割り出した柱間は、身舎の柱穴1～5までは7尺等間(2.1m)であり、柱穴5～7は6尺等間(1.8m)である。縁(庇)部分では、北側コーナーに当たる柱穴9～11



第11図 SK-1 実測図 (S=1/80)



第12図 SK-2 実測図 (S=1/80)



第13図 SK-3 実測図 (S=1/80)

が9尺等間(2.7m)と、他の柱間よりも2~3尺長く取られている以外は、柱間は身舎のものと対応しており、縁(底)の出は2尺(0.6m)である。また、桁行方位はN~14°20'58"~Eである。出土遺物は柱穴掘形中より実測不可能な土師器片が数片出土したのみである。

#### SB-6 (第10図) (図版6)

E-2区からE-3区にかけて位置する掘立柱建物で、2列の柱穴列から構成される。柱穴掘形は、いずれも径0.3m前後の円形のもので、掘り込みの深さは0.4m~0.2mと、統一されていない。柱穴の覆土は、黒褐色粘質土が主体を占めている。柱痕跡は、全体的に不明瞭で殆ど確認できなかった。この2列の柱穴列の間隔は、ほぼ4.1mに保たれているが、柱穴同士の重複が多く見られる。このことから梁間1間、桁行3~4間の建物が、同一場所に棟方向を同じくして建て替えられていると考えられ、その場合、建物の柱間は、梁間で14尺(4.2m)、桁行で4尺等間が想定される。出土遺物は、柱穴23と25で須恵器壺片と棒状鉄製品が出土している。

#### SK-1 (第11図) (図版6)

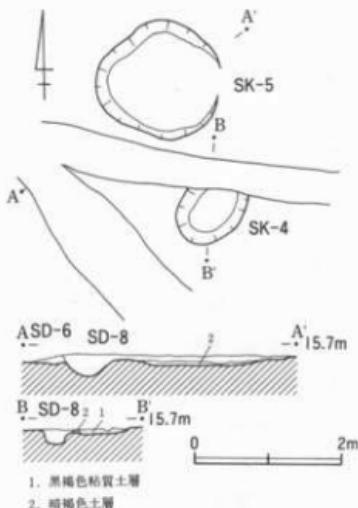
C-7区に位置する土坑で、3.92m×2.5mの精円形を呈しており、深さは0.22mを測る。土坑中央部に土手状の高まりが認められる。出土遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・甕、羽口、スラグがある。

#### SK-2 (第12図) (図版7)

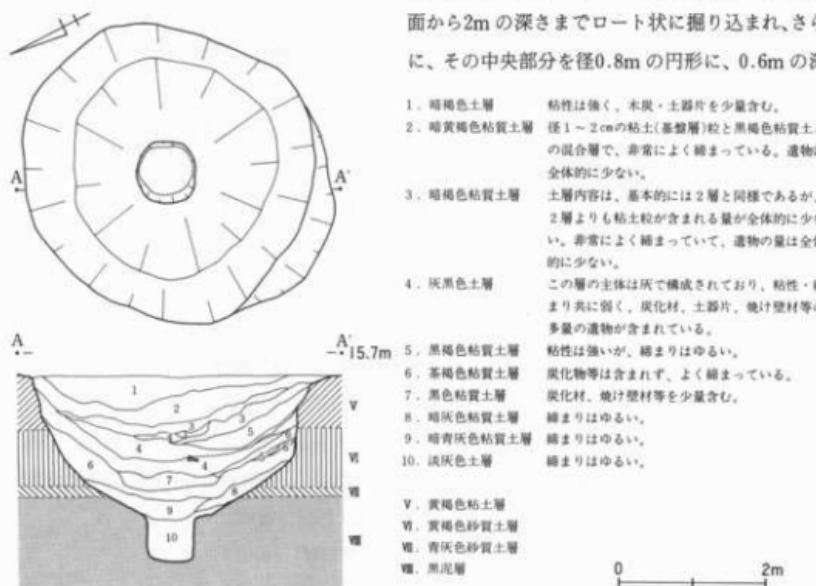
C-7区に位置する土坑で、3.6m×2.4mの精円形を呈しており、深さは0.1mを測る。出土遺物はSK-1と同様である。

#### SK-3 (第13図) (図版7)

C-7区に位置する土坑で、1.4m×1mの精円形を呈しており、深さは0.2mを測る。出土遺物に



第14図 SK-4・5 実測図 (S = 1/80)



第15図 SE-1 実測図 (S = 1/80)

は、須恵器杯蓋、土師器杯・甕などがあるが、いずれも小片である。

#### SK-4 (第14図) (図版7)

C-7区に位置する土坑である。径0.8mほどの小規模なもので、掘り込みも0.06mと浅い。SD-8に切られている。出土遺物は、大型の土師器杯の1点のみである。

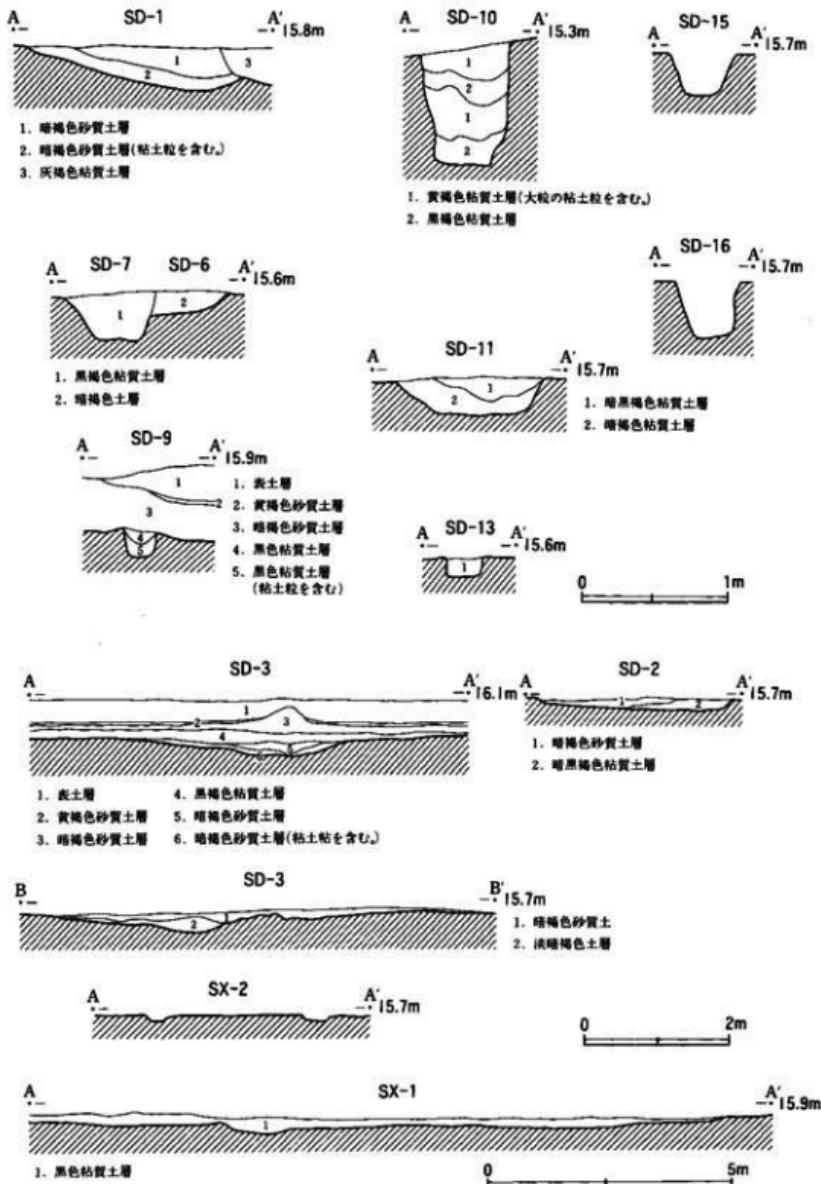
#### SK-5 (第14図) (図版7)

C-7区に所在する土坑で、径1.2mの不整円形を呈する。掘り込みの深さは0.1mと浅く、土坑東側部分では、壁の立ち上がりは確認できなかった。出土遺物は、非常に少なく、須恵器杯蓋の紐が1点出土しているのみである。

#### SE-1 (第15図) (図版8)

E-3区に位置する井戸である。平面プランは確認面で直径4.2mの円形を呈し、断面形は、確認面から2mの深さまでロート状に掘り込まれ、さらに、その中央部分を径0.8mの円形に、0.6mの深

- |             |                                                                       |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 1. 単褐色土層    | 粘性は強く、木炭・土器片を少量含む。                                                    |
| 2. 単黄褐色粘質土層 | 径1~2cmの粘土(基盤層)粒と黒褐色粘質土との混合層で、非常によく締まっている。遺物は全体的に少ない。                  |
| 3. 単褐色粘質土層  | 土層内容は、基本的には2層と同様であるが、2層よりも粘土粒が含まれる量が全体的に少ない。非常によく締まっている。遺物の量は全体的に少ない。 |
| 4. 灰黑色土層    | この層の主体は灰で構成されており、粘性・締まり共に弱く、炭化材、土器片、焼け壁材等の多量の遺物が含まれている。               |
| 5. 黑褐色粘質土層  | 粘性は強いが、締まりはゆるい。                                                       |
| 6. 基褐色粘質土層  | 炭化物等は含まれず、よく締まっている。                                                   |
| 7. 黑色粘質土層   | 炭化材、焼け壁材等を少量含む。                                                       |
| 8. 单褐色粘質土層  | 締まりはゆるい。                                                              |
| 9. 单青灰色粘質土層 | 締まりはゆるい。                                                              |
| 10. 浅灰色土層   | 締まりはゆるい。                                                              |



第16図 SD・SX-1,2 土層断面図

今まで垂直に掘り込んでいる。井戸枠のない素掘りの井戸である。

井戸内の堆積状況は、褐色粘質土主体の上層、灰が主体の中層、自然堆積層と思われる暗灰色粘質土層の下層の3層に大別することができる。このうち、中層中からは渥美・常滑の甕、多数の土師質土器小皿、青磁碗、銅鏡など多くの遺物が出土し、これと同時に多量の灰・炭化材・焼け壁材と思われる焼土塊が出土しており、焼失家屋の廃材等を投棄した可能性も考えられる。また、最下層の自然堆積層と思われる部分からは木製品が中心に出土しており、この層には灰や炭化材の混入は見られなかった。以上の堆積状況から、確認面から深さ1.8m付近までは自然堆積が行われた後、焼失家屋のものと思われる灰や炭化材が投入され、灰層が形成されたと考えられる。そして、最後に、基盤層のV層を主体とした粘質土によりこの井戸は完全に埋め戻されている。その時期は、上層中に中層と同様の遺物が多く含まれているところから、中層形成時とほぼ同時期と考えられる。

#### SX-1 (第16・17・18図)

E-3区からE-4区にかけて位置する深さ0.22mほどの不整形の浅い窪地状遺構で、中央部を東南から北西にかけて幅0.6m、深さ0.1mの溝状の落ち込みが走っている。覆土は、黒色粘質土が主体を占めている。遺物は土器類を中心として遺構全域から多量に出土し、年代的には、古墳時代前期と平安時代中期のものが主体を占めている。また、SD-15、16との重複関係が認められる。SD-15、16はSX-1底面で確認され、覆土もSX-1と同様であることから、SX-1と同時かそれ以前に埋没していると考えられる。

#### SX-2 (第16・19・20図)

C-5区に位置する、幅0.3m、深さ0.1mほどの小さな溝状遺構4本から構成されている。この小さな溝状遺構は、約1.8mの間隔で2本は連続して、2本はこれに直行する形で平行して並んでおり、覆土は、いずれも黒色の粘質土である。この遺構は、その形状から耕作に関連した歛状小溝である可能性が考えられる。

#### SD-1 (第16・17・18図)

F-3区からE-4区にかけて位置し、北東から南西に向けて直線的に走る溝状遺構で、調査区東端の現在の畦畔の直下に検出された。深さは0.3m前後で、南西に向かうに従って多少深くなる。断面形は緩やかな舟底状を呈し、覆土は暗褐色砂質土が主体を占めており、この土層中からは須恵器や中世陶器が出土している。また、この溝が完全に埋没した後に同一の場所に幅の狭い溝が再び掘られており、その溝は暗灰色粘質土により埋没している。この土層中からは近世陶器が出土している。他遺構との切り合い関係では、SE-1、SD-17、18、19の各遺構を切っている。

#### SD-2 (第16・18・19図)

D-4区からE-5区にかけて位置し、西北から東南に向けて直線的に走る溝状遺構でSD-

1と直行する。この溝も現在の畦畔に沿って検出された。幅は中央で2m、東端で広がり、4mを測る。深さは、0.2mである。断面形はSD-1と同様であるが、東端部分では溝底部が、切りあった形で2条に分かれており、この溝が掘り直されていることが確認できる。切り合い関係では、SD-11を切っており、SD-3、5と共に存する。

#### SD-3 (第16・19・20図)

D-5区からD-6区にかけて位置する溝状遺構で、D-4区でSD-2から分岐し北東から西南にかけて直線的に走り、C-6区でSD-4と合流した後、直角に曲がり東南方向に走っている。幅はSD-2との分岐地点で1m、SD-4との合流地点で4mと広がっており、深さも分岐地点で0.1m、合流地点で0.3mと南西に行くに従って次第に深くなっている。断面形や覆土はSD-2と同様で、合流地点付近では溝底部が切りあった形で数条に分かれており、同一場所での掘り直しが行われていると考えられる。この溝も現在の畦畔に部分的に沿って検出されている。出土遺物には土師器・須恵器の小片がある。切り合い関係ではSD-7、10、12を切っており、SD-4と共に存する。

#### SD-4 (第20図)

C-6区に位置し、SD-2と平行して直線的に走る溝状遺構で、その東端はSD-3と合流する。幅は西端部で2m合流部分で1mとなっており、深さは、西端部で0.1m合流部分で0.2mと、東南に行くに従い深くなっている。覆土や断面形はSD-3と同様である。切り合い関係ではSD-13を切っている。この溝も現在の畦畔に沿って検出されている。

#### SD-5 (第18図)

D-4区に位置し、SD-1と平行して直線的に走る溝状遺構で、南端部分はSD-2と合流する。幅1m、深さ0.05m程で、合流部分で若干深くなっている。覆土・断面形はSD-2と同様である。

#### SD-6 (第16・21図)(図版7)

B-7区からC-7区にかけて位置し、西北から東南にかけて走る溝状遺構である。幅1m、深さ0.2mをそれぞれ測り、東南端部で若干深くなっている。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は舟底状を呈しており、覆土は暗褐色の粘質土が主体をなす。出土遺物には、土師器・須恵器の小片やスラグがある。切り合い関係ではSB-1を切って、SD-7、8に切られている。

#### SD-7 (第16・21図)

C-6区からB-7区にかけて位置し、東北から西南にかけて走る溝状遺構である。幅0.6m、深さ0.25mをそれぞれ測るが、西端部分では深さが0.3mとなり、西南方向に向けて緩やかに傾斜している。断面形は逆台形を呈し、覆土は黒色粘質土が主体を占めており、土師器の細片が含まれている。切り合い関係では、SB-1、3及びSD-6を切り、SD-3により切られ

ている。

#### SD-8 (第21図) (図版7)

C-7区からB-7区にかけて位置し、ほぼ東西に走る溝状遺構である。幅0.4m、深さ0.2mをそれぞれ測り、溝底部はほぼ水平である。断面形はU字形を呈し、覆土は黒色粘質土が主体を占める。出土遺物には土師器・須恵器片が少量あるのみである。切り合い関係では、SK-4及びSD-6を切っている。

#### SD-9 (第16・21図)

B-7区からC-7区にかけて位置し、西北から東南にかけて走る細い溝状遺構である。幅0.15m、深さは東端部で0.2mをそれぞれ測り、東に行くに従い、次第に深くなっている。断面形はU字形を呈し、覆土は黒色粘質土が主体を占めている。

#### SD-10 (第16・21図)

C-6区からD-7区にかけて位置し、西北から東南にかけて直線的に走る溝状遺構である。幅0.72m、深さは、東端で0.9m、西端で1.3mをそれぞれ測り、西に行くに従って次第に深くなっている。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で、断面形は方形を呈している。覆土には大粒の粘質土(基盤層)のブロックが多量に含まれており、この溝は、掘られて、さほど時をおかずして埋め戻されたものと推測される。出土遺物は、土師器細片がごく少量出土した以外は皆無である。切り合い関係では、SD-3、7に切られている。

#### SD-11 (第16・19・20図)

D-5区からD-6区にかけて位置する溝状遺構で、北西から南東にかけてSD-3と平行して走り、北端部分はSD-2と直角に接している。また、SD-12とは直角に交差している。幅0.4m~0.6m、深さ0.2mをそれぞれ測り、溝全体は、南東方向に向けて傾斜している。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状を呈している。覆土は黒褐色粘質土が主体であり、土師器・須恵器の細片が少量含まれる。切り合い関係では、SD-2には切られているが、交差するSD-12との明確な前後関係は認められず、同時に存在した可能性が高い。

#### SD-12 (第19図)

D-5区からE-5区にかけて位置し、東から西に走る溝状遺構で、SD-3、11と直行している。幅0.4m~0.55m、深さは東端で0.2m、西端で0.3mをそれぞれ測り、西に行くに従い次第に深くなっている。断面形・覆土共にSD-11と同様で、土師器・須恵器の細片が出土している。SD-3より東の部分では、この溝の北と南側に、溝に沿って浅い溝状の遺構が検出されている。北側のものは、幅0.2m、深さ0.1m以下と小規模であり、南側では幅0.4m前後、深さ0.1m以下となっている。覆土は、いずれもSD-11と同様であり、SD-11と同時に存在したものと考えられる。切り合い関係では、SB-5に切られており、SD-3との交差部分は擾乱を受けているため明確にはしえないが、覆土の状況から考えてSD-3にも切られていると推測され

る。

#### SD-13 (第16・20図)

C-6区に位置し、東から西にかけて蛇行しながら走る溝状遺構である。幅0.3m、深さ0.1m前後をそれぞれ測り、溝全体は西方向に向けて傾斜している。断面形は方形を呈しており、覆土は黒褐色粘質土が主体を占めている。切り合い関係では、SD-4に切られている。

#### SD-14 (第17図)

F-2区からE-3区にかけて位置する溝状遺構で、東北から西南にかけてほぼ直線的に走っている。幅0.6m、深さは東端で0.9m、西端で1mをそれぞれ測り、西南に行くに従って次第に深くなっている。壁は垂直に立ち上がり断面形は方形を呈している。覆土には、SD-10と同様に大粒の粘質土(基盤層)のブロックが多量に含まれており、この溝も、掘られて時を置かずして埋め戻されたものと考えられる。出土遺物には、古式土師器(五領期)の壺・壺頬等がある。切り合い関係では、SB-6によって切られている。

#### SD-15 (第16・17図)

E-3区に位置し、東南から西北にかけて直線的に走る溝状遺構で、SD-16と直角に合流している。幅0.4m、深さは東端で0.1m前後、西端で0.3m前後をそれぞれ測り、西南に行くに従い次第に深くなっている。壁の立ち上がりは全体的に急で、断面形は「U」字形を呈している。SX-1と重複するが、覆土はSX-1と同様の黒色粘質土であり、SX-1と同時に存在した可能性が高い。

#### SD-16 (第16・17図)

F-2区からE-3区にかけて位置し、北東から南西にかけてSD-1と平行して走る溝状遺構である。SD-14と交差する場所では溝は確認できず、部分的に中断しており、南端部分は直角にSD-15と合流している。幅0.4m、深さは北端で0.2m、南端合流部分で0.4m前後をそれぞれ測り、南西に行くに従い次第に深くなっている。壁の立ち上がりは全体的に急で、断面形は「U」字形を呈している。覆土はSD-15と同様の黒色粘質土であり、SD-15と同時に存在したものと考えられる。

#### SD-17 (第17図)

E-3区からF-3区にかけて位置する溝状遺構で、西北から東南にかけて多少蛇行しながら走っている。幅0.4m、深さは西端部分で0.4m、東端部分で1mをそれぞれ測り、東南に行くに従い深くなっている。壁は垂直に立ち上がっており、断面形は方形を呈する。覆土は黒色粘質土で、大粒の粘土ブロックが多く含まれている。

#### SD-18 (第17図)

E-3区に位置し、西北から東南にかけて走る短い溝状遺構であり、SD-1と直行している。幅0.7m、深さは0.3mをそれぞれ測る。壁の立ち上がりは全体的に緩やかで、断面形は舟

底状を呈しているが、溝底面は北側部分が、やや高くテラス状になっており、南側部分は深く掘り込まれた形となっている。このことから、この溝は、同一場所において掘り直しが行われていると考えられる。覆土は黒褐色の粘質土が主体を占めており、土師器・須恵器片が含まれている。

#### SD-19 (第18図)

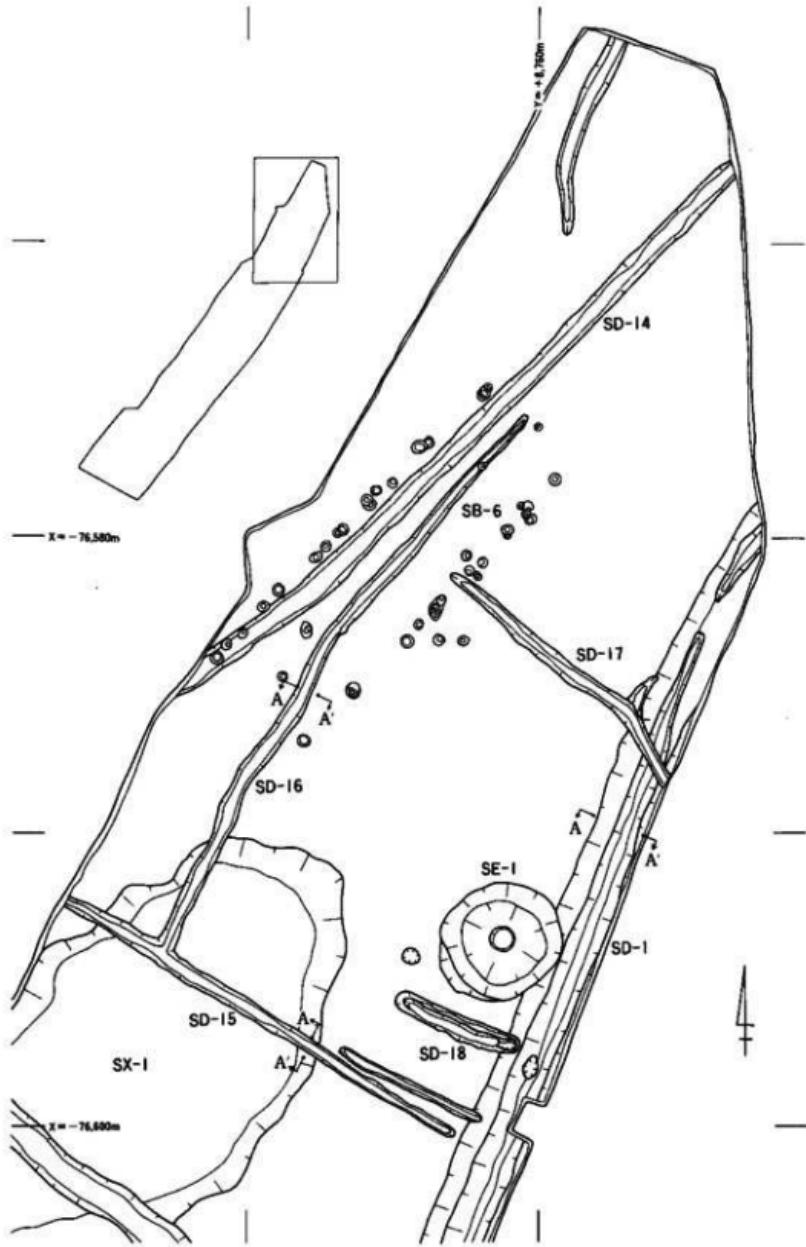
E-4区に位置する溝状遺構で、西から東にかけて走っている。幅1m、深さ0.1mをそれぞれ測り、溝は全体に東方向に傾斜している。断面形は舟底状を呈しており、覆土は黒色粘質土が主体を占めている。

#### SD-20 (第18図)

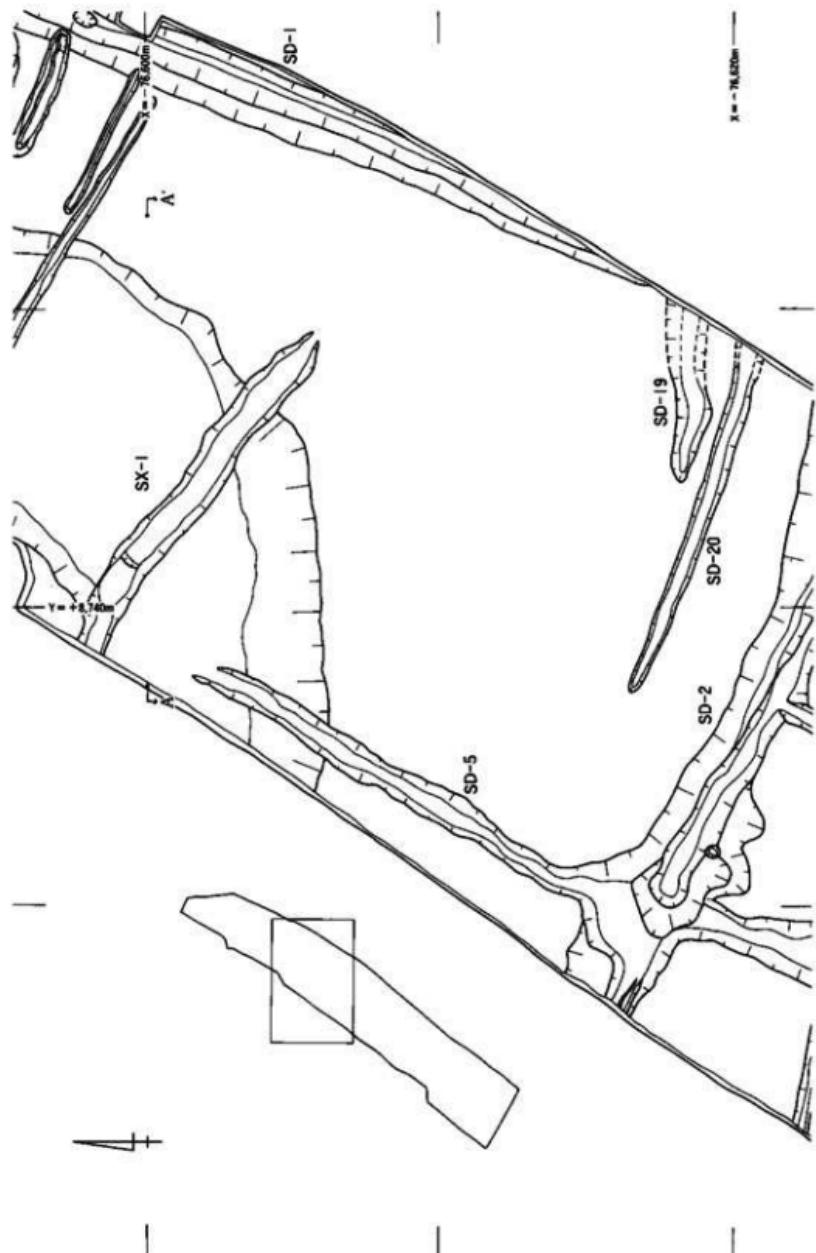
D-4区からE-5区にかけて位置する溝状遺構で、西から東にかけて走っている。幅0.8m、深さ0.2mをそれぞれ測り、溝全体は、東方向に傾斜している。この溝は現在の畦畔の直下で検出されており、覆土は締まりのない暗灰色粘質土を主体としている。出土遺物には、近世陶器が少量検出されたに過ぎない。

	棟方位	規模	庇	桁行m (尺)	梁間m (尺)	庇m (尺)
SB-1	N~74°~E	2以上×2	南	2.4 (8)	2.25 (7.5)	1.5 (5)
SB-2	N~76°~E	2以上×2	北	1.95 (6.5)	1.95 (6.5)	1.2 (4)
SB-3	N~71°~E	3×2	北	1.5 (5)	1.8 (6)	1.2 (4)
SB-4	N~64°~E	?×2			1.8 (6)	
SB-5	N~76°~E	2以上×2	北、西	2.1 (7)	2.1~1.8 (7~6)	0.6 (2)
SB-6	N~45°~E	3前後×1		1.2 (4)	4.2 (14)	

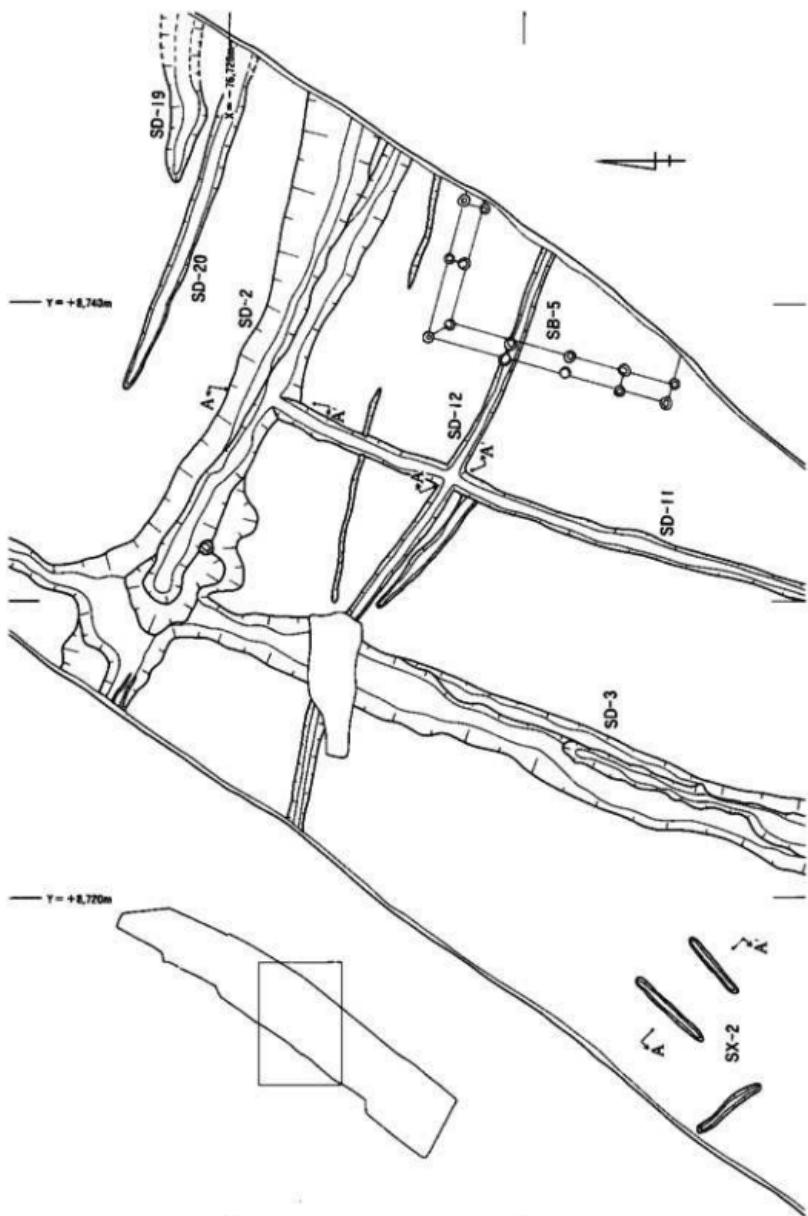
第2表 外箕輪遺跡掘立柱建物一覧



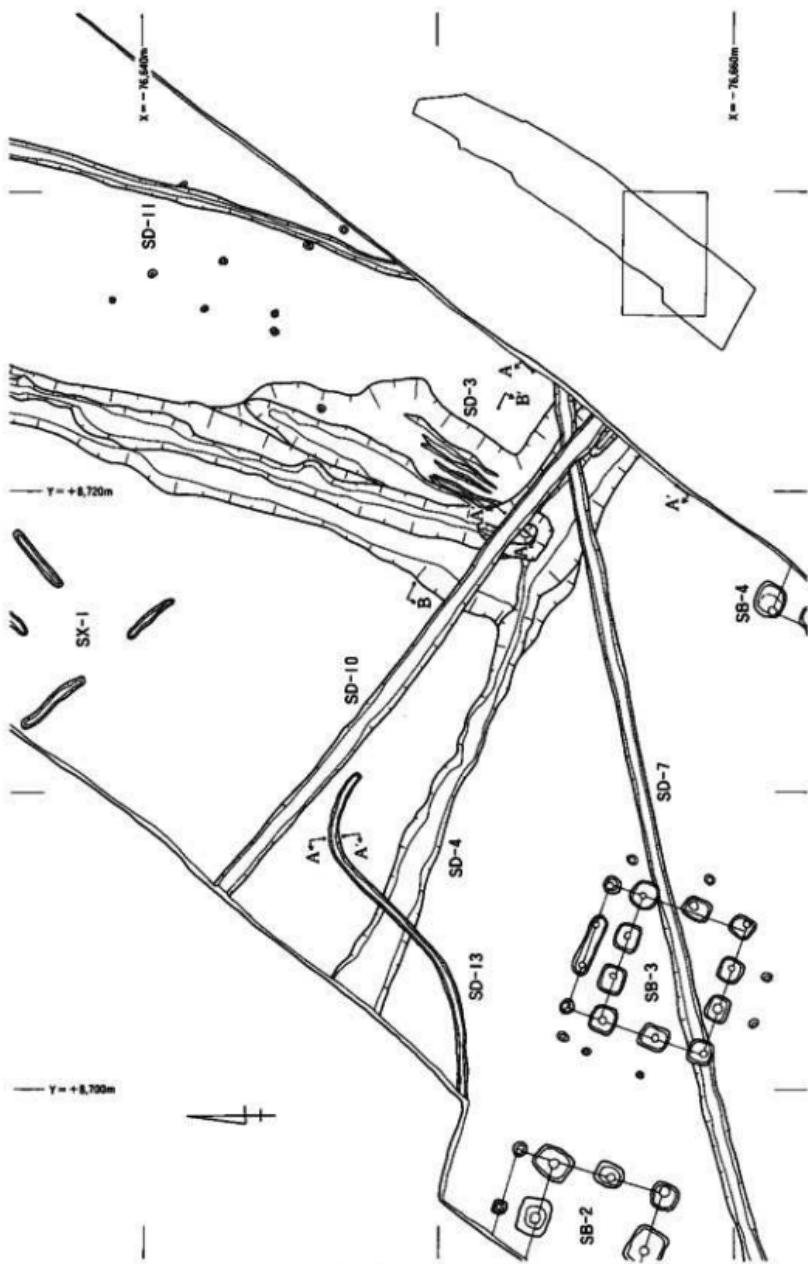
第17図 外筈輪遺跡遺構全体図(1) ( S = 1/200 )



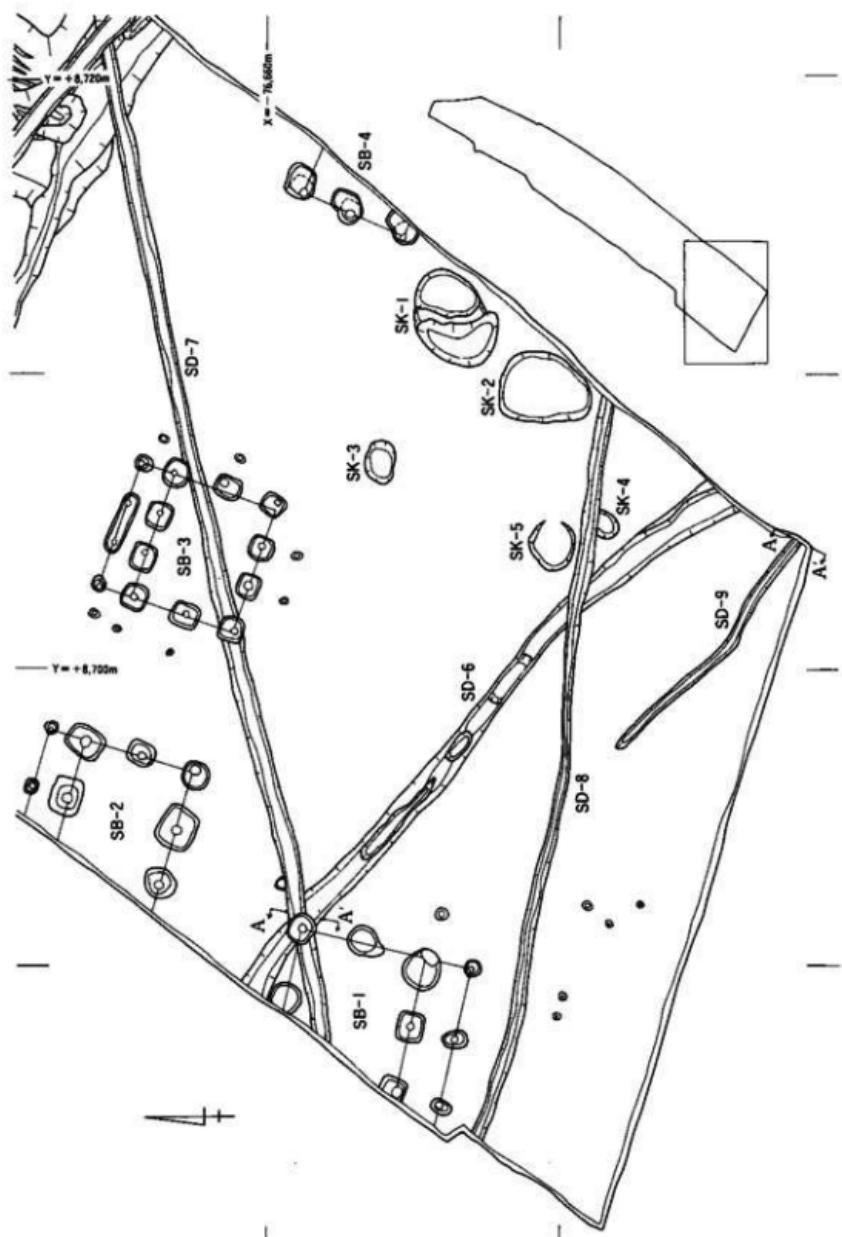
第18図 外堀輪遺跡構全図(2) (S = 1/200)



第19図 外輪跡構造全体図(3) (S = 1/200)



第20図 外英輪遺跡遺構全体図(4) (S = 1/200)



第21図 外輪遺跡遺構全図(5) (S = 1/200)

### 3. 遺 物

今回の調査では、縄文時代から近世にかけての遺物が出土しているが、その中心は奈良時代から鎌倉時代までの遺物が占めている。ここでは遺構ごとに、遺物について記述することとする。

#### SB-1 (第22図1~8) (図版13・20)

遺物はいずれも、柱穴抜き取り穴からの出土である。1は、推定口径16.8cmの須恵器高杯で、脚部を欠損している。杯部と脚部の接合部分には回転ナデが加えられており、口縁端部外面には沈線が巡っている。杯部内面は、平滑になっており、転用窓として使用されたものと考えられる。胎土には白色針状物質と白色粒がふくまれている。2は、推定口径12.0cmの須恵器杯で、胎土の特徴は、1の高杯と類似している。3~5は、口径は11cm~12cm前後と推定される非ロクロ成形の土師器杯で、体部外面から底部にかけて手持ちヘラ削りが加えられている。胎土には赤色バミス・砂粒が多く含まれている。6は、推定口径21.2cmの須恵器壺である。胎土は非常に良く焼きしまっており、長石が含まれ、内・外面にはマンガンの吹き出しが、内面から口縁部にかけては降灰が、それぞれ認められる。7は、推定口径23.6cmの土師器壺であり、体部外面には縱方向のヘラ削りが、体部内面には横方向のヘラナデが、それぞれ施されている。胎土は土師器杯と類似している。8は、須恵器壺の胴部片で、体部外面には縱方向の平行叩きが施される。胎土は、暗褐色から茶褐色を呈しており、白色砂粒と雲母粒を多く含んでいる。この他に、須恵器壺とスラグの小片が出土している。

#### SB-2

柱穴掘形内から土師器杯と土師器壺の小片が出土しているが、実測不可能である。

#### SB-3

柱穴掘形内から土師器杯と須恵器壺の小片が出土しているが、実測不可能である。

#### SB-4 (第22図9~11)

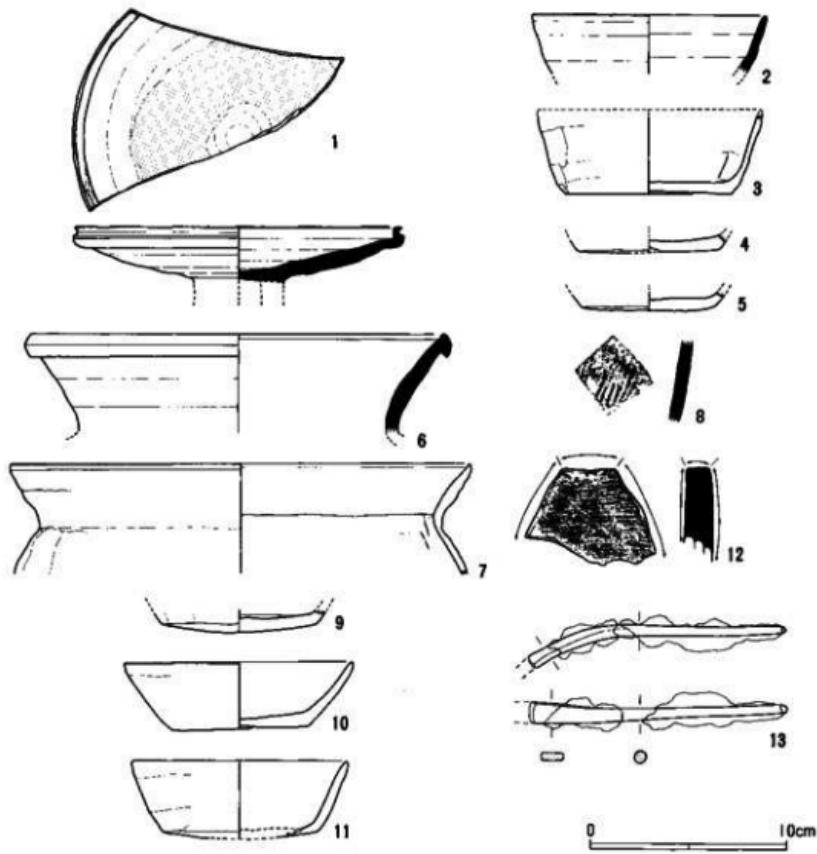
遺物は、いずれも柱穴掘形内からの出土である。9~11は、非ロクロ成形の土師器杯で、推定口径11cm~11.7cm、器高3.4cm~3.9cmを計る。器面の摩滅が著しいが、体部外面から底部にかけて、僅かに手持ちヘラ削りの痕跡を認めることができる。胎土には赤色バミス・細砂粒が多く含まれる。

#### SB-5

柱穴掘形内から土師器・須恵器の小片が出土しているが、実測不可能である。

#### SB-6 (第22図12、13) (図版13・20)

遺物は、いずれも柱穴掘形内からの出土である。12は須恵器壺の胴部片で、外面には細かな平行叩きが施されている。胎土には白色砂粒が多く含まれ、断面及び内・外面は磁石として使用されている。13は用途不明の棒状鉄製品で、両端部は欠損している。一方の端部断面は径0.4

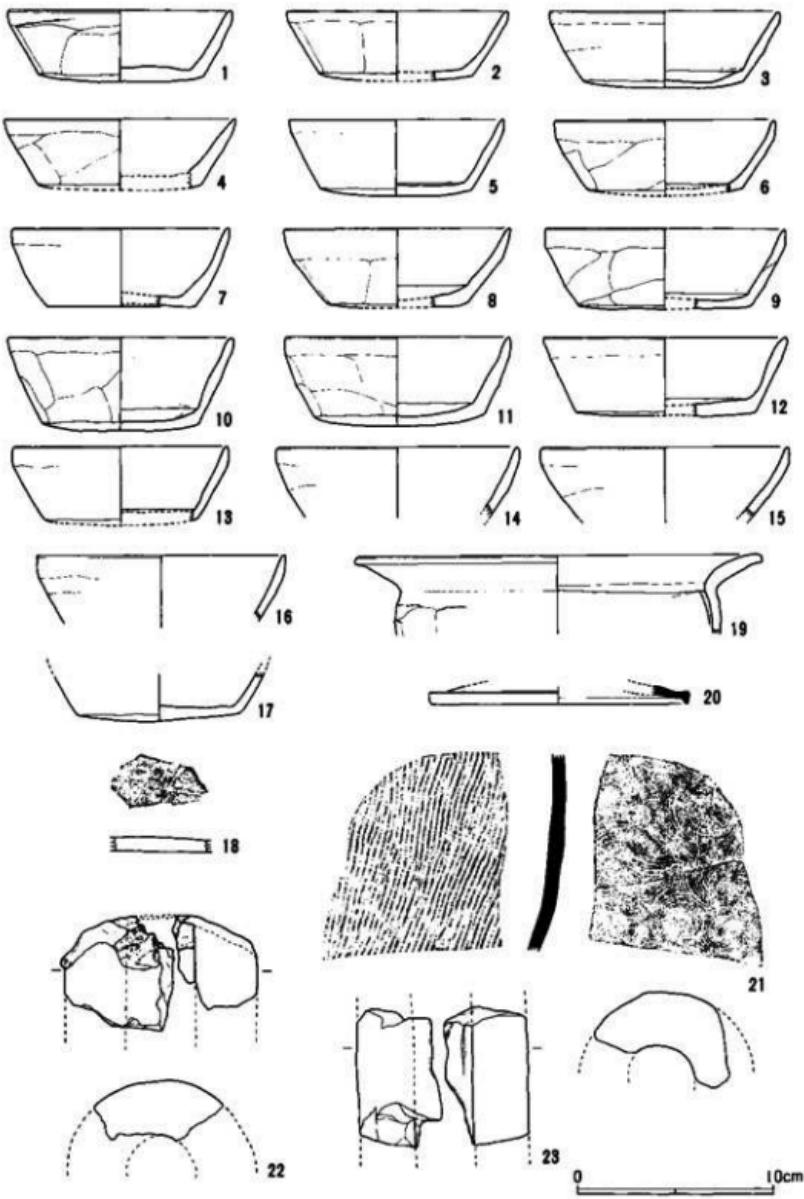


第22図 SB-1~6 出土遺物実測図

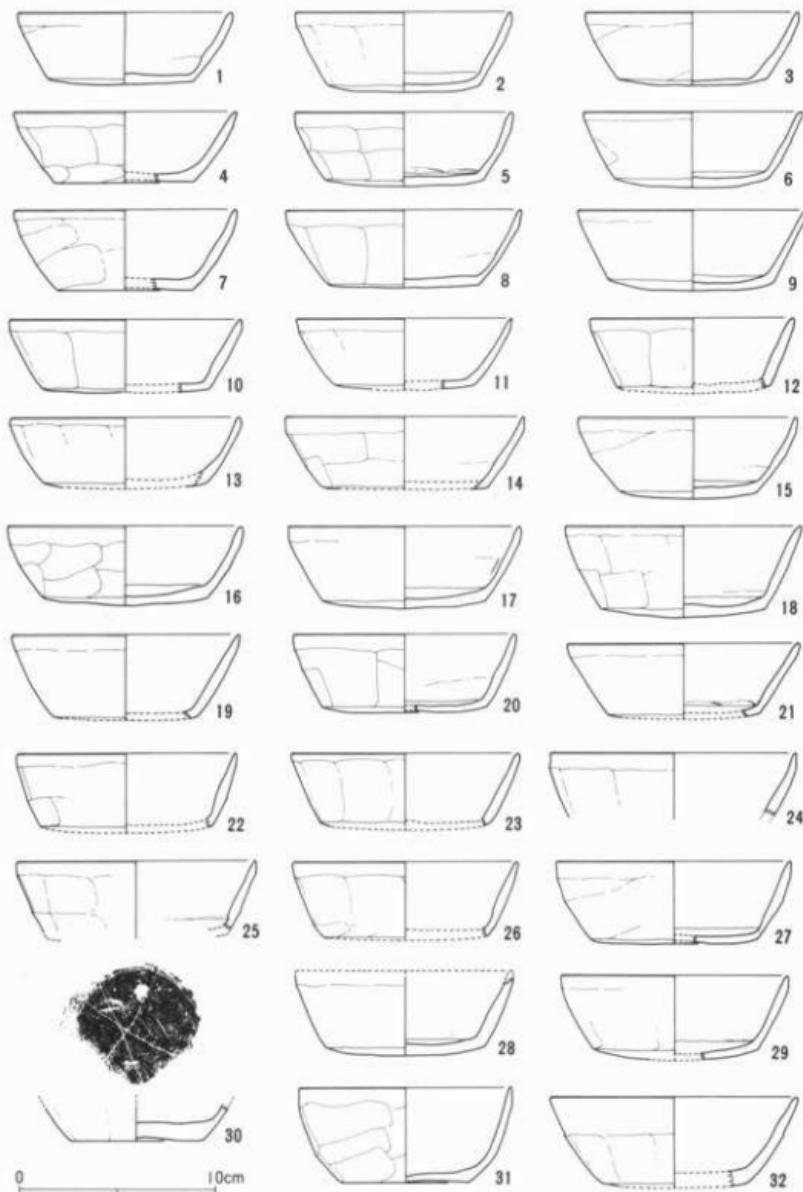
cmの円形を呈し、もう一方の端部断面は $0.4\text{cm} \times 1.2\text{cm}$ の長方形を呈しており、長方形断面の部分にかけて僅かに湾曲している。

#### SK-1 (第23図) (図版13・14・19)

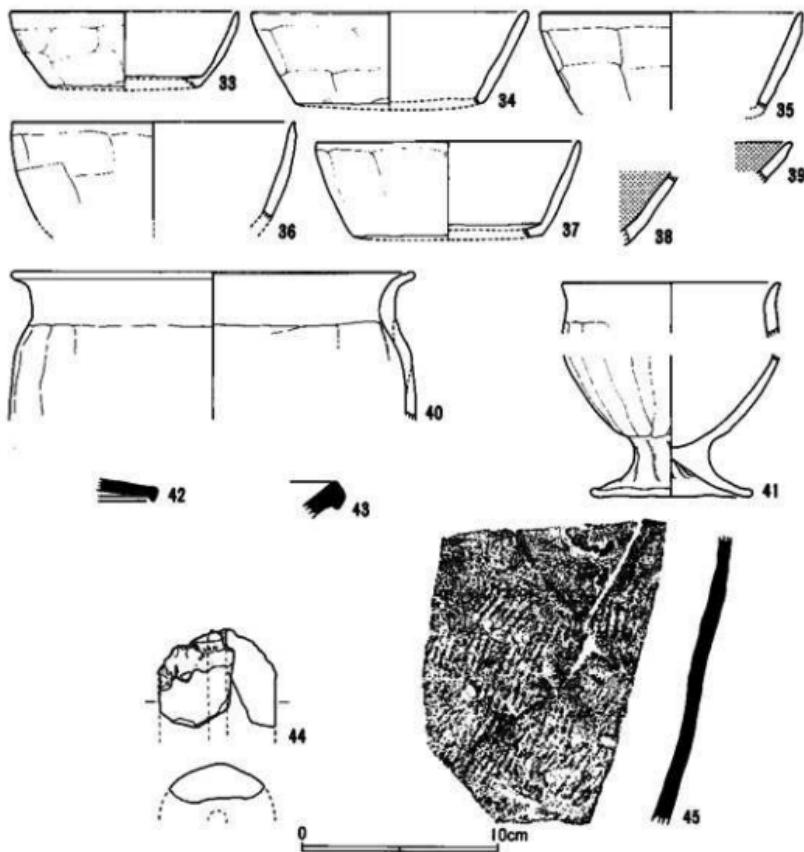
遺物は、土坑内に一括して投棄された形で出土している。1~18は、非ロクロ成形の土師器杯で、口径11.2cm~12.8cm、器高3.5cm~4.7cmをそれぞれ計る。体部外面から底部にかけて手持ちヘラ削りが、内面から口縁端部にかけて横ナデ調整が、それぞれ施されている。胎土には赤色バミス・白色針状物質・細砂粒が多く含まれ、全体的に脆弱である。また、18の内面底面には、焼成後の「X」状の線刻が認められる。19は、推定口径21.0cm前後の土師器甕である。20は、推定口径13.2cm前後の須恵器杯蓋で、色調は暗灰色から灰色を呈し、胎土には白色砂粒及び細砂粒が多量に含まれている。21は、須恵器甕脛部片であり、外面には縦方向の平行叩き



第23図 SK-1出土遺物実測図



第24図 SK-2 出土遺物実測図(1)

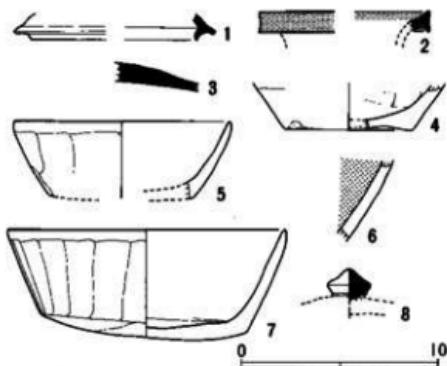


第25図 SK-2 出土遺物実測図(2)

が施され、内面には同心円状の當て具痕が残されている。内面は全体的に平滑になっており、転用観として使用されたと考えられる。色調は、外面が黒灰色、内面が灰色をそれぞれ呈している。22・23は、フイゴの羽口である。22は羽口の先端部分で、推定外径9.8cm、推定内径3.5cmをそれぞれ計る。先端部分にはスラグが厚く付着しており、胎土には白色粒・細砂粒が多く含まれ、色調は暗紫褐色を呈し、よく焼けている。23は、羽口の軸部分で推定外径9cm、推定内径3cmをそれぞれ計る。スラグの付着は認められず、胎土は小石・白色粒を多く含み、硬質によく焼けている。この他に、この土坑からは、スラグ0.83kgが出土している。

#### SK-2 (第24・25図) (図版13・14・20)

遺物は、SK-1同様、土坑内に一括して投棄された形で出土している。1～37は、非ロクロ



第26図 SK-3~5 出土遺物実測図

に回転ヘラ削りを加え、内面全面に横方向のヘラ磨き・黒色処理を施している。胎土は、淡褐色を呈し、白色針状物質を含んでいる。40は、推定口径20.5cmの土師器甕であり、体部外面には縦方向のヘラ削り、体部内面には横方向のヘラナデがそれぞれ施されている。41は、推定口径11cm前後の小型土師器台付き甕であるが、器高は不明である。体部外面には縦方向のヘラ削りが施され、底部に手捏成による台部が付けられている。42は須恵器蓋の口縁部の小片で、口径は不明であるが、胎土は明灰色を呈し、白色粒が含まれている。43は須恵器甕の口縁部の小片で、これも口径は不明であるが、胎土は暗灰色を呈している。45は、須恵器甕の副部片である。全体的に脆弱で、器面の剥落が著しいが、僅かに外面に縦方向の平行叩きが認められる。胎土は暗褐色から褐色を呈し、白色粒が含まれる。44はフイゴの羽口の先端部分である。推定外径5.8cm、推定内径0.9cmを計る。先端部分にはスラグが多く付着し、胎土は暗紫褐色から赤橙色を呈しており、白色粒及び砂粒を多く含んでいる。また、この土坑からは2.53kgのスラグが出土している。

### SK-3 (第26図 1~6)

遺物はいずれも細片で、土坑覆土中から出土した。1は須恵器杯蓋である。口縁部の細片のため口径は不明であるが、胎土は灰白色を呈し、硬質である。2は灰釉陶器長甕の口縁部片である。小片のため口径は復元できないが、灰釉が全体に付着し、胎土は灰白色を呈している。3は須恵器杯蓋の天井部片である。胎土は暗灰色を呈し、白色粒・白色針状物質を含む。4は土師器甕の底部である。外面には横方向のヘラ削りが、内面には横方向のヘラナデがそれぞれ施されている。5は推定口径11cm前後の非ロクロ成形の土師器杯で、体部外面に手持ちヘラ削りが施されている。6は大型の黒色ロクロ土師器杯の体部片で、内面にはヘラ磨き・黒色処理を施している。胎土は明褐色を呈し、黒斑が認められ、白色針状物質を多く含む。この土坑からはこの他に、ごく少量であるがスラグも出土している。

成形の土師器杯である。法量により口径10.9cm~12.6cm、器高3.7cm~4.2cmのもの、口径13cm~13.5cm、器高5cm前後のもの、口径14.1cm~14.3cm、器高5cm以上のものの3タイプが認められる。調整技法・胎土とともに前述の非ロクロ成形の土師器杯と同様である。また、30の内面底部には「＊」状の焼成後の線刻が認められる。38・39は、口縁部と体部の小片のため口径・器高ともに不明であるが、大型の黒色ロクロ土師器杯と思われる。ロクロ成形の後、体部下端

#### SK-4 (第26図7) (図版14)

遺物は少なく、7の土師器杯を除き、總てが土師器小片である。7は、非クロ成形の土師器杯で、口径14.2cm、器高5.4cmを計る大型のものである。調整技法・胎土とともに前述のものと同様である。

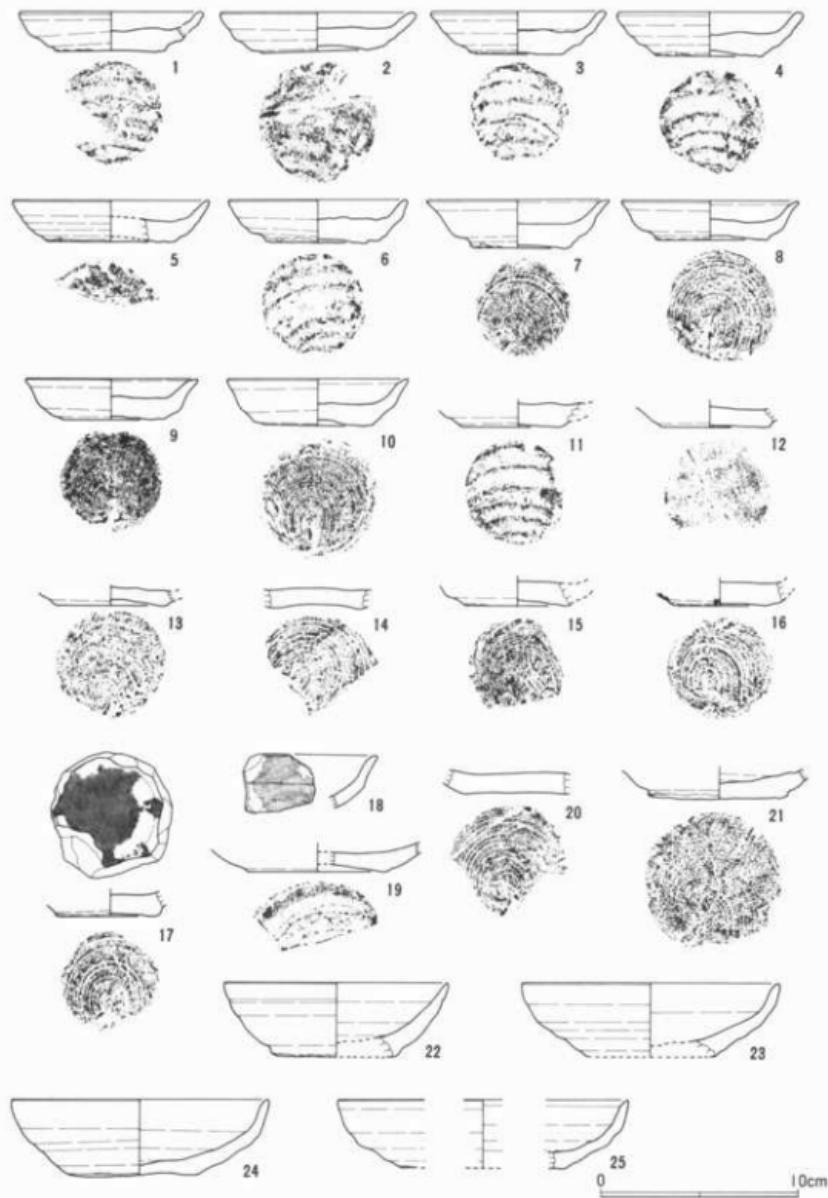
#### SK-5 (第26図8)

遺物は少なく、全てが須恵器・土師器の小片である。実測可能な遺物は、5の須恵器杯蓋紐のみである。胎土は暗青灰色を呈し、硬質である。

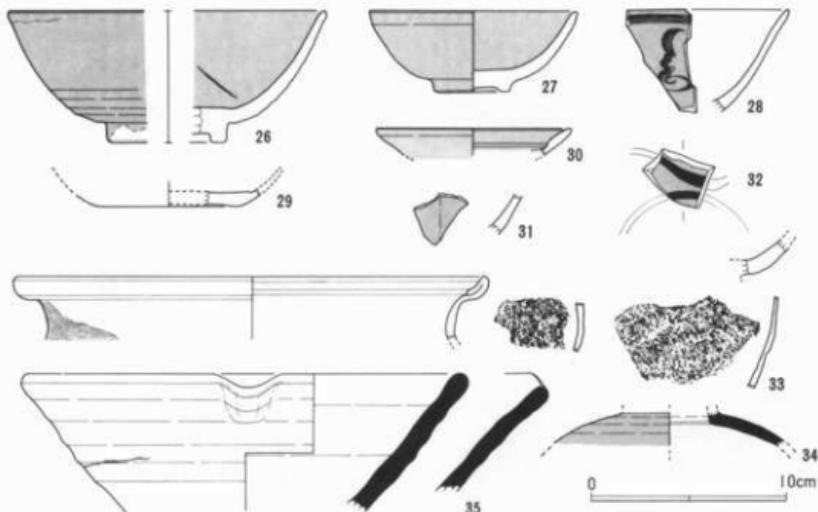
#### SE-1 (第27・28・29・30・31・32図) (図版15~19)

遺物は、いずれも井戸の覆土内から出土している。1~17は、ロクロ成形の土師質土器小皿で、口径8.8cm~10.0cm、器高1.9cm~2.4cmをそれぞれ計る。これらの小皿は、形態・成形技法などから以下の3タイプに分類することができる。A類(1~6・11)は、口縁部を丸く仕上げ、底部の切り離しが静止糸切りによる。胎土は淡明褐色を呈し、赤色スコリア・白色針状物質・細砂粒を含む。B類(7~10・13~17)は、口縁端部内面に陵を作る形で仕上げられており、底部の切り離しは左回転の回転糸切りによる。胎土は、赤褐色から暗褐色を呈し、小石を多量に含む。C類(12)は、胎土が灰白色を呈し、雲母・赤色バミスを含むもので、底部の切り離しは回転糸切りによる。これらのタイプは、それぞれの土師質土器の生産地を反映しているものと考えられる。以上の土師質土器小皿のうち、16・17には、油煙と思われる黒色のタール状の付着物が認められ、特に17の内面底部ではこれが顯著である。18は、口縁部の小片であるため口径は復元できないが、非クロ成形の土師質土器小皿と思われる。これは、体部外面に指頭痕が残り、口縁部から体部内面にかけて横ナデ調整が施されており、他の土師質土器小皿とは技法的に異なるものである。胎土は土師質土器小皿B類と同様で、体部外面には16・17同様に、タール状の付着物が認められる。19~25は、土師質土器杯であり、推定口径11.5cm~14.9cm、推定器高3.5cm~3.9cmをそれぞれ計る。これらの杯類も小皿同様、A類(22~24)・B類(25)・C類(19)の3タイプに分類することができる。ただし、A類の底部切り離し技法については、摩滅が著しいため不明である。

26~28・30~32は龍泉窯系と思われる青磁である。26は無文碗(横田・森田分類I-1類)で、推定口径16.4cm、推定器高6.7cmをそれぞれ計る。釉は暗灰褐色、胎土は暗灰色を呈している。27は、口径10.8cm、器高4.2cm無文の小碗で、釉は淡明青色、胎土は、白色を呈している。30は皿I-2類と考えられ、推定口径は10cm前後である。釉は透明な緑褐色、胎土は灰白色を呈する。28は、小片のため口径は復元できないが、劃花文碗(I-4a類)である。釉は透明な黄緑色、胎土は明灰色を呈している。32は体部から高台部にかけての小片であるが、内面見込みの紋様から劃花文碗(I-2a類)と考えられる。釉は透明な青緑色、胎土は明灰色を呈している。31は体部の小片のため明確にはし得ないが、蓮弁文碗(1-5b類)の蓮弁部分の



第27図 SE-1 出土遺物実測図(1)

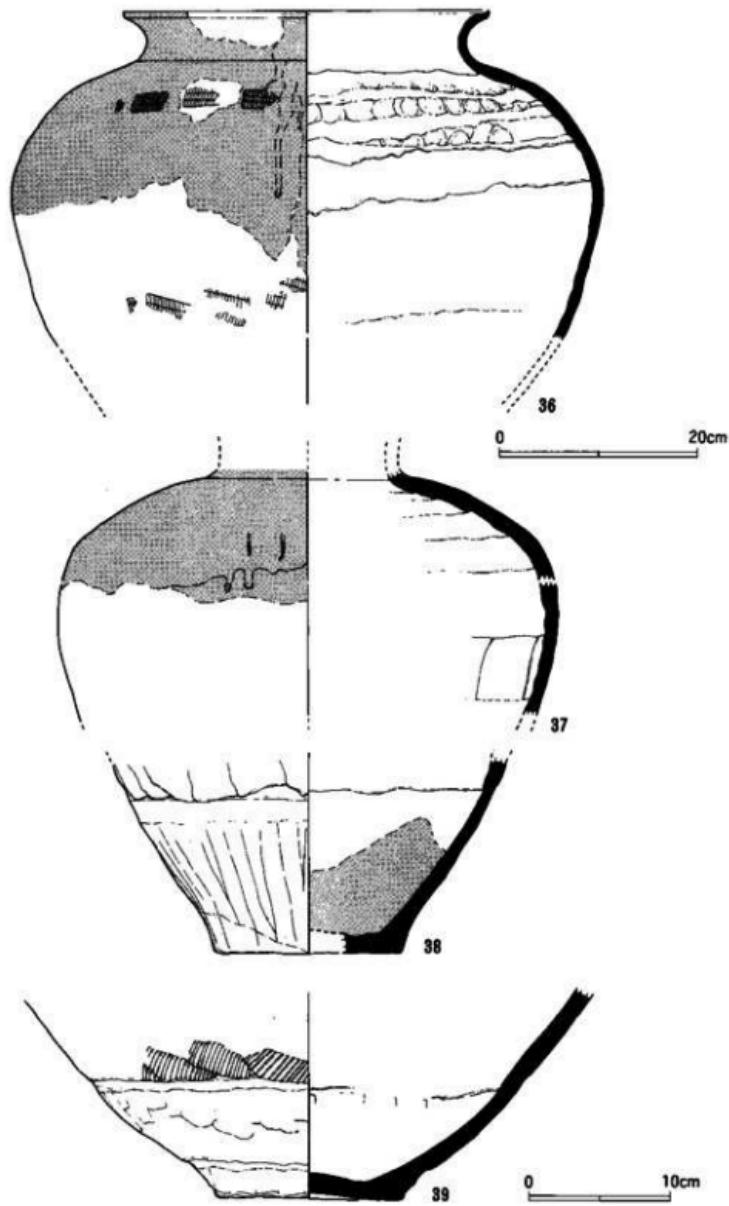


第28図 SE-1 出土遺物実測図(2)

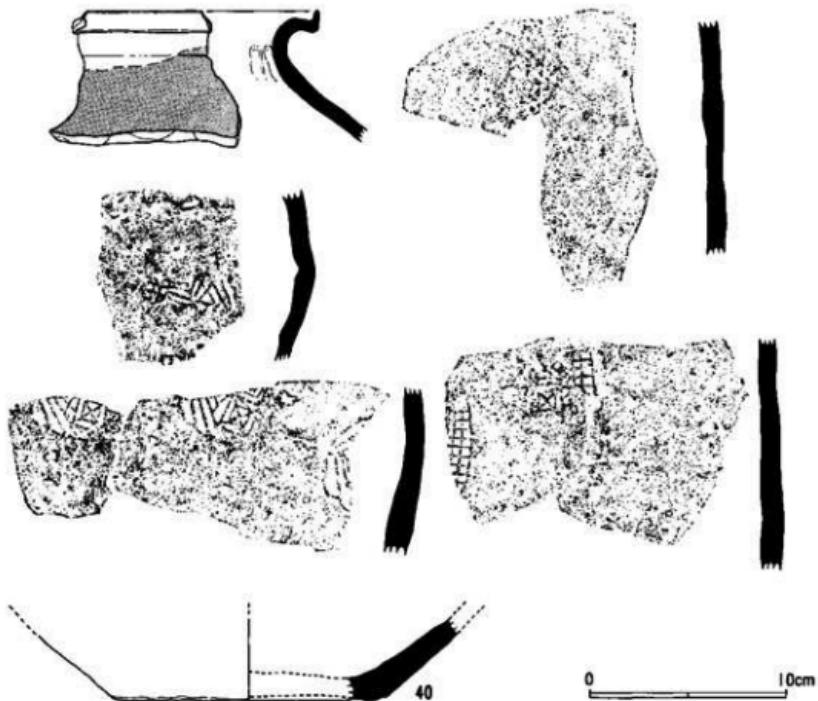
破片と考えられる。釉は透明な暗緑色、胎土は灰色を呈している。29は白磁の体部から底部にかけての破片であるが、その形態から推定して、底径7.3cm前後の白磁口禿皿(白磁皿IX類)と思われる。釉・胎土ともに白色を呈している。

33は、推定口径24.7cm前後の土鍋片である。胎土は暗灰褐色を呈し、小石を多く含むが、全体的に薄手に仕上げられている。口縁部は内側に折り返され、体部外面には不定方向の細かなハケ目調整が施されており、これらの胎土・調整技法等の特徴から、この土鍋は伊勢系のものである可能性が考えられる。また、頸部から胸部外面にかけてスヌの付着が顕著に認められる。

34は小型壺の肩部片と考えられるが、小片のため全体の器形は不明である。胎土は須質で灰白色を呈し、外面には暗緑色の灰釉が掛かっている。35は、推定口径23.2cmを計る常滑窯産と考えられる片口鉢である。胎土は、明灰色を呈し、大粒の長石粒を含む多孔質のものである。口縁部は丸く仕上げられており、体部下半には回転ヘラ削りが施されている。36は常滑窯の大甕で、推定口径は37.4cmを計る。口縁部は端部で僅かに上方に引き出されており、肩部と胴部中位付近の外面に格子状の叩き目が、肩部内面には指頭による押えの痕跡が、それぞれ明瞭に認めることができる。器表面は、鉄分の湧出のため、赤褐色を呈しており、口縁部から肩部にかけて緑色の自然釉が濃厚に掛かっている。胎土は暗灰色を呈する多孔質で、大粒の長石粒を含んでいる。37は渥美窯産の壺である。肩部付近の破片しか存在しないために全体の法量は不明である。外面は指頭によるナデで、内面は指頭及びヘラ状工具によるナデで、それぞれ器表



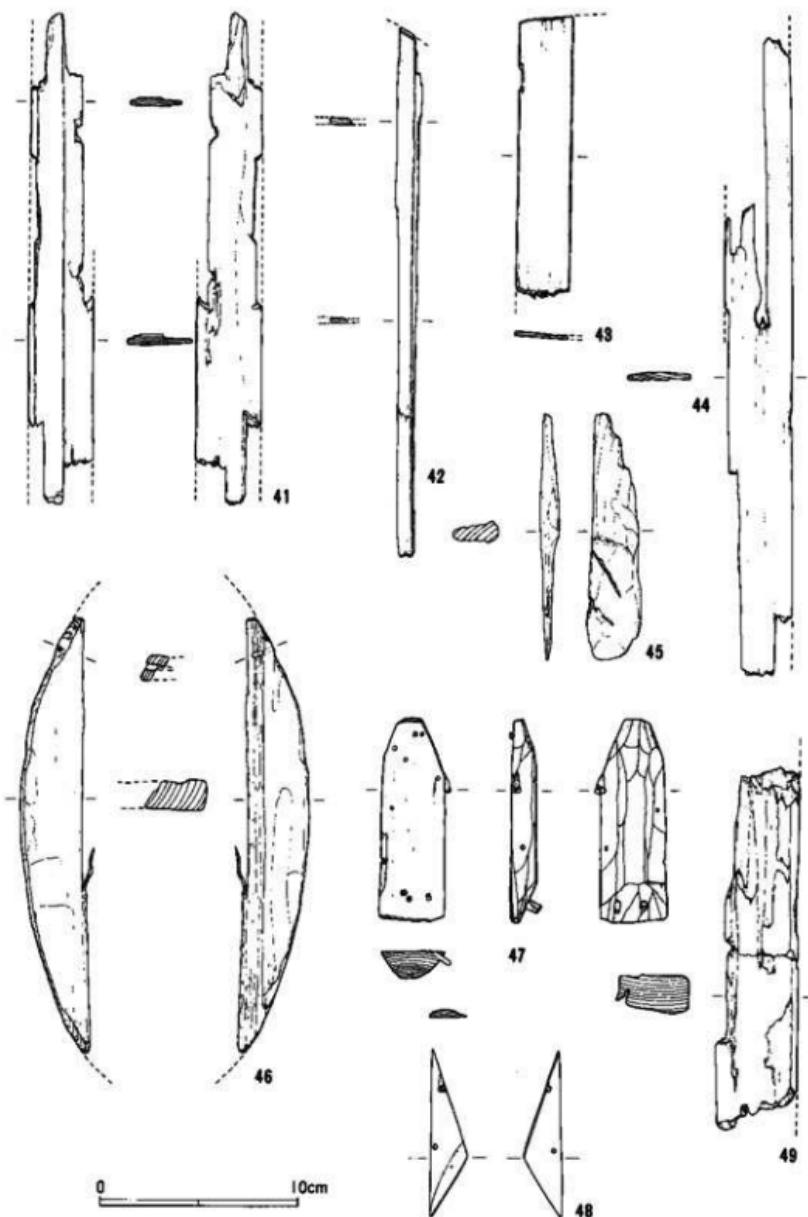
第29図 SE-1 出土遺物実測図(3)



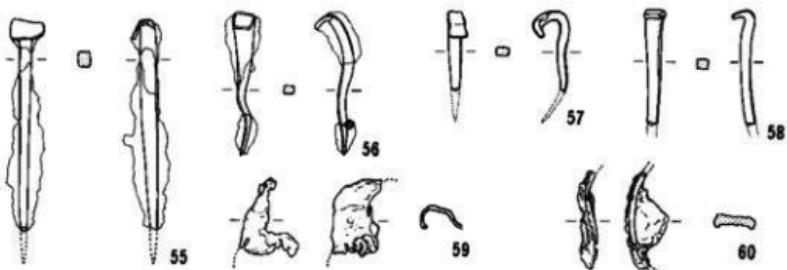
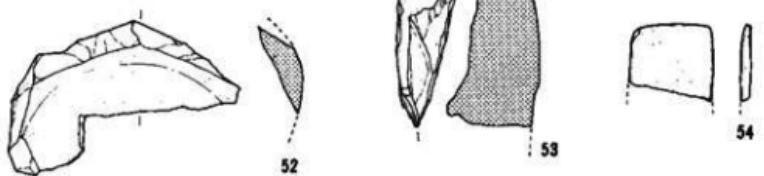
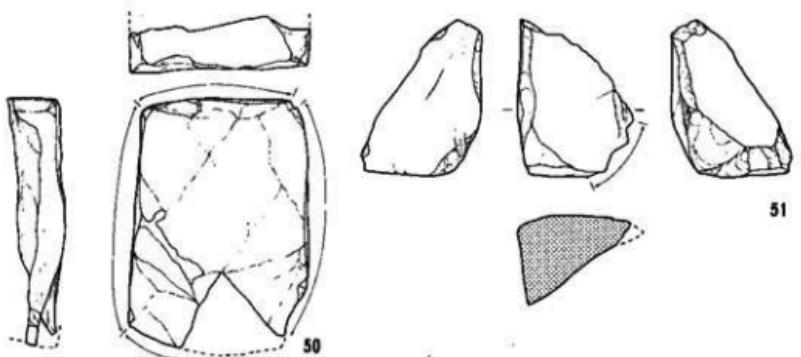
第30図 SE-1 出土遺物実測図(4)

面が整えられている。また、肩部付近には、僅かながら焼成前の線刻がみとめられ、蓮弁紋等が描かれていた可能性が高い。胎土は全体的に厚手であり、黒灰色～暗灰色を呈し、細砂粒が多く含まれる。肩部付近には、厚く暗緑色～青緑色の自然釉が掛かっている。38も渥美窯産の壺の底部片で、推定底径は13.5cmを計る。体部外面には、ヘラ状工具とハケ状工具による調整痕が認められ、底部内面には暗緑色を呈する自然釉が掛かっている。胎土の特徴は、37と同様である。39は常滑窯産の大壺の底部片で、推定底径は13.5cmである。体部外面にはヘラ状工具の調整痕と平行叩きが認められる。胎土は全体に緻密で、灰色を呈し、長石粒を少量含む。40も常滑窯産の壺片で、口縁部断面は小さな「L」字状を呈し、体部外面には幾何学文様の叩き目が認められる。器表面は鉄分の湧出のため暗赤褐色を呈しており、口縁部から肩部外面にかけて明褐色の自然釉が薄く付着している。胎土は全体に多孔質で、砂粒を多く含み、暗灰色を呈している。

41は、幅3.3cmのスギの板材である。板材の一方の面には僅かな高まりが削り出されており、側面には2箇所に目釘の痕跡が認められる。木製容器の側板である可能性が考えられる。42・



第31図 SE-1 出土遺物実測図(5)



0 10cm



0 5cm

第32図 SE-1 出土遺物実測図(6)

43とともにスギの板材であり、41と同様な性格が考えられる。44もスギの板材であるが、片面が著しく風化し、年輪が浮きだしており、建築部材の一部であるとも考えられる。45は、樹種は、不明であるが、表面は風化が著しく、部分的に火を受けており、44と同様の性格が考えられる。46は、曲げ物の底部と思われるスギの板材である。側面には目釘穴が2箇所認めることが出来る。47は、木製容器の部材と考えられ、両側面及び下端部の計5箇所に木製の目釘を打っている。材質はヒノキ属の一種と考えられる。48は、47の側面に目釘で止められた状態で出土しており、48と一体をなすものと考えられ、2箇所に目釘の痕跡が認められる。材質は47と同様であると考えられる。49は、幅3.5cm、厚さ2cm前後の角材で、建築部材の一部と考えられる。材質は、ヒノキ属類似種と考えられる。

50～54は磁石と考えられる石製品である。50～53は砂岩製であり、いずれも火を受けて破碎している。これに対し54は粘板岩製で、側面及び上面は平滑に仕上げられている。

55～58は鉄釘である。55は、推定全長12cm前後の大型のもので、56～58は推定全長7cm～8cm前後の小型のものである。59・60は青銅製品の小片である。いずれも火を受けて著しく変形しており原形・用途ともに不明であるが、60には幅0.3cmの凸帯が付けられているのが認められる。

61は元祐通宝（北宋・初鑄1086年）、62は景德元宝（北宋・初鑄1004年）である。

この他に、SE-1からは多量の炭化穀類（大麦・小麦・米）、炭化したカヤ材？、焼け壁材等が出土している。

#### SD-1 (第33図1～6)

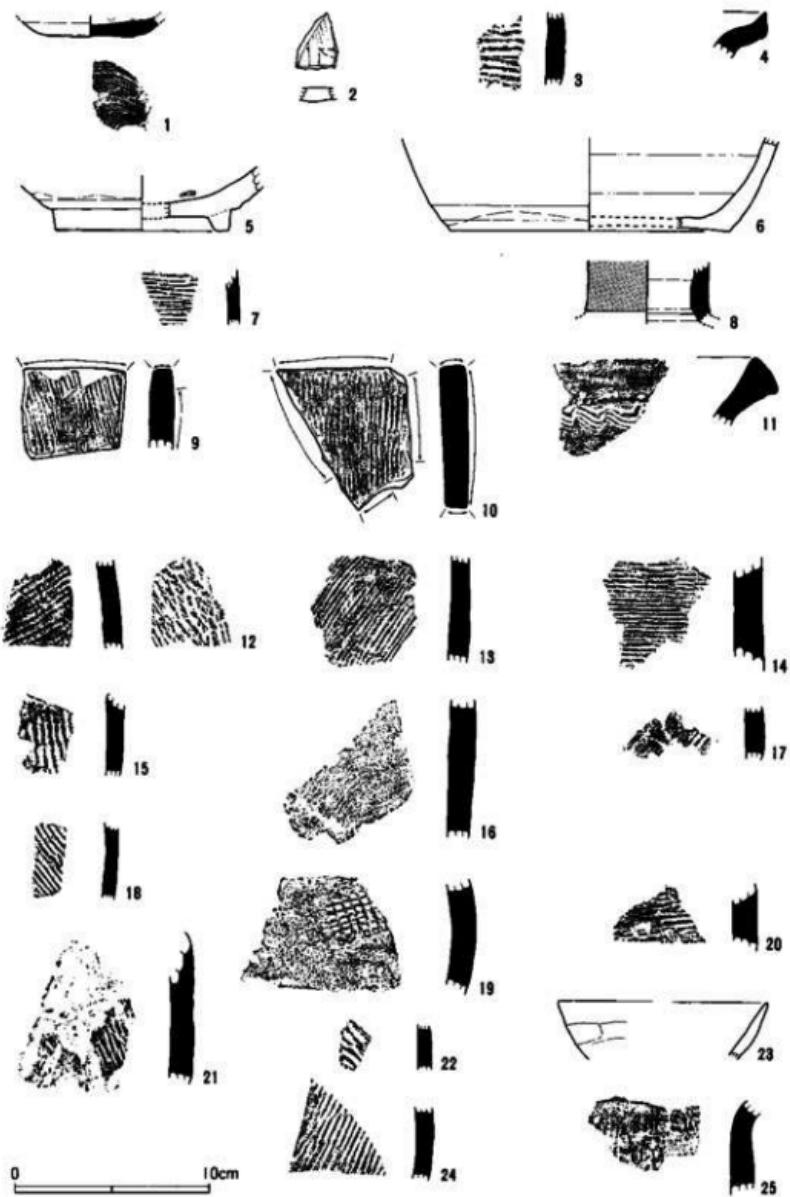
1は瀬戸産の灰釉小皿で、底部外面に回転糸切り痕が残されており、胎土は灰白色を呈する。2・5・6は瀬戸産の近世陶器である。2は皿の底部片で、内面見込みに鉄釉により文様が描かれている。5は高台付きの鉢と考えられ、6は徳利の底部片である。3は平行叩きのある須恵器壺片であり、4は常滑窯産大甕の口縁部片と思われる。この他に、須恵器壺小片や鉄砲玉が出土している。

#### SD-2 (第33図7・8)

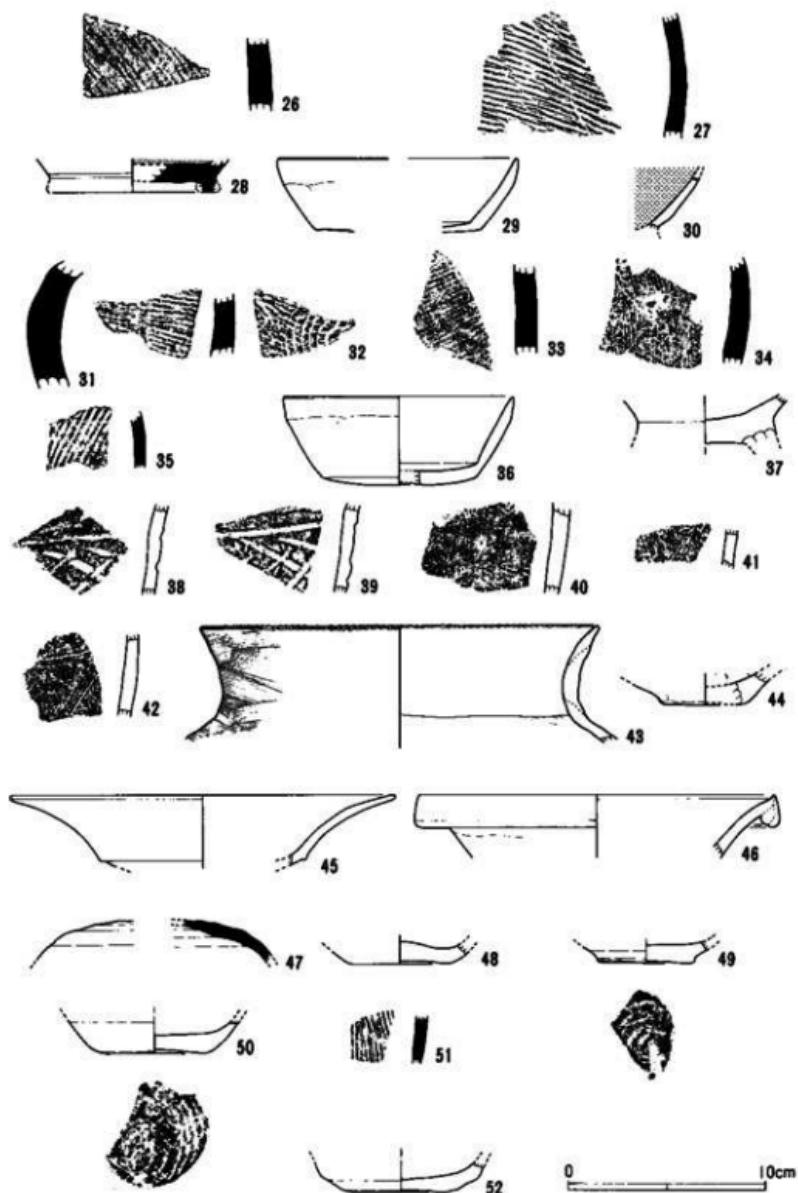
7は平行叩きのある須恵器壺片、8は灰釉陶器長頸瓶の頸部であり、暗緑色の灰釉が付着している。この他に、須恵器壺小片が出土している。

#### SD-3 (第33図9～21) (図版20)

9・10は平行叩きの施された須恵器壺片で、2点とも磁石として使用されている。11は須恵器大甕の口縁部で、外面に波状文が施されている。12～15・17・18・20・21は平行叩きの施された須恵器壺片で、このうち12と15の内面には同心円の當て具痕が明瞭に認められる。16と19は同一個体の須恵器壺の胴部片と考えられ、16には格子状の叩きが施されている。この他に須恵器壺小片が出土している。



第33図 SD 出土遺物実測図(1)



第34図 SD 出土遺物実測図(2)

#### SD-4 (第33図22)

22は、外面に平行叩きの施された須恵器片であるが、小片のため器形は不明である。この他に、ロクロ土師器杯の小片が出土している。

#### SD-5

ロクロ土師器杯と須恵器壺の破片が出土しているが、いずれも小片で実測不可能である。

#### SD-6 (第33図23～25、第34図26・27) (図版20)

23は非ロクロ成形の土師器杯の口縁部片である。25は須恵器壺もしくは壺の頸部片であり、色調は暗褐色を呈し、白色粒を多量に含んでいる。外面には平行叩きの痕跡が僅かに認められる。24・26・27は須恵器壺の胴部片と考えられ、いずれも外面には平行叩きが明瞭に認められる。この他に、須恵器壺と灰釉陶器の小片が出土している。

#### SD-7 (第34図28～35)

28は灰釉陶器長頸瓶の底部片であり、内面には暗緑色の灰釉が付着している。胎土は灰白色を呈している。29は、非ロクロ成形の土師器杯の口縁部片である。30は、黒色ロクロ土師器杯の体部片で、高台が付くものと思われる。体部内面には、横方向の細かなヘラ磨きをした後、黒色処理を施している。31～35は須恵器壺片であり、31を除き外面には、いずれも平行叩きが施されており、32の内面には同心円の当て具痕が明瞭に認められる。また、35は色調が暗褐色を呈し、白色砂粒を多く含んでいる。この他に土師器杯と灰釉陶器の小片が出土している。

#### SD-8 (第34図36・37)

36は推定口径11.9cm、推定高4.3cmの非ロクロ成形の土師器杯である。37は、台付き壺の底部片と考えられる。2次的に火を受けており、器面の剥落が著しい。

#### SD-11

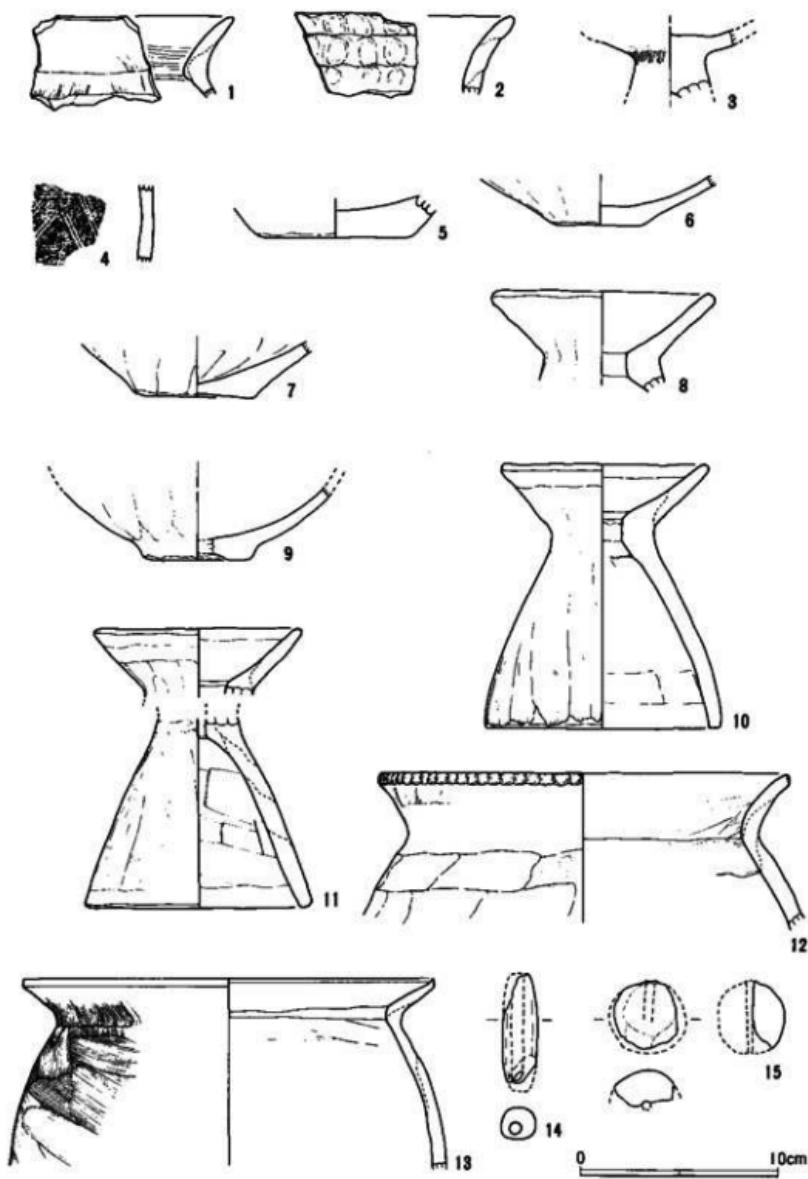
須恵器横瓶のものと思われる破片が出土しているが、小片のため実測不可能である。

#### SD-14 (第34図38～46) (図版20)

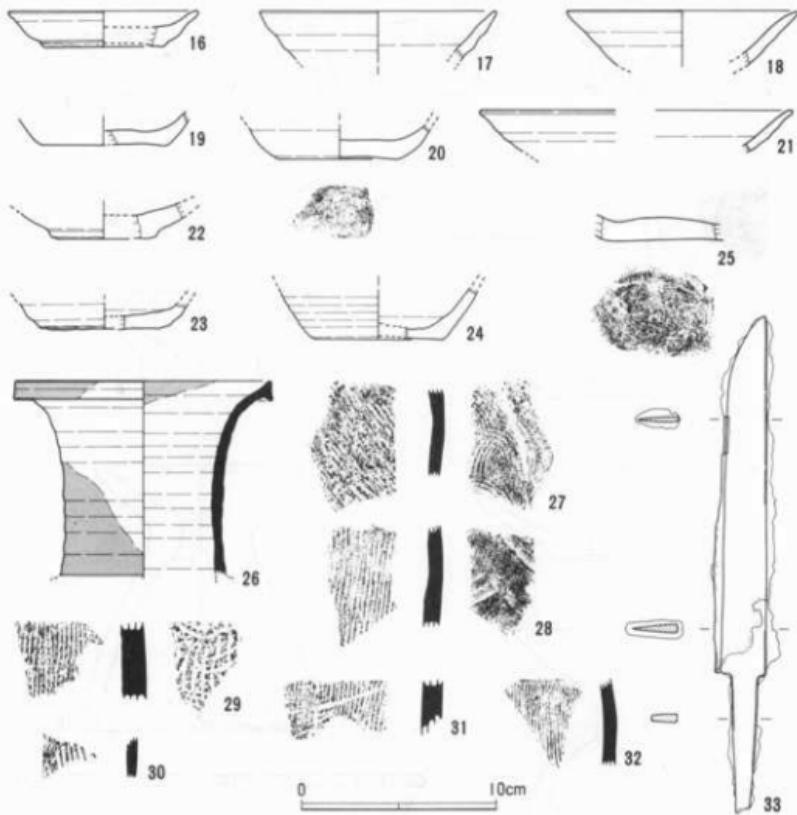
38・39・40は繩文後期中葉以降と考えられる繩文土器片であるが、器面の剥落が著しく、詳細は不明である。41・42は、久ヶ原期のものと思われる弥生土器片で、外面にはハケ状工具により山形紋が施紋されている。43～46は、五領期の土師器片である。43は土師器壺の口縁部片で、口縁端部には細かな刻み目が、外面にはハケ目調整が、それぞれ施されている。44は、土師器壺の底部片で、45は土師器々台、46は土師器壺の口縁部片であるが、器表面の摩耗が著しく、いずれも細かな調整方法は不明である。この他に五領期のものと思われる土師器壺片が出土している。

#### SD-16

五領期のものと思われる土師器壺片が出土しているが、小片のため、実測不可能である。



第35図 SX-1 出土遺物実測図(1)



第36図 SX-1 出土遺物実測図(2)

**SD-18 (第34図47~54)**

47は、須恵器蓋杯で、小片のため口径は復元できないが、頂部付近に3段にわたって回転ヘラ削りが施されている。48~50・52はロクロ土師器杯の底部片で、49・50の底部外面には、僅かながら回転糸切り離し痕が認められる。51は須恵器壺片で、外面には平行叩きが施されている。この他に縄文土器（前期）の小片が1点出土しているが、小片のため型式名は不明である。

**SX-1 (第35・36図) (図版19・20)**

1~13は、弥生土器及び五領期の土師器である。1は五領期の壺の口縁部片で、口縁部から体部外面と口縁部内面に、ハケ目調整が施されている。2は、久ヶ原期の壺の口縁部片で、外面には、接合痕と指頭痕が明瞭に残されている。3は、五領期の高杯片で、杯部と脚部の接合部分にはハケ目調整の痕跡が認められる。4は、弥生から五領期にかけての壺片と考えられ、



第37図 グリッド出土遺物実測図

0 10cm

細かな繩文を施した後、二重の沈線により山形に区画し、区画外の繩文を擦り消している。5は厚手の壺底部片であるが、器面の摩耗が著しく、調整技法は不明である。6・7は五領期の土師器壺底部片で、外面には縦方向のヘラ削りが、内面には横方向のヘラナデがそれぞれ施されている。8・10・11は、五領期の土師器々台である。完形に復元できるものは、10のみであるが、いずれも、受け部径10.5cm、器高13.5cm前後に復元できると考えられる。外面には、縦方向のハケ目調整が、脚部内面には横方向のヘラナデがそれぞれ施されている。12は、五領期の土師器壺片で、口径は20.5cm前後に復元できる。口縁端部には押捺紋が施されている。体部内・外面にはハケ目調整が施され、その後、胴部外面は横方向のヘラ削りが施されている。13も五領期の土師器壺片で、体部外面には縦から斜め方向のハケ目調整が、口縁部内面には横方向のハケ目調整がそれぞれ施されている。また、体部内面には横方向のヘラナデが施されている。14・15は、ともに土鍤と考えられる。

16~25はロクロ土師器杯である。いずれも小片のため、厳密な口径復元が出来ないが、口径11.5cm~12.0cm前後のものが主体を占めると思われる。また、20・25の底部外面には、回転糸切り離し痕が認められ、23の底部外面には、不定方向のヘラ削りが施されている。26は灰釉陶器長頸瓶の口縁部から頸部にかけての破片で、口径は13cm前後に復元することができる。内・外の器表面には、透明な灰釉が薄く掛かる。胎土は灰白色を呈し、器表面には、僅かにマンガンの吹き出しが認められる。27~32は、外面に平行叩きを施す須恵器壺片である。このうち、27・29の内面には同心円の当て具痕が認められる。また、31の胎土には雲母が多量に含まれており、他のものが灰白色を呈するのに対し、暗灰色を呈し、胎土の特徴を異にしている。

34は、刃長18cm、茎長7cmをそれぞれ計る短刀で、茎の先端部分が欠損している。刃部分には、鞘のものと思われる木質が、ほぼ全面に付着している。

グリッド出土遺物（第37図）（図版13・14）

1～5は、B-6区、基本層序IV層（黒色粘質土）中から出土した非クロロ成形の土師器杯で、いずれもほぼ完形に復元できる。口径は10.7cm～12.4cm、器高3.9cm～4.6cmをそれぞれ計ることができる。6は、C-5区、基本層序IV層から出土したロクロ土師器杯である。器面の摩耗が著しく、調整痕は全体に不明瞭であるが、体部下端から底部にかけて回転ヘラ削りが施されている。

7は、E-4区、基本層序IV層中から出土した青磁蓮弁紋碗の体部片である。釉は透明な青緑色、胎土は灰白色を呈している。

8は、E-4区、基本層序IV層中から出土した須恵器壺口縁部片であり、外面には沈線と波状紋が施されている。9・10はF-2区、基本層序III層付近で出土している。9は、常滑窯産の壺肩部片である。外面には幾何学文様の叩き目が認められる。10は、須恵器壺片で、外面には平行叩きを施した後にカキ目調整が行われ、内面には同心円の当て具痕が認められる。

スラグ

スラグは、SK-1、2を中心として多数出土しているが、造構別の出土量・種別は以下のとおりである。

磁着度	重 量 (g)					計	個 体 数					計
	1	2	3	4	5以上		1	2	3	4	5以上	
SB-1					28.5	28.5					1	1
SB-2		11.3				11.3		1				1
SB-5		37.7				37.7		1				1
SK-1		9.1	315.8	205.5	302.0	832.4						
SK-2	17.8	114.2	468.5	1118.0	813.0	2531.5	1	12	27	32	12	84
SK-3	1.6	20.4	108.9	147.0	66.1	344.0	2	4	5	4	3	18
SK-4		88.8				88.8		1				1
SK-5			12.1	20.0		32.1					1	2
SD-1		3.8	23.1	195.9	163.5	386.3		4	1	4	3	12
SD-2			6.5		123.2	129.7			1		2	3
SD-3			33.8	162.4	60.2	256.4			4	3	5	12
SD-4			6.8			6.8			1			1
SD-6	2.4	94.8	335.2	73.2	961.4	1467.0	2	7	7	1	11	28
SD-7	5.9	51.3	23.9	257.2	584.1	922.4	2	7	8	6	7	30
SD-8				64.1	361.1	425.2				1	3	4
SD-11			12.2		49.6	61.8			1		1	2
SD-12					67.5	67.5					2	
SD-18				2.6	13.5	16.1				1	1	2
SE-1				263.5	33.5	297.0				1	1	2
計	27.7	431.4	1334.7	2501.5	3647.2	7942.5	7	39	67	60	58	231

第3表 外輪輪遺跡出土スラグ分類表

#### 4. 小 結

外箕輪遺跡は、大型の掘立柱建物と多数の溝状遺構により特徴づけられるが、ここでは、これらの遺構の年代的な変遷を概観し、小結としたい。

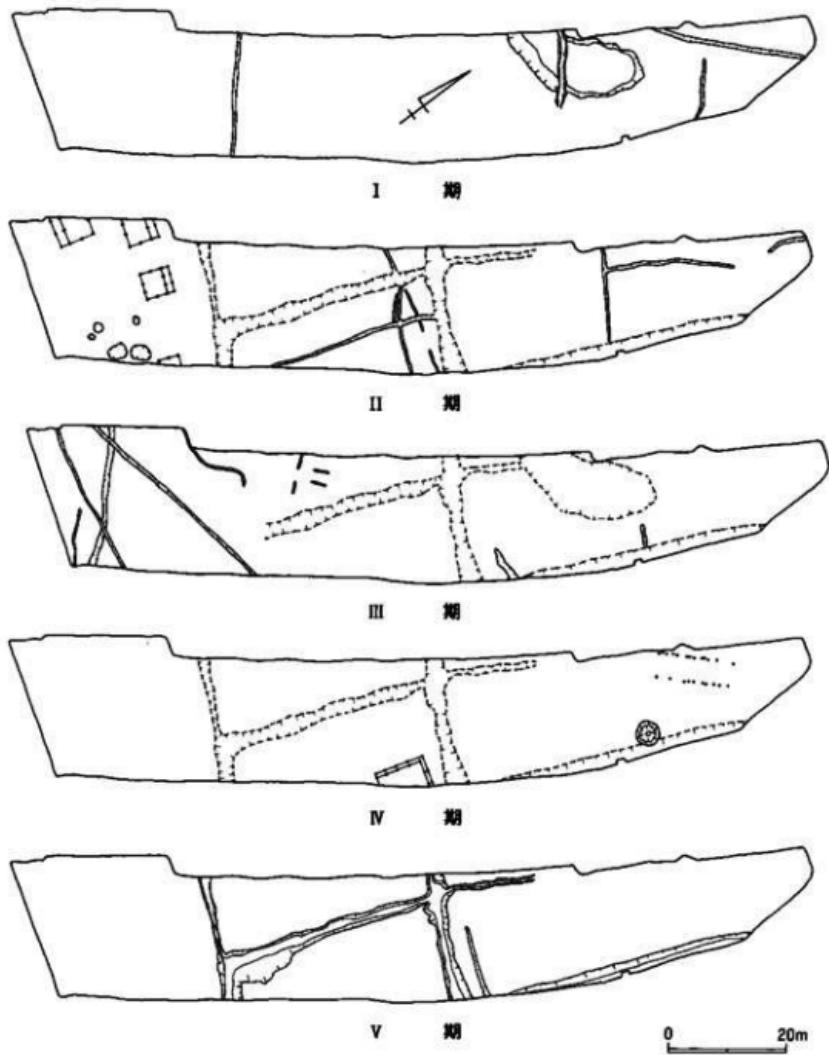
##### 遺構の年代的変遷（第38図）

I期—古墳時代前期の遺物が出土した SX-1 及び SD-14 と、SD-14 と覆土・断面形が類似する SD-10, 17 がこの段階に属すると考えられる。全体的に遺構は希薄であり、窪地状の遺構と溝状遺構のみから構成されている。住居跡は検出されていないが、SX-1 より多量の土器が出土していることから、近接する場所に集落跡が存在する可能性が考えられる。年代的には、出土した土器類から 3 世紀後半（五頭期前半）を中心とした年代が考えられる。

II期—ほぼ同一の棟方位と大型の柱穴掘形を持つ SB-1～4 と、掘立柱建物と同時期の遺物が出土した SK-1～5 がこの段階に属する。溝状遺構では、SB-1～4 と同一の方向性を持つ SD-11, 12, 15, 16 の各遺構がこの段階に属するものと思われる。また、切り合い関係では遺跡内で最も新しいが、SD-1～5 の各溝状遺構は、SB-1～4 の掘立柱建物群と同一の方向性を持ち、前述した溝状遺構とも分岐・合流するという関係が認められるところから、これらの溝状遺構も既にこの段階に存在していたと推定される。

掘立柱建物は小糸川に面した段丘面南端部分に集中して検出されている。庇を持つ SB-1～3 は約 5m の当間隔で「L」字状に並び、庇を持たない SB-4 も、SB-3 の東に約 10m の間隔を置いて柱筋を SB-2, 3 とほぼ合わせて建てられており、その配置は計画的なものであると考えられる。土坑群はこれらの掘立柱建物群にとり囲まれた地点に集中的に検出されており、ここからはフイゴ羽口・スラグが多数出土していることから、近接地点には鍛冶工房の存在が想定できる。溝状遺構は、掘立柱建物群と平行して走る SD-3, 4 を境として、南側部分（掘立柱建物部分）へは延びてゆかず、掘立柱建物群と同一の方向性を持っている。このことから、掘立柱建物群と溝状遺構は互いに規制しあいながら存在していたと考えられる。また、この段階の掘立柱建物群は、その配置の規則性や鍛冶工房存在の可能性から、一般集落とは異なった性格を持つものと推定される（註18）。

この段階の年代については、SB-1, 4, SK-1～5 から出土した土器類から推定することができる。これらの遺物のうち土師器供膳形態は、非ロクロ成形、口径 11cm～12cm 前後の所謂「上縦型杯」によって主体が占められており、ロクロ土師器杯は少數の黒色土師器に限られている。このような供膳形態の状況は、上総地域における土器編年では 8 世紀第 3～4 四半期の状況に対応しており（註19）、この年代は、在地産と思われる須恵器高杯の特徴とも整合すると考えられる（註20）。以上のように、この II 期の年代は 8 世紀後半を想定することができる。



第38図 外輪遺跡遺構変遷図

III期-SD-6～9、13、18、19、SX-2がこの段階に属するものと考えられる。また、SX-1からは、SD-18と同時代の遺物が多数出土しており、SX-1はこの段階まで存在していたと考えられる。

この段階では掘立柱建物は姿を消し、溝状遺構と畝状小溝のみから構成されており、その様相は前代と比較して大きく変化している。この段階では既に、段丘面南端の掘立柱建物群は廃絶しており、溝状遺構にも、前段階とは異なった方向性を持つものが多く見られ、畝状小溝の方向も前段階の溝状遺構とは異なっている。このことから当段階において、溝による地割り状況に変化が生じているものと考えられる。なお、SX-1からは土器類を始めとして当段階に属する遺物が多く出土しており、これに近接する地点に集落跡が存在した可能性が考えられる。

SX-1、SD-18の出土遺物のうち、土師器杯は、いずれもロクロ成形・底部回転糸切り離し無調整のものであり、10世紀後半の年代が想定され（註21）、共伴した灰釉陶器長頸瓶（折戸53号窯期第3～4段階）の年代とも矛盾しない（註22）。以上のことから、当段階の年代は、10世紀後半を中心とした年代が想定される。

IV期-SE-1、SB-5、6の各遺構がこの段階に属すると考えられ、SB-5と同一の方位性を持つSD-1～5も、この段階に再び存在していたと思われる。掘立柱建物と井戸は、遺跡中央部から北半部分にかけて散在して検出され、この部分に当段階の居住空間が存在している。この段階では前段階とは異なり、居住空間を中心とした遺構構成を取っている。

SE-1からは常滑窯・渥美窯の甕、龍泉窯系青磁碗、白磁皿が出土しているが、これらの出土遺物から当段階の年代を推定することができる。常滑窯甕は常滑窯編年II期に当たり、12世紀後半から13世紀前半の年代が推定されており（註23）、渥美窯甕も12世紀後半の年代が推定できる（註24）。また、龍泉窯系青磁碗にはI-1類・I-2類が含まれており、これらの青磁碗は貞応3年（1224年）銘墨書木札との共伴例から、13世紀前半の年代を確認することができる（註25）。さらに、白磁皿はIX類に属するものであり、13世紀中期には出現する可能性が指摘されている（註26）。これらの遺物は、いずれもSE-1の廃絶時に形成されたと考えられる灰層中から出土しており、SE-1の廃絶時期は13世紀代と考えられ、この年代は、当段階の一端を示しているものと思われる。

V期-SD-1～5が、この段階に属すると考えられる。SD-1～5は、8世紀後半以降、部分的には廃絶しながらも、各段階において使用され、当段階に至っていると推定される。なお、SD-20は、この段階以降の所産と思われる。前段階に認められた居住空間は既に廃絶し、再び耕地化している。この段階の溝状遺構は、いずれも現在の畦畔の直下か、それに沿う形で検出されており、このことから現在の耕地々割りは、この段階に形成されたと考えられる。

これらの溝状遺構の出土遺物は、主に須恵器壺片であるが、16世紀代と思われる底部回転糸切り無調整の灰釉陶器皿（註27）が含まれており、この段階の年代の一端を示していると考えられる。

註

- (18) 山中敏史 「遺跡からみた郡衙の構造」 「日本古代の都城と国家」 塔書房 1984  
山中敏史 佐藤興治 「古代の役所」 岩波書店 1985
- (19) 「房総における歴史時代土器の研究」 房総歴史考古学研究会 1987
- (20) 註(19)と同じ。
- (21) 註(19)と同じ。
- (22) 前川 要 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」 「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 III」 1984
- (23) 赤羽一郎 「常滑焼－中世窯の様相－」 考古学ライブラー23 ニューサイエンス社 1984
- (24) 愛知県陶磁資料館 浅田員由氏の御教示による。
- (25) 亀井明徳 「中世の貿易陶磁器研究の現状」 「考古学ジャーナル」 No.268 1986 10月号
- (26) 河野真知郎 「鎌倉における中世土器様相」 「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」 神奈川考 古同人会 1986
- (27) 「愛知県古窯跡群分布調査報告（V）瀬戸・藤岡（瀬戸古窯跡群）」 愛知県教育委員会 1985

### III章 八幡神社古墳

#### 1. 調査の方法と概要

##### 調査の方法

調査の実施に当たっては、外箕輪遺跡同様、公共座標第IX系によりグリッドを設定した。グリッド設定方法は、座標X = -76,320m、座標Y = +8,780m を始点として、基本的には外箕輪遺跡と同様である。

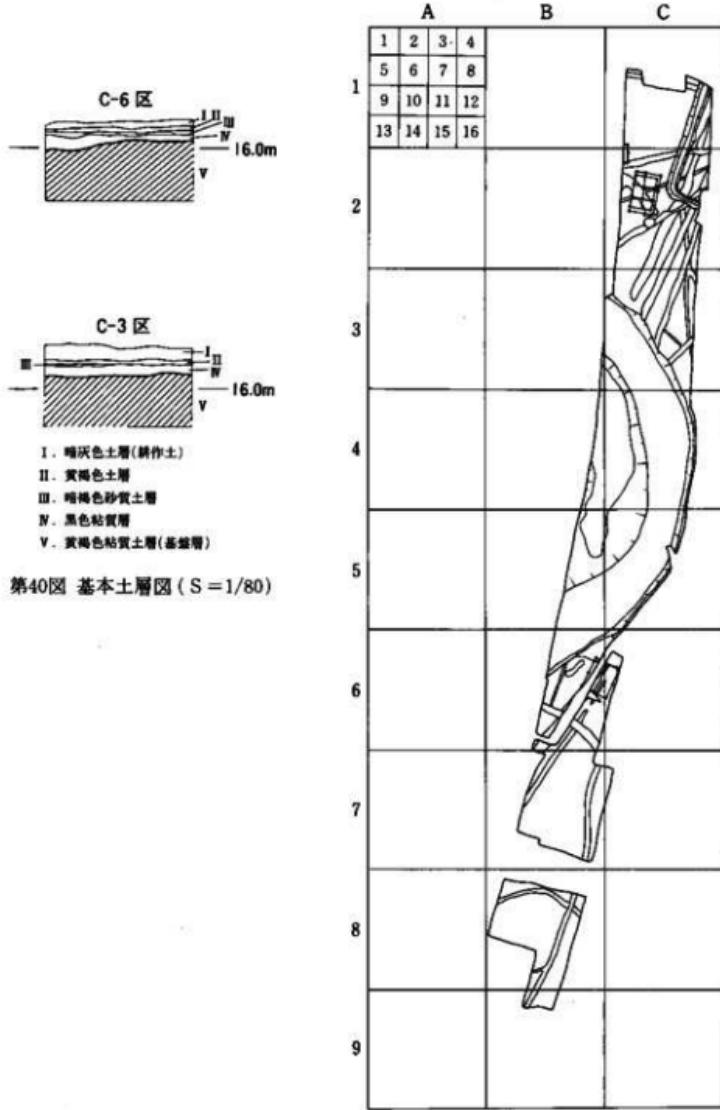
調査は、八幡神社古墳の周溝部分とその他の部分と分けて実施した。

八幡神社古墳の周溝部分は、現状においてその痕跡が明瞭に確認でき、当初より本調査の形で発掘調査を実施した。この周溝の調査に当たっては、隣接する国道127号線の路面と完掘時の周溝底との比高差が3m 以上予想されたため、国道崩落の危険を防止する必要上、周溝の国道に面する地点に、調査に先立ちシートパイルの設置を行った。また、周溝の約2/3の部分は調査時までに、多量の客土により埋め立てられており、そのままでは手掘りによる発掘調査を実施することは困難であった。そこで、まず、バックホーによりこの客土を除去し、周溝内の自然堆積層を検出することから調査を開始した。自然堆積層を検出した後は、調査区内にかかる周溝部分の全域を手掘りにより掘り下げ、遺物・遺構の検出を行った。なお、古墳周溝の遺構表記についてはSX-1とした。土層観察は、周溝内に土層観察用のベルトを2本設定し、これにより行った。周溝の実測については、周溝内に打たれたグリッド杭を基準として平板測量により、平面図及び等高線図(10cmコンタ)を作成した。

周溝以外の部分については、確認調査で遺構の分布と基本層序を確認した後、バックホーにより表土除去を実施し、本調査に移行した。表土除去の状況については、外箕輪遺跡と基本的には同様である。また、遺構調査・遺物の取り上げについても、外箕輪遺跡と同様である。

##### 調査概要

八幡神社古墳周溝部分(660m<sup>2</sup>)の調査は、昭和63年2月1日から開始し、これと平行して、周溝周辺地域の確認調査を実施した。古墳周溝部分の発掘調査は、調査区の南端部分から手掘りにより実施し、3月中旬までに遺構の検出をほぼ終了し、その後、遺構の完掘状況の記録を取り、3月中には周溝部分の調査を終了した。周溝周辺部分(1,515m<sup>2</sup>)については、昭和63年4月1日～5月11日と7月1日～8月24日の2回に分けて本調査を実施した。前年度の確認調査の結果をもとに、調査区の南端より表土除去を行い、順次調査を実施した。5月11日までに980m<sup>2</sup>の調査を終了した。残りの部分については7月1日から調査を再開し、8月24日までには調査を終了し、八幡神社古墳の総ての発掘調査を完了した。



第40図 基本土層図 ( $S = 1/80$ )

第39図 八幡神社古墳遺構全体図及びグリッド配置図  
 $(S = 1/1,000)$

## 2. 遺構

八幡神社古墳では、掘立柱建物跡（SB）3棟、井戸（SE）1基、溝（SD）18条、古墳周溝（SX）1基が検出され、年代的には古墳時代から鎌倉時代に亘っているが、その中心は、古墳時代と鎌倉時代にある。

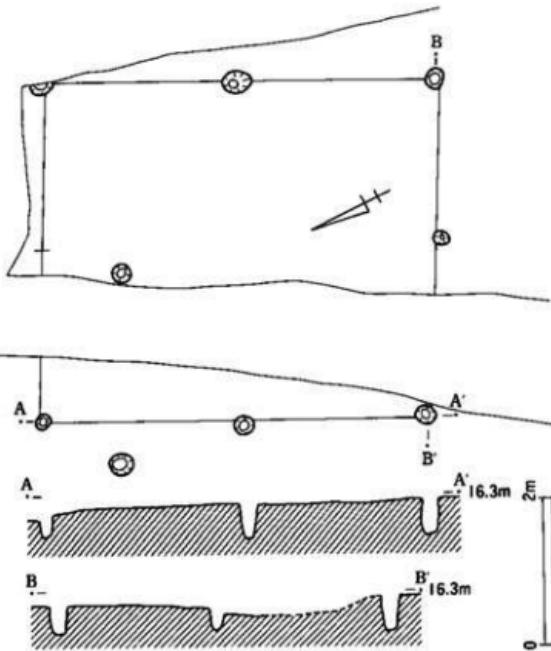
### SB-1 (第41図) (図版11)

B-6区からC-6区にかけて位置する梁間2間・桁行2間の掘立柱建物で、桁行方位はN～25°56'32"～Eである。柱穴掘形は、いずれも径0.2m前後の円形、掘り込みの深さは0.3m～0.5mを計り、柱間は、梁間で7尺(2.1m)、桁行で9尺(2.7m)である。柱穴では柱痕跡は明瞭に確認することは出来なかつたが、その覆土は黒褐色粘質土と基盤層である黄褐色粘質土との混合層が主体を占めている。遺物は、柱穴掘形内から鉄製品が出土した。

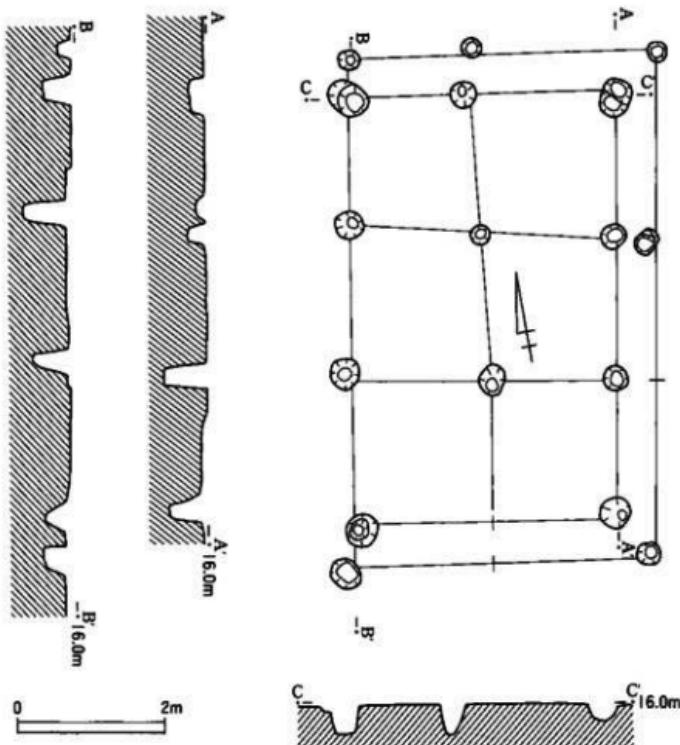
### SB-2 (第42図) (図版11)

C-2区に位置する掘立柱建物で、梁間2間、桁行3間の身舎の北・東・南の各辺に庇（縁）

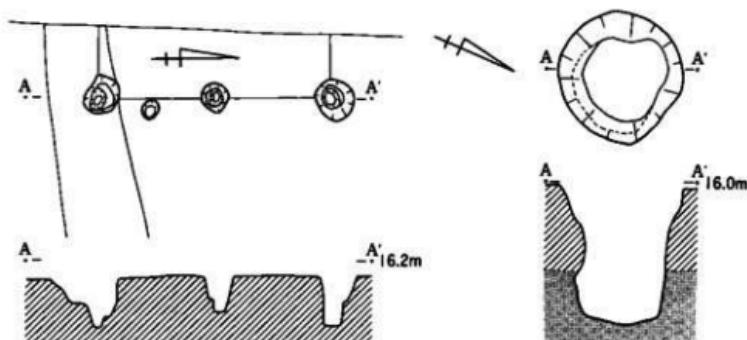
が付けられている。桁行方位はN～8°58'21"～Eを計る。柱間は梁間で6尺(1.8m)、桁行で6尺(1.8m)であり、庇（縁）の出は2尺(0.6m)である。柱穴掘形は、いずれも径0.4m前後の円形のもので、掘り込みの深さは、身舎の側柱と東柱部分で0.3m～0.6m、底部分で0.2m～0.3mとなっている。柱穴の覆土は、暗褐色粘質土が主体であり、柱痕跡は全体に不明瞭であるが、径0.15m～0.2mの柱痕跡が身舎において確認された。切り合い関係では、SD-17・18を切って作られている。出土



第41図 SB-1 実測図 (S = 1/80)



第42図 SB-2 実測図 ( $S = 1/80$ )



第43図 SB-3 実測図 ( $S = 1/80$ )

第44図 SE-1 実測図 ( $S = 1/80$ )

遺物には、少量の土師質土器小片があるに過ぎない。

#### SB-3 (第43図)

C-1区からC-2区にかけて位置する掘立柱建物で、SB-2の北に隣接している。梁間2間で、東の側柱だけを検出した。梁行方位は南北方向で、柱間は5.3尺(1.6m)である。柱穴掘形は径0.4m～0.5mの円形、掘り込みの深さは0.5m～0.6mであり、両端部分の柱穴掘形は、規模も大きく、深い。柱穴の覆土は、黒褐色粘質土が主体を占めている。切り合い関係では、SD-16を切って作られている。遺物は出土しなかった。

#### SE-1 (第44図) (図版11)

C-2区に位置する井戸である。平面プランは、確認面で径1.7mの円形を呈し、深さ1.9mの底面までほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は、3層に分けることができる。上層は、木炭粒を少量含む暗褐色砂質土で、中層は暗灰褐色粘質土である。そして、下層は黒灰色粘質土となっている。これらの土層の堆積状況から、この井戸は、壁の崩落を繰り返しながら、自然に埋没していったものと考えられる。出土遺物は、上・中層から常滑窯産のコネ鉢と大甕の破片・自然石が、下層からは木片がそれぞれ出土している。切り合い関係では、SD-14を切って作られている。

#### SD-1 (第45・50図)

B-7区からB-9区にかけて位置し、ほぼ南北に走る溝状遺構である。幅0.8m、深さ0.3mをそれぞれ測り、断面形は舟底状を呈している。B-8区で細い溝が1条、分岐している。出土遺物は、弥生土器片(宮ノ台期)が主体を占めている。切り合い関係では、SD-2に切られている。

#### SD-2 (第50図)

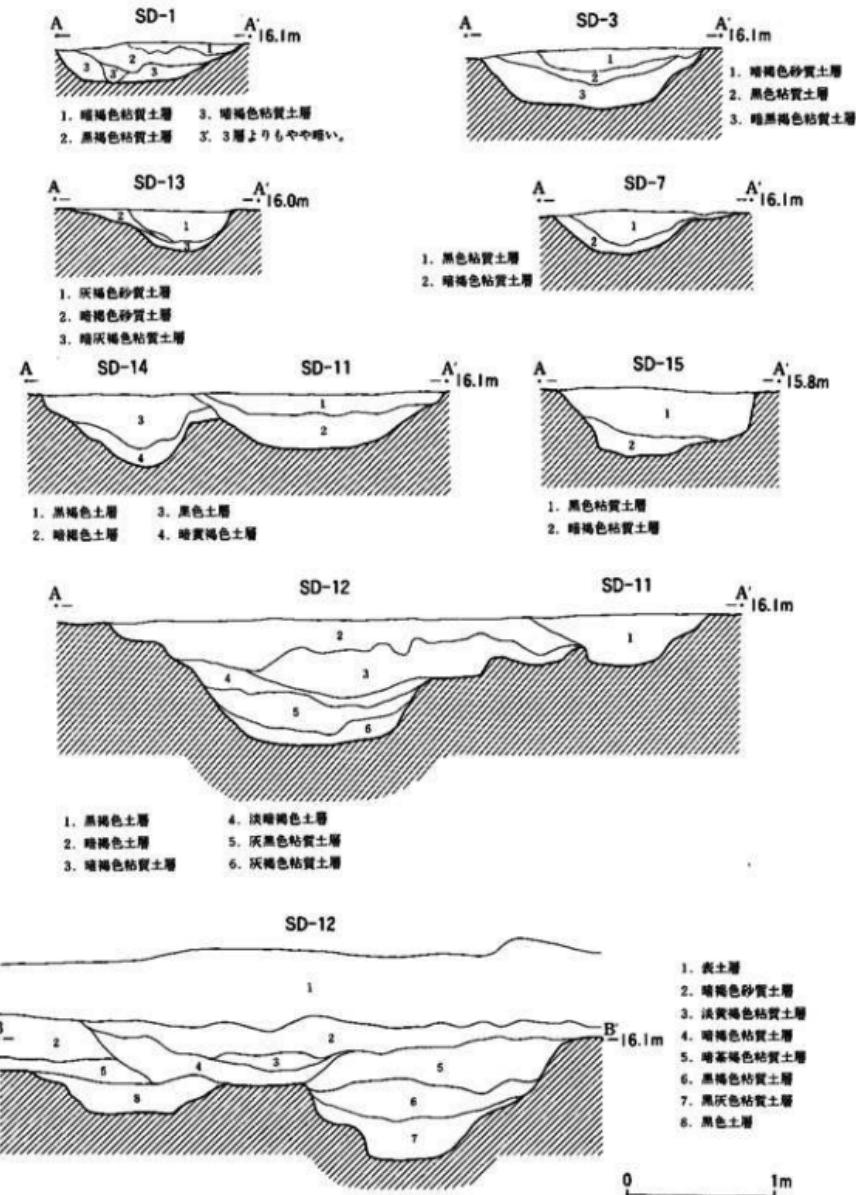
B-8区に位置し、東西に大きく蛇行して走る溝状遺構である。幅0.8m、深さ0.2mをそれぞれ測り、断面形は舟底状を呈している。覆土は黒褐色粘質土が主体を占めている。出土遺物は、弥生土器と近世陶器の小片があるに過ぎない。切り合い関係では、SD-1を切っている。

#### SD-3 (第45・49図)

B-6区に位置し、西北から東南にかけて走る溝状遺構である。幅1.4m、深さ0.4mをそれぞれ測り、東南に行くに従い、やや深くなっている。断面形は舟底状を呈しており、覆土は黒色粘質土が主体を占めている。切り合い関係では、SD-4、5に切られている。

#### SD-4、5 (第49図)

B-6区からB-7区にかけて位置し、北東から南西にかけて直線的に走る溝状遺構である。幅は、SD-4で0.8m、SD-5で1.8mをそれぞれ測り、深さはともに0.3mである。西南に行くに従い、ともにやや深くなっている。断面形は緩やかな舟底状を呈しており、覆土は暗褐色砂質土が主体を占めている。切り合い関係では、ともにSD-3を切っている。



第45図 SD 土層断面図

#### SD-6 (第49図)

B-6区に位置し、北東から南西にかけて走る細い溝状遺構である。幅0.3m、深さ0.2mをそれぞれ測る。断面形は「U」字形を呈し、覆土は黒褐色粘質土が主体を占めている。

#### SD-7 (第45・47・48図)

C-2区からC-3区にかけて位置し、北東から南西にかけて直線的に走り、SX-1に合流する溝状遺構である。幅1m、深さ0.3mをそれぞれ測る。断面形は舟底状を呈し、覆土は黒褐色粘質土が主体を占めている。切り合い関係では、SD-8を切っている。

#### SD-8 (第47・48図)

C-2区からC-3区にかけて位置し、北西から南東にかけて直線的に走る溝状遺構であり、C-3区で2条に分岐する。幅0.4m、深さ0.3mをそれぞれ測る。断面形は「U」字形を呈し、覆土は褐色砂質土が主体を占める。切り合い関係ではSD-7、11、12、13、14の各遺構によって切られている。

#### SD-9 (第49図)

B-6区からC-6区にかけて位置し、東南から西北にかけて走り、SX-1に合流する溝状遺構である。現在の用水路の下に位置しており、充分な調査は出来なかったが、幅3m、深さ0.5m前後の規模と考えられる。断面形は舟底状を示しており、覆土は黒褐色粘質土が主体を占めている。

#### SD-10 (第47図)

C-3区に位置し、東北から西南にかけて走り、SX-1に合流する溝状遺構である。幅0.9m、深さ0.06mをそれぞれ測り、断面形は方形を呈している。覆土は黒褐色粘質土が主体を占めている。

#### SD-11 (第45・46・47図)

C-1区からC-3区にかけて位置し、北東から南西にかけて直線的に走る溝状遺構である。幅1.5m、深さ0.3m前後をそれぞれ測る。断面形は舟底状を呈しており、覆土は黒褐色土層が主体を占めている。出土遺物には、常滑窯産の壺片などがある。切り合い関係では、SD-8、12、14、16、17の各遺構を切っている。

#### SD-12 (第45・46図) (図版12)

C-1区からC-2区にかけて位置する溝状遺構で、北東から南西にかけて直線的に走った後、C-2区で直角に曲がり南東方向に走っている。幅4m、長さは北端部で0.85m、南東端部で0.6mをそれぞれ測り、北に行くに従い多少深くなっている。断面形は逆台形を呈し、底面は平面となっており、その幅は1.6mを測る。覆土には黒褐色土から灰黑色粘質土までがあり、中層の暗褐色土層からは龍泉窯系青磁碗が、下層の灰黑色粘質土からは常滑窯産のコネ鉢が、それぞれ出土している。切り合い関係ではSD-11、13に切られ、SD-8、14、15、16、17の

各遺構を切っている。この溝は、その規模・形状から、居館を方形に区画する堀の一部である可能性が考えられる。

#### SD-13 (第45・46・47図)

C-2区からC-3区にかけて位置し、北東から南西に直線的に走る溝状遺構である。幅1.2m、深さ0.3mをそれぞれ測り、南西に行くに従い、僅かに深くなっている。断面形は舟底状を呈しており、覆土は暗灰色粘質土が主体を占めている。切り合い関係ではSD-8、12、14の各遺構を切っている。

#### SD-14 (第45・46図)

C-2区に位置し、東北から西南にかけて直線的に走る溝状遺構である。幅1.1m、深さは東端部で0.5m、西端部で0.65mと西南に行くに従い次第に深くなっている。掘り込みの角度が急なため、断面形は「V」字形に近い形態を呈している。覆土は黒色土が主体を占めている。出土遺物には、弥生土器片や布目瓦片等がある。切り合い関係ではSD-12、13、SE-1の各遺構に切られている。

#### SD-15 (第45・46図)

C-1区に位置し、東から西にかけて走る溝状遺構である。幅は東端部で0.9m、西端部で1.7m、深さは東端部で0.2m、西端部で0.8mとなっており、西に行くに従って幅と深さを次第に増している。断面形は舟底状を呈しており、覆土は黒色粘質土が主体を占めている。切り合い関係ではSD-12によって切られている。

#### SD-16 (第46図)

C-2区に位置し、東北から西南にかけて走る溝状遺構である。幅1m、深さ0.4mをそれぞれ測る。断面形は逆台形に近い「U」字形を呈し、覆土は黒色粘質土が主体を占めている。切り合い関係ではSB-3、SD-12の各遺構によって切られている。

#### SD-17 (第46図)

C-2区に位置し、東北から西南にかけて直線的に走る溝状遺構である。幅0.6m、深さ0.1mをそれぞれ測る。断面形は「U」字形を呈し、覆土は黒色粘質土が主体を占めている。切り合い関係ではSB-2、SD-11、12によって切られている。

#### SD-18 (第46図)

C-2区に位置し、北西から南東にかけて緩やかなカーブを描いて走る溝状遺構で、SD-17と交差する。幅1.6m、深さ0.1mをそれぞれ測る。断面形は方形を呈し、覆土は黒色粘質土が主体を占める。切り合い関係ではSB-2によって切られている。

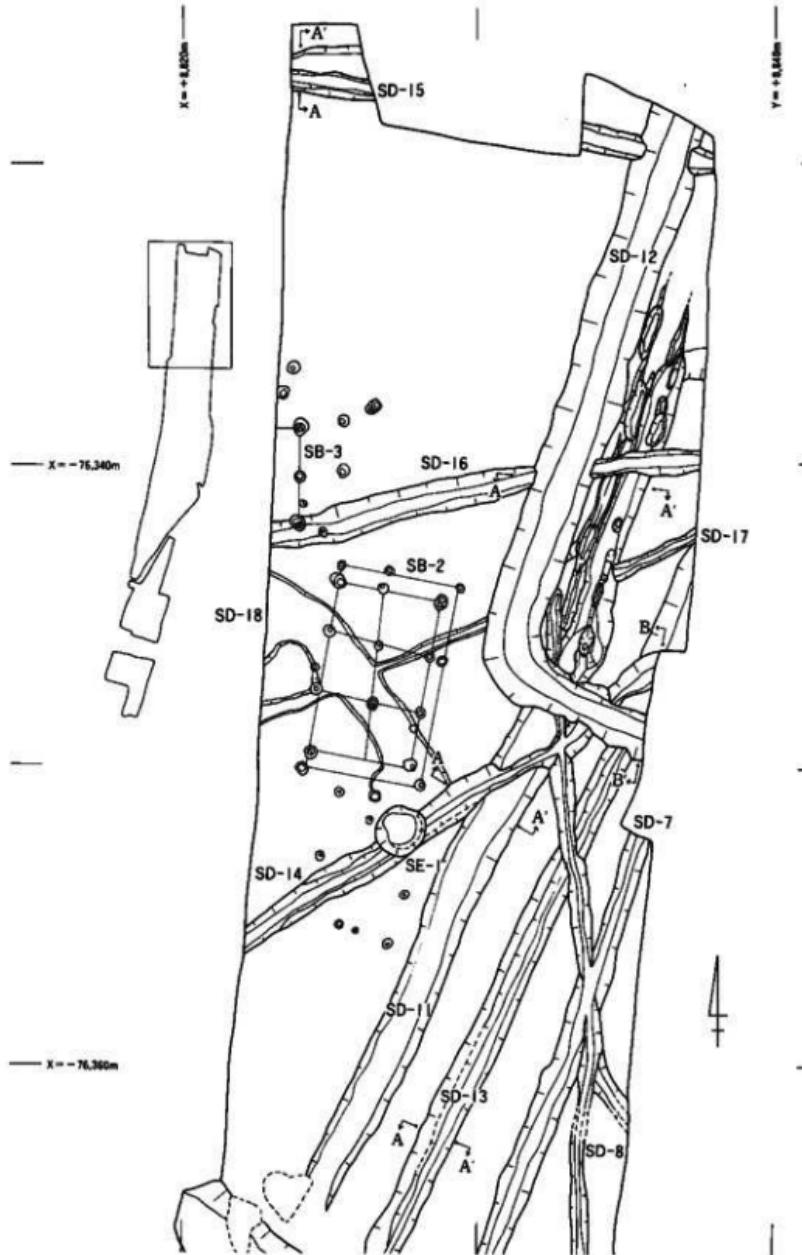
#### SX-1 (第57・58・59図) (図版9・10)

C-3区からB-6区にかけて位置する古墳周溝で、八幡神社古墳後円部の東南部分の周溝に当たる。調査前から、周溝外縁部は農道として遺存しており、周溝内も休耕地となっていた。

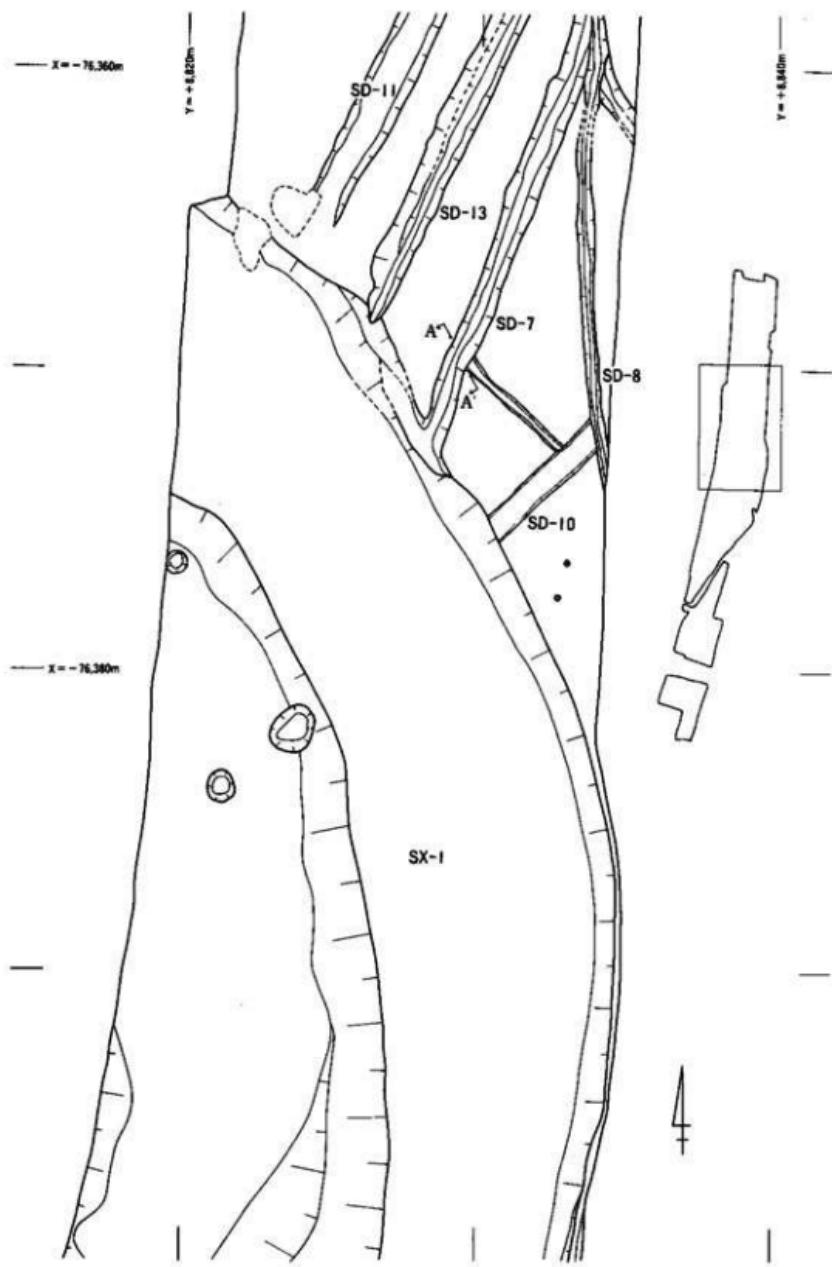
後円部周溝幅は、上端幅18m、下端幅14mをそれぞれ測り、掘り込みの深さは周溝内最深部までで1.4mである。底面はほぼ平坦であるが、墳丘寄りの幅10mの範囲が全体的に深さ0.4m前後掘り込まれている。また、B-4区では墳丘側の周溝立ち上がりが確認できた。周溝内最下層には黒褐色粘質土が堆積し、その上層に水田耕作土と思われる暗灰褐色粘質土の堆積が確認できた。出土遺物には、古代から近世に至るまでの土器・陶器等があるが、古墳に直接結び付く埴輪等の遺物は出土しなかった。

	棟方位	規模	庇	桁行m (尺)	梁間m (尺)	庇m (尺)
SB-1	N~27°~E	2×2		2.7 (9)	2.1 (7)	
SB-2	N~9°~E	3×2	北、東、南	1.8 (6)	1.8 (6)	0.6 (2)
SB-3	W - E	?×2			1.6 (5.3)	

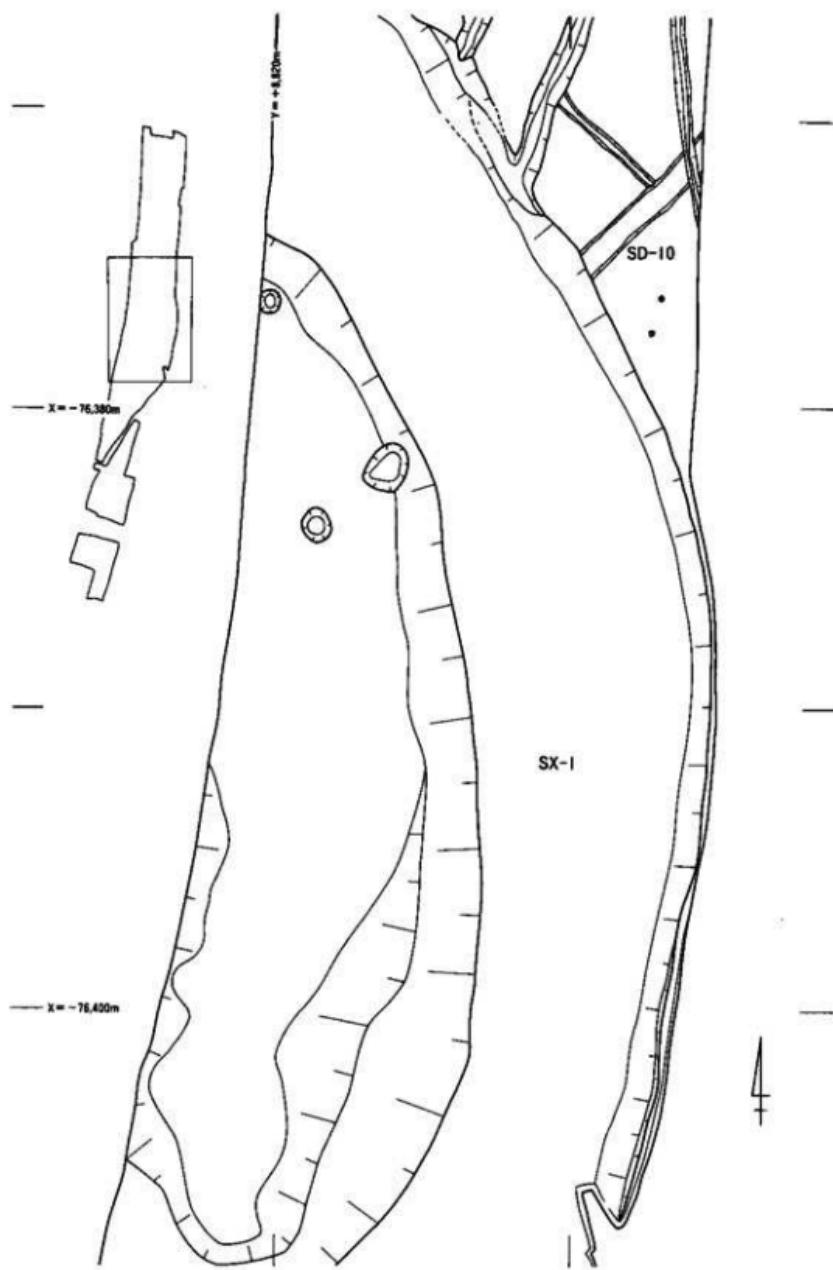
第4表 八幡神社古墳 据立柱建物一覧



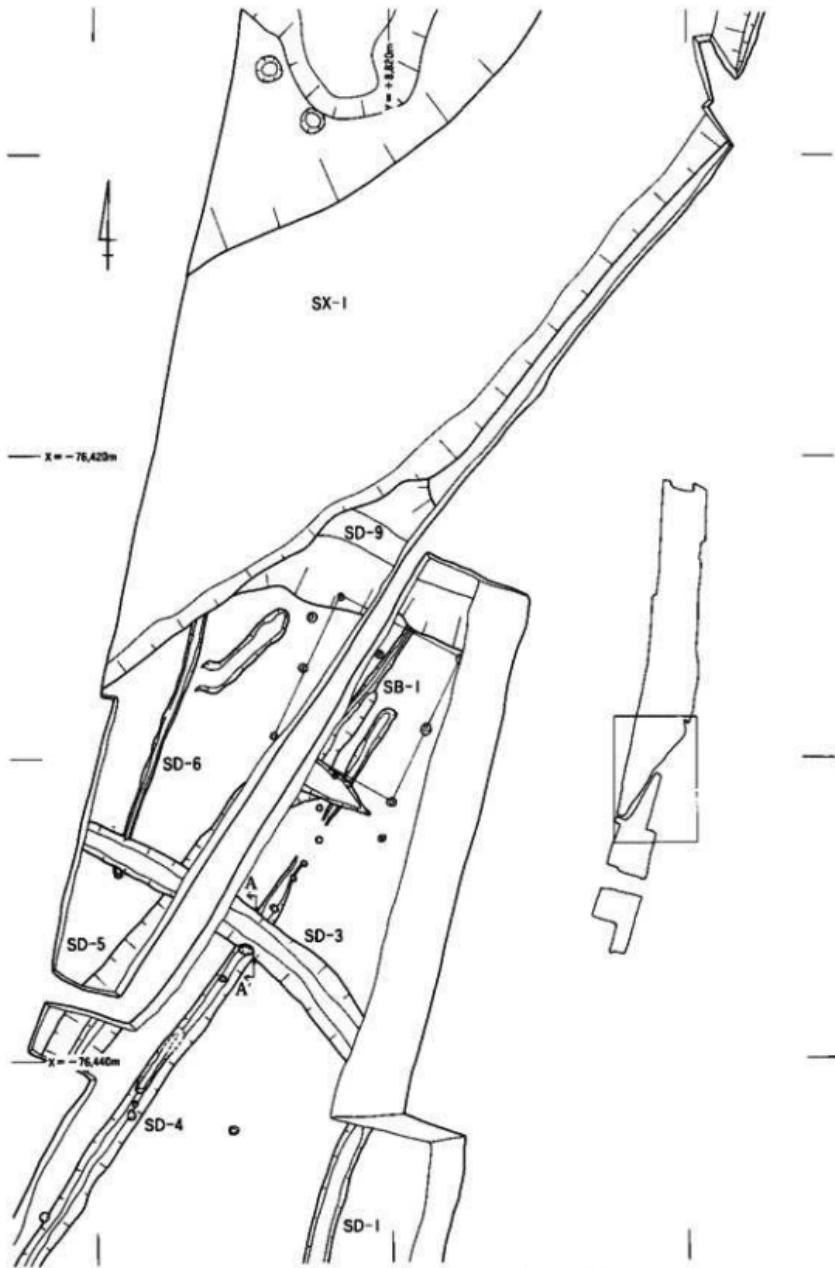
第46図 八幡神社古墳遺構全体図(1) (S = 1/200)



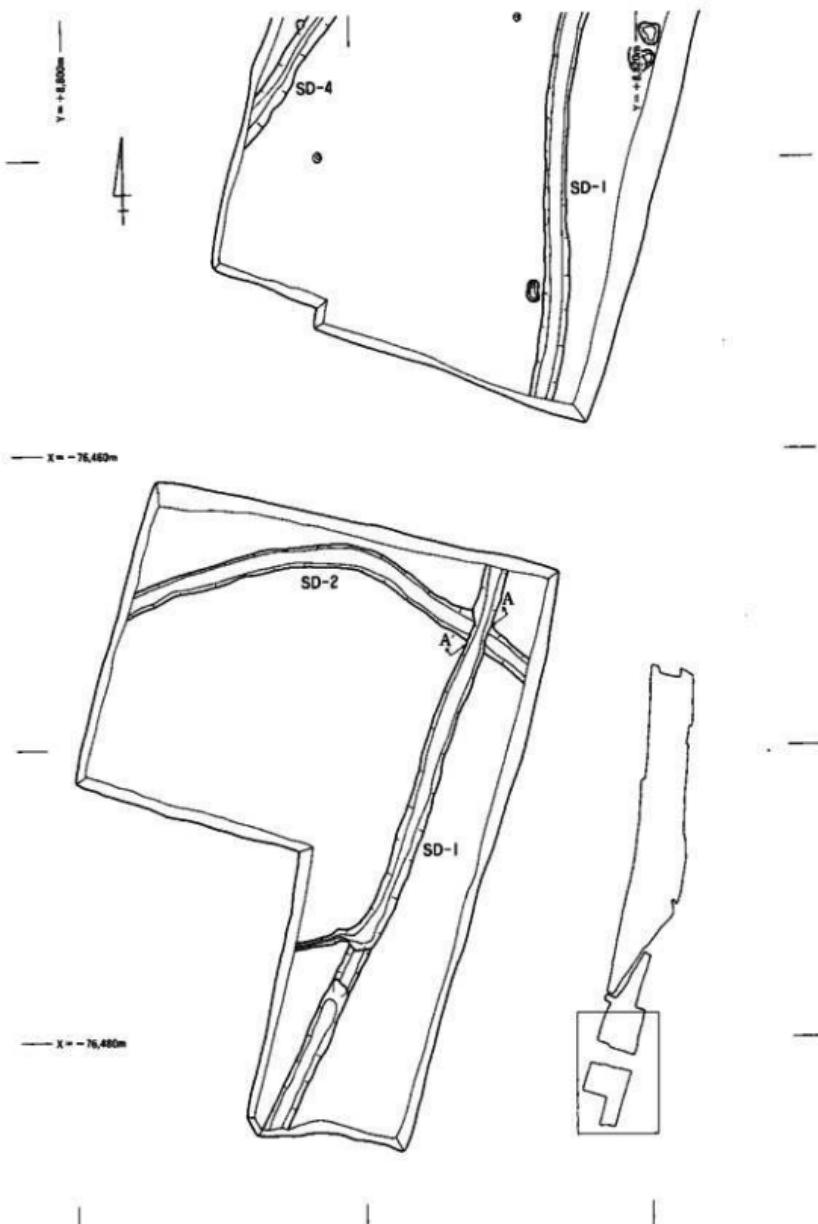
第47図 八幡神社古墳遺構全体図(2) ( S = 1/200)



第48図 八幡神社古墳遺構全体図(3) (S = 1/200)



第49図 八幡神社古墳遺構全体図(4) (S = 1/200)



第50図 八幡神社古墳遺構全体図(5) (S = 1/200)

### 3. 遺 物

今回の調査では、弥生時代から近世までの遺物が出土しているが、鎌倉時代の遺物がその中心を占めている。ここでは、遺構ごとに遺物について記述することとする。

#### SB-1 (第51図12)

12は、SB-1内の柱穴掘形から出土した鉄製品で、両端部分が欠損する。断面は、径0.5cmのほぼ円形を呈するが、性格は不明である。

#### SD-1 (第51図1)

1は宮ノ台期の弥生土器片である。口縁部は指頭による波状口縁であり、外面には細かな条痕紋が施されている。この他に、同時期のものと思われる弥生土器の小片が出土している。

#### SD-2

この溝からは、弥生土器・ロクロ土師器・近世陶器片が出土しているが、いずれも小片で、実測は不可能である。

#### SD-11 (第51図2～6) (図版21)

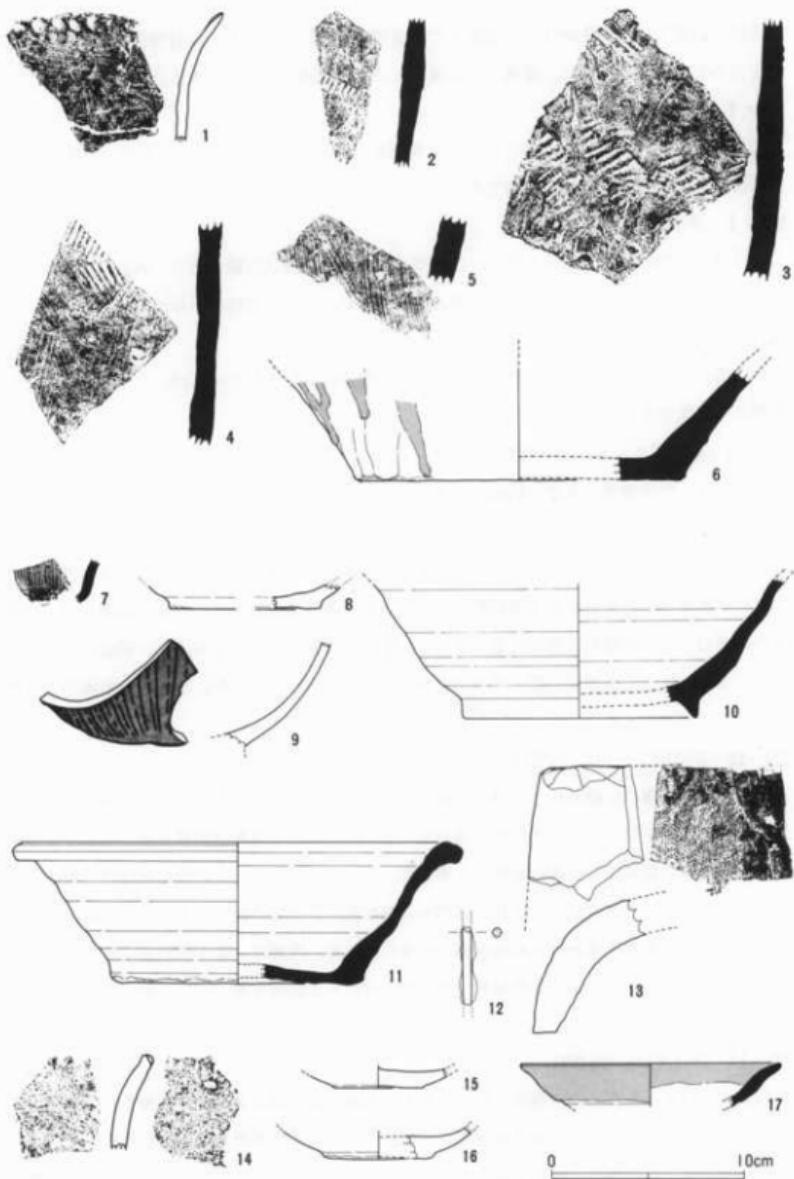
2～4は、常滑窯産の大甕の胴部片である。2は、外面に平行叩きが施されており、器表面は鉄分のため赤褐色を呈している。3は、外面に平行叩きが施され、色調は灰色を呈している。4は、外面に幾何学文様の叩きが施されており、色調は暗灰色を呈している。5は、外面にカキ目状の調整痕が認められる須恵器壺片である。6は渥美窯産と思われる壺の底部片で、内面及び外面の一部に暗緑色の釉が付着している。胎土には細砂粒が多く含まれ、暗灰色を呈している。この他に、常滑窯産の甕・龍泉窯系青磁碗片が出土しているが、小片のため器形の詳細については不明である。

#### SD-12 (第51図7～10) (図版21)

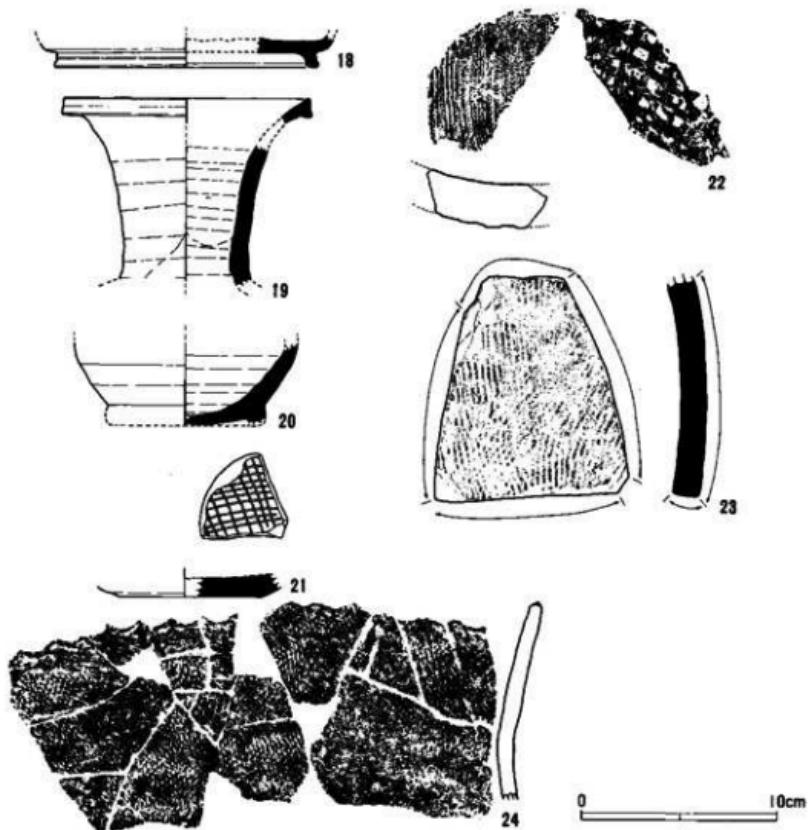
7は、須恵器甕の口縁部片で、外面に細かな波状紋が施されている。8は、土師質土器杯の底部片で、底部を厚く切り残す形態を呈している。胎土には白色針状物質を多く含んでいる。9は、龍泉窯系蓮弁紋青磁碗の体部から高台部にかけての破片である。釉は明緑色、胎土は白色を呈する。10は、常滑窯産コネ鉢の体部から高台部にかけての破片である。高台は、断面三角形を呈し、器表面は鉄分のため暗赤褐色を呈している。内面は、よく使い込まれており、平滑になっている。この他に、常滑窯産と思われる壺片・土師質土器の小片や焼け壁材が出土している。

#### SD-14 (第51図13) (図版21)

13は、布目瓦(丸瓦)の狭端部の破片である。表面には指頭によるナデが施され、裏面には布目が認められる。また、表面は狭端部に、裏面は狭端部と側面部分に、それぞれヘラ削りが施されている。この他に、弥生土器(宮ノ台期)・平行叩きと同心円當て具痕のある須恵器壺小片・土師器小片が出土している。



第51図 出土遺物実測図(1)



第52図 出土遺物実測図(2)

SE-1 (第51図11) (図版22)

11は、常滑窯産のコネ鉢で、推定口径23.5cm、推定器高7.3cmをそれぞれ測る。内面は底部付近を中心によく使い込まれており、平滑になっている。このコネ鉢は、口縁部が破損した後、漆により接合し、修復した痕跡が認められる。この他に、常滑窯産の斐の胸部片と木片及び自然石が出土している。この内、常滑窯産の斐は、外面に明緑色の釉が厚く付着しており、これも漆による修復痕が認められる。また、これは、断面部分を磁石として使用している。自然石の表面にはススがタール状に付着しており、火を受けているものと考えられる。

SX-1 (第51図14~17 第52図18~23)

14は、宮ノ台期の弥生土器片である。口縁部は、ヘラ状工具による刻み目口縁で、外面には条痕紋が施されている。また、口縁部内面には擦圧痕が認められる。

15・16は、土師質土器杯の底部片である。いずれも、底部を厚く切り残す形態を呈しているが、器面の摩耗が著しく、底部切り離し技法は不明である。17は、推定口径13.4cmの瀬戸製灰釉陶器皿で、口縁部の内外面には透明な明緑色の灰釉が掛けられている。18は、須恵器高台杯の底部片であり、底径は13.5cmに復元できる。胎土は非常に硬質で、暗灰色を呈している。19は、灰釉陶器長頸瓶の頸部片で、推定口径は12.5cmを計ることができる。胎土は、明灰色を呈しており、灰釉はほとんど剥落し、口縁内面に僅かに認められるに過ぎない。20は須恵器長頸瓶の底部片である。胸部下半部分には回転ヘラ削りが施され、高台が付けられている。胎土は全体に硬質で、暗灰色を呈している。21は、瀬戸産のオロシ皿で、内面見込みにはヘラ状工具により格子目が刻み込まれている。胎土は乳白色を呈し、底部外面上には回転糸切り離し痕が僅かながら認めることができる。破片は砥石に利用されている。

22は、布目瓦片（平瓦）で、表面には糸切り痕と布目が、裏面には格子叩き目が、それぞれ明瞭に認められる。胎土には白色細砂粒が多く含まれ、色調は赤褐色を呈している。これらの特徴から、この瓦は九十九坊廃寺のものと考えられる。23は、外面に平行叩きを施す須恵器甕の胴部片であり、断面及び外面は砥石として使用され、平滑になっている。

この他に、SX-1からは、近世陶器が数片出土している。

#### グリッド出土遺物（第52図24）（図版22）

24は、宮ノ台期の弥生土器片で、C-2区、基本層序V層直上からの出土である。口縁部は、棒状工具による刻み目口縁で、外面には単節繩文が施されている。

この他に、B-6区、基本層序IV層付近から常滑窯産の壺片と龍泉窯系青磁蓮弁紋碗が出土しているが、いずれも小片で実測は不可能である。

## 4. 小 結

八幡神社古墳では、弥生時代から鎌倉時代頃までの遺構が検出されたが、ここでは、これらの遺構の年代的な変遷を概観し、小結としたい。

### 遺構の年代的変遷

I期－弥生時代中期の土器片が出土したSD-1及び、切り合い関係で最も古いSD-8がこの段階に属すると考えられる。全体に遺構は希薄であり、溝状遺構のみから構成されている。年代的には宮ノ台期を中心とした年代が考えられる(註28)。

II期－古墳周溝であるSX-1がこの段階に属すると考えられる。八幡神社古墳の築造年代については、墳丘形態から6世紀代が想定できるが、年代推定の根拠となるような遺物は、今回の調査では出土しておらず、詳細については不明である。

III期－共通した覆土を持つSD-3、9、10、14、15、16、17、18の各遺構がこの段階に属すると考えられる。方向の統一性のない溝状遺構で構成されている。年代的には、SD-14から作りの丁寧な布目瓦(丸瓦)が出土しており、8世紀代にその年代の一端を考えることが可能であろう(註29)。

IV期－大型の溝状遺構であるSD-12とSB-1、2、3、SE-1の各遺構がこの段階に属すると考えられる。SD-12は、外箕輪遺跡のSD-1等の溝状遺構と共に方向性を持ち、その規模から、居館の周囲を巡る堀の一部と考えられる。また、これに伴うと思われる掘立柱建物も、SB-3を除き、SD-12と類似した方向性を持っている。SD-12からは、龍泉窯系青磁の蓮弁文碗と常滑窯産のコネ鉢が出土しており、SE-1からも常滑窯産のコネ鉢が出土している。これらの遺物から、この段階については、13世紀代を中心とした年代が考えられる(註30)。

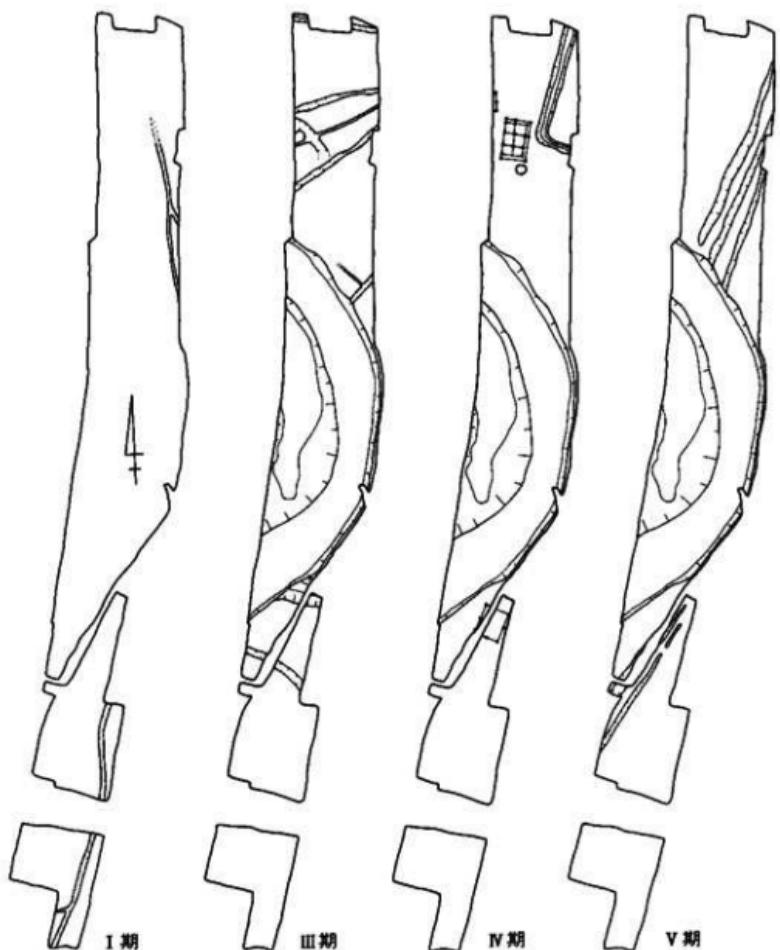
V期－この段階には、SD-4、5、7、11、13の各遺構がこの段階に属するものと考えられる。前段階では調査区北辺に存在した居館の堀は、この段階では既に存在せず、溝状遺構のみから構成されており、調査区全域が耕地化しているものと思われる。しかし、これらの溝状遺構の方向性は、前段階の居館の堀の方向性を踏襲しており、外箕輪遺跡のSD-1等の溝状遺構と共に方向性を持っている。年代的には、14世紀以降の年代が考えられるが、この段階に属する溝状遺構の覆土には複数の種類が存在し、さらに細分される可能性が考えられる。

### 註

(28) 小高春雄氏の御教示による。

(29) 永沼律朗氏の御教示による。

(30) 註(23)と同じ。



第53図 八幡神社古墳遺構変遷図

0 20m

## IV章 まとめ

ここでは、1. 八幡神社古墳の墳丘規模・形態の復元及び築造企画の検討、2. 外箕輪遺跡・八幡神社古墳の2遺跡で多数検出された古代から中世にかけての遺構の性格の推定、の2点について若干の考察を行い、まとめとしたい。

### 1. 八幡神社古墳（第54図）

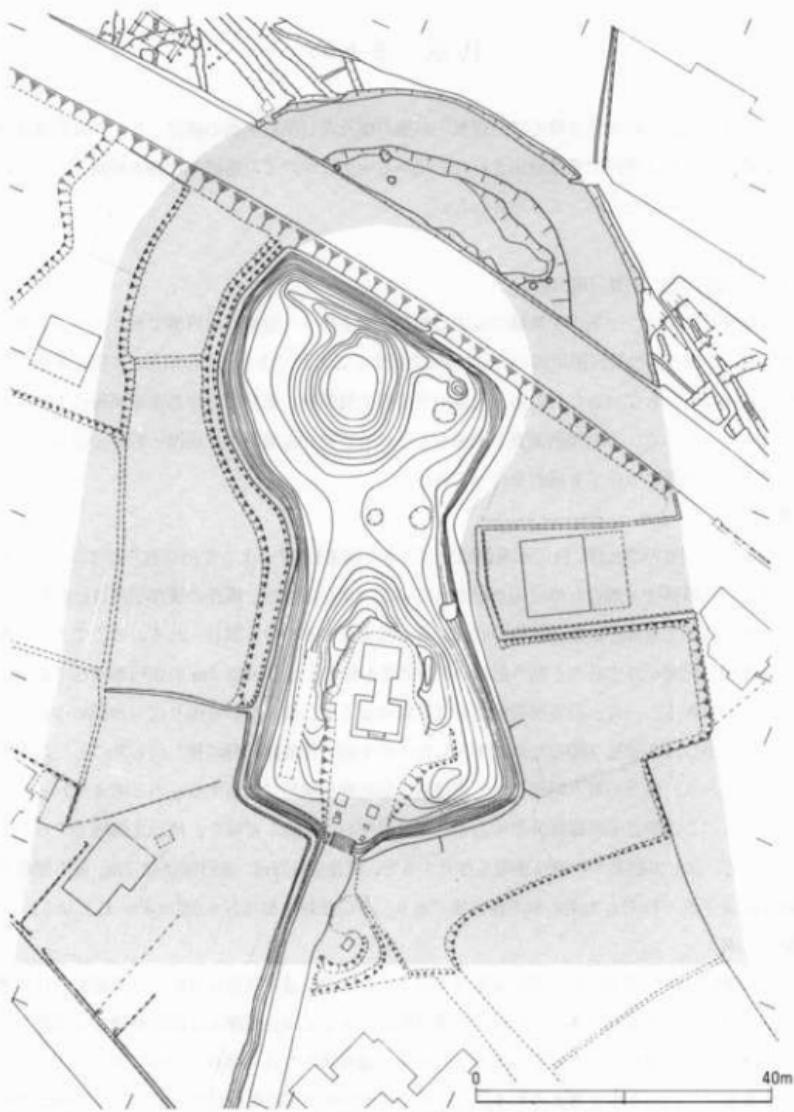
八幡神社古墳は、小糸川中流域では中心的な性格を持つ大型前方後円墳であり、今回の発掘調査で、この古墳の後円部周溝の約2/3程を完掘することができた。その結果、古墳に直接結び付く遺物は出土しなかったものの、周溝の平面形や規模を、部分的ではあるが明確にすることことができた。そこで、この発掘調査の成果をもとに八幡神社古墳の墳丘規模・形態を復元し、その墳丘築造企画についても検討を行ってみたい。

#### 墳丘

八幡神社古墳の墳丘は、後円部東側部分が大きく国道127号によって削り取られており、前方部墳丘も八幡神社々殿のために切り崩されている。それ以外は、墳丘の遺存状況は比較的良好で、特に墳丘北側部分は築造当時の状況を良く伝えているものと認められる。そこで、この部分の後円部円周から中心点を割り出し、後円部径を推定すると径42.5mの後円部墳丘を想定することができる。一方、前方部前縁部分は直線にならず、僅かながら張り出しが認められる。この張り出しが、神社々殿のために削平した土砂を前方部前縁部分に押し出したことに起因すると考えられ、前方部最大幅部分が、ほぼ前方部前縁両端部に相当するものと考えられる。そうすると、この前方部前縁部分の中心点と後円部中心点を結んだ線を、墳丘主軸線とすることができる。以上の結果から墳丘規模を復元すると、墳丘全長77m、後円部径42.5m、前方部最大幅38mをそれぞれ測る大型の前方後円墳であり、その主軸方位はN~63°26'6"~Eとなる。

#### 周溝

八幡神社古墳の周溝は前方部前面部分を除き、全体的に遺存状況は良好で、周縁部分は畦道として残っている部分が多い。しかし、遺存部分でみると墳丘南側と北側の周溝幅は均等ではなく、南側部分がやや広くなっているところから、遺存状況の良い部分についても、少なからず変形を受けているものと考えられる。ところで、後円部の想定中心点を中心として径80mの円を描くと、その円周は、ほぼ今回の調査で確認した周溝の外縁部に一致し、この部分の周溝は、先に復元した後円部墳丘と整合するものであることがわかる。この部分の周溝は墳丘南側の周溝遺存部分に連続し、南側の周溝遺存部分も、ほぼ築造当時の形態を留めていると考えられる。ところが、北側の周溝遺存部分は、南側に比べ全体に幅が狭く、周溝外縁部は築造当初よりも



第54図 八幡神社古墳 墓丘・周溝復元図 (S = 1/800)

3～6 m 内側によつた形で現在確認できるものと思われる。前方部前面部分は、この古墳の周溝の中でも最も遺存状況の悪い部分であり、当初の周溝の形態は殆ど確認することができない。しかし、神社参道南側には、宅地から水田に落ち込む場所があり、ここは先に復元した前方部

	内裏塚古墳	九条塚古墳	三条塚古墳	古塚古墳
上田	6:1.53:3.00	6:1.86:4.76	6:1.86:4.76	6:3.45:3.75
門	8:3.00:3.52	8:3.31:5.85	8:3.15:5.57	8:2.73:5:45
	稻荷山古墳	八幡神社古墳	武平塚古墳	ワラビ塚古墳
上田	6:1.68:5.04	6:2.89:1.98	6:4.54:0.90	6:1.70:2.80
門	8:2.26:6.19	8:2.70:3.94	8:2.70:4.10	8:3.00:3.60

第5表 富津古墳群と八幡神社古墳の墳丘比率

前縁部分と平行している。このことから、この部分は、前方部前面部分の周溝外縁部の一部である可能性が考えられる。以上の状況から周溝規模を復元すると、主軸長118m、前方部前面幅100mの橋形周溝となる。なお、二重周溝については、今回の発掘調査では確認することができず、存在しないものと考えられる。

#### 墳丘の築造企画

以上の墳丘・周溝の復元結果から墳丘の築造企画についての検討を行ってみたい。その場合、本古墳と同様、周惠国造の古墳群である富津古墳群(註31)との比較検討が、本古墳の性格を考える上で、有効と思われる。富津古墳群の大型前方後円墳の築造企画については、既に小林三郎氏により検討が加えられている(註32)。そこでは、墳丘形態を上田宏範氏の方法(後円部径:前方部後長:前方部前長の比率)(註33)、門国男氏の方法(墳丘主軸全長:主軸中央墳丘幅:前方部最大幅の比率)(註34)とともに数量化しており、本古墳の形態も同様の方法により比率を求めることする。その結果得られた墳丘比率を比較したのが第5表である。これを見ると、内裏塚古墳、九条塚古墳、三条塚古墳、古塚古墳、稻荷山古墳といった墳丘全長100m前後の大型前方後円墳とは、いずれの方法においても、その形態上での類似性は認めがたい。特に、三条塚以下の中古墳については前方部の発達が著しく、本古墳の形態とは大きく異なる。

では、富津古墳群の中でも、以上の大型古墳よりもやや規模の小さい、墳丘全長70m前後以下の前方後円墳についてはどうであろうか。このクラスの前方後円墳では、西原古墳、姫塚古墳、武平塚古墳、わらび塚古墳の存在が知られているが、いずれも現在では墳丘形態が著しく変化を受けており、築造当時の形態を伝えているものは存在しない。しかし、その中で武平塚古墳とわらび塚古墳は、残丘部分と発掘調査の成果から、ある程度、墳丘形態を復元することができる。武平塚古墳の墳丘復元については、僅かな残丘部分からの復元で全く問題がない訳ではないが、ほぼ大筋においては妥当なものであると考えられる(註35)。この墳丘復元では、細部について不明な点があるが、上田氏の方法では6:4.54:0.9という比率が得られ、門氏の方法では8:2.7:4.1の比率を得ることができる。これらの比率は、本古墳のものと類似し、特に門氏の方法では、ほぼ一致するといってよい。わらび塚古墳は、発掘調査により周溝の確認が行われており、ほぼ築造当時の墳丘形態を復元することができる(註36)。それによると、

上田氏の方法では、6:1.7:2.8の比率が得られ、門氏の方法では8:3:3.6の比率を得ることができる。これらの比率の内、門氏の方法では本古墳とわらび塚古墳とは、ほぼ一致するといえよう。つまり、本古墳と富津古墳群を比較した場合、富津古墳群の70m前後以下クラスの前方後円墳との間に、後円部径に比べて前方部最大幅が狭いという築造企画上での共通点を認めることができる。なお、これらの富津古墳群の中・小型前方後円墳の内部主体は、いずれも横穴式石室であり、年代的にも6世紀第4四半期を中心とするものである(註37)。

以上、八幡神社古墳の墳丘規模・形態の復元を行い、墳丘の築造企画について検討を加えてきた。その結果、墳丘規模は、主軸全長77m、後円部径42.5m、前方部最大幅38m、周溝規模は、主軸全長118m、前方部前面幅100mにそれぞれ復元できる。また、墳丘形態については、富津古墳群中では、墳丘全長が70m前後以下の中・小型前方後円墳との関連性が指摘できた。なお、今回の調査では、埴輪等の古墳に直接関連する遺物は出土しなかったため、本古墳の築造年代、内部施設についての考察は、ここでは差し控えることとした。

## 2. 外箕輪遺跡・八幡神社古墳から検出された遺構の性格について(第55・56図)

外箕輪遺跡と八幡神社古墳では、掘立柱建物、井戸、溝状遺構等多数の遺構が検出されたが、八幡神社古墳の周溝部分を除いた、これらの遺構の性格について推定を行ってみたい。

### 遺跡周辺の条里地割りの復元(第55図)

外箕輪遺跡と八幡神社古墳周辺の地籍図や航空写真を見ると、道路や水田の中には、部分的に方格の規格制が認められる場所があり、この地域周辺に条里地割りが存在する可能性を考えられる。そして、この地割りは、今回検出された遺構とも密接に関連していることが予想される。

まず、法木作と内箕輪の大字境の周辺を西北から東南にかけて直線的に走る太い道路が存在し、これに平行して走る太い道路が大字外箕輪の字・大曾根から辻にかけて認めることができる。この平行して走る2本の道路の間隔は、654mを測り、1町を109mとすると6町分に相当し、更に、この2本の道路を基準として、109m(1町)間隔で平行線を南北に引くと、道路に平行する大畦と一致する部分が多く認められる。このことから、この2本の道路は、条里地割りの里境に当たると考えられる。

それでは、条境についてはどうであろうか。現在でも旧幾更都(木更津)海道と思われる道路が塞ノ神々社の正面から八幡神社古墳の前方部をかすめて小糸川に通じており、この道路は現在でも、部分的に外箕輪と法木作の大字境となっている。この道路で、塞ノ神々社と小糸川の渡河地点を結んだ線は、前述の2本の道路(里境)と直行し、また、塞ノ神々社と小糸川の渡河地点を結んだ線を基準として、109m(1町)間隔で平行線を東西に引くと、大畔の多くが一致している。このことから、塞ノ神々社の正面と旧木更津海道の小糸川渡河地点を結んだ線



第55図 条里地割り復元図 (S=1/5,000)

は、条里地割りの条境に当たる可能性が考えられよう。

以上の推定から、外箕輪遺跡・八幡神社古墳周辺の地域には、条境をN～25°～E前後の方に向ふとする条里地割りが存在したと考えられる。この条里地割りは、条里境が旧木更津海道と、それに直行する道路と重なる形で復元することが可能である。そして、坪内の地割りには、長地と半折の両方の痕跡を認めることができる。

#### 条里地割りと検出遺構との関係（第56図）

外箕輪遺跡と八幡神社古墳では、遺構は各5期に時期区分できる。そして、前述の条里地割りと同様の方向性を持つ遺構は、外箕輪遺跡ではII期から、八幡神社古墳ではIV期から、それぞれ出現している。

外箕輪遺跡II期では、溝状遺構と掘立柱建物が存在する。このうち、SD-1は前述の条境から東に約109m(1町)の間隔をおいて、条境に平行して走る溝であり、SD-2についても八幡神社古墳の北側を走る里境から南に約327m(3町)の部分に相当している。つまり、この2本の溝状遺構は、条里内の坪界溝に当たると考えられ、その他の溝状遺構も坪内の畦畔に伴う区画溝と考えられる。ただし、II期の坪内の地割り形態は半折とも長地とも見られず、その折衷形態が予想されるが、調査区が限局されているため断定はできない。また、II期の掘立柱建物の中で、最も規模の大きいSB-1の北側々柱は、SD-2の南約54m(1/2町)の場所に当たり、II期の掘立柱建物は、統て条里地割りと類似した方向性を持っている。このことから、II期の建物群は条里地割り内に計画的に配置されたものであると言えよう。そして、逆に条里地割りの年代についても、建物群と同様の年代まで遡らせることが可能である。

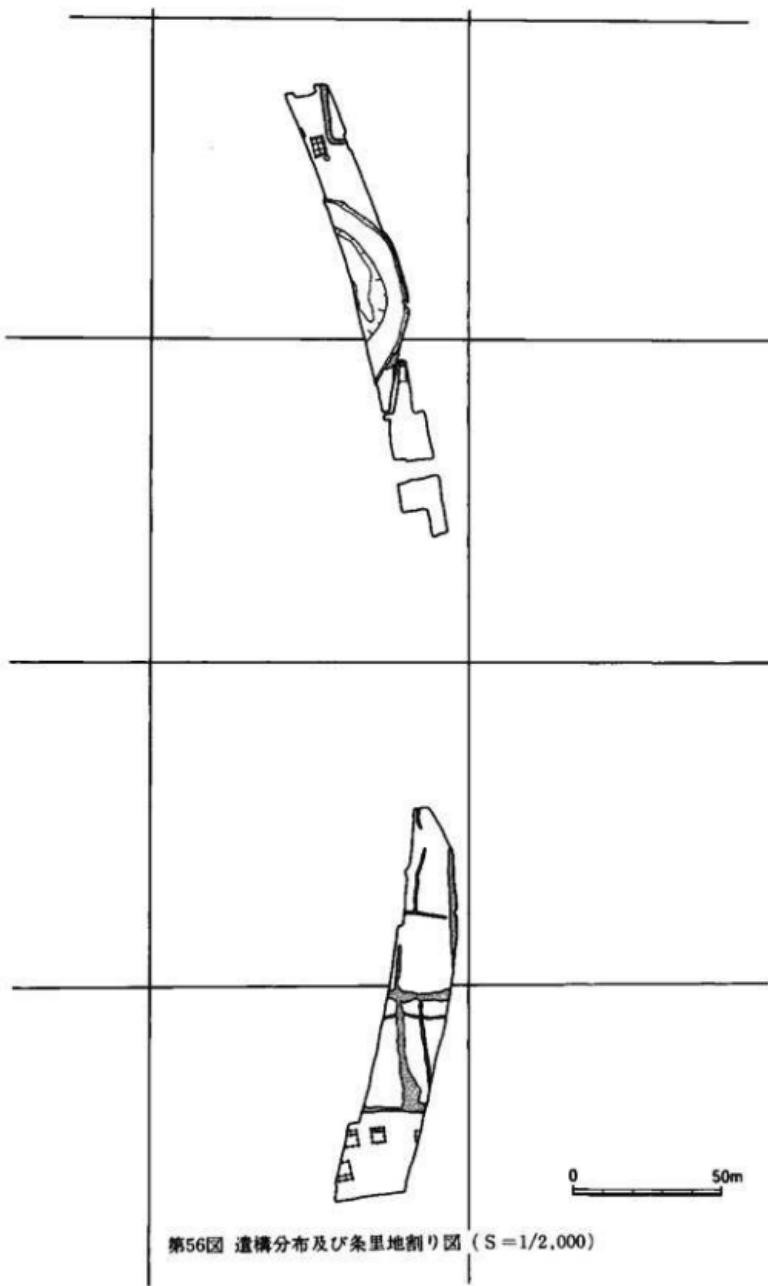
この条里地割りは、III期には条里耕地の荒廃に起因すると考えられる乱れが認められるが、IV期には坪境を中心に復元され、そこに建てられた掘立柱建物の方向性を規制している。

八幡神社古墳においては、条里地割りと方向性が一致する遺構としては、IV期に属する居館の堀が、年代の確認できる遺構の中で最も古いものである。この堀は、外箕輪遺跡のSD-1が相当する坪境と八幡神社古墳の北側を走る里境との交点付近で確認され、この交点部分を居館の北東コーナーとすると、今回の調査で検出された部分は、1辺約36m(20間)の条里方向に添った方形居館の西南コーナーに当たる。そして、同時期の掘立柱建物の多くも、その方向性は堀と同様に条里地割りの規制を受けている。この居館は、14世紀以降には廃絶し、周辺は耕地化しているが、基本的に条里の方向性は維持され、現在の耕地の原型が形成されている。

#### 検出遺構の性格について

今回の調査において検出された遺構の中で、古墳周溝を除けば、特筆される遺構としては、外箕輪遺跡II期の大型掘立柱建物群と掘立柱建物・井戸・堀等の外箕輪遺跡・八幡神社古墳IV期の遺構群がある。そこで、最後にこれらの遺構の性格について、触れておくこととした。

外箕輪遺跡II期の遺構—外箕輪遺跡で検出されたII期(8世紀代)の掘立柱建物の特徴として



第56図 遺構分布及び条里地割り図 (S=1/2,000)

は、以下の4点を挙げることができる。

- (1)掘立柱建物の柱間間隔は8尺から5尺であり、掘形も一辺1mを越える矩形のものが多く見られる。
- (2)検出された4棟の建物の配置は、ほぼ棟方位を等しくし、条里地割りの中に計画的に配置されている。
- (3)墨書き器は出土していないが、須恵器高杯の転用硯が出土しており、文字資料が存在した可能性は高い。
- (4)建物周辺の土坑群から、フイゴ羽口やスラグが出土しており、周辺に製鉄関連の遺構が存在する可能性が高い。

以上の特徴から、この建物群は、一般集落のものとは考えがたく、官衙若しくは在地有力者の居館的性格を想定することができる(註38)。また、建物立地条件については、以下の3点が特徴として挙げられる。

- (1)郡衙推定地の所在する大字郡までは1.5kmの至近距離である。
- (2)建物群は、旧木更津海道の小糸川渡河地点に立地している。この旧木更津海道周辺には「大道」・「辻」・「道通」・「傾城田」といった小字名が存在し、古代以来の幹線道路であった可能性が考えられる(註39)。
- (3)至近距離に、8世紀初頭の瓦を持つ九十九坊廃寺や国史見在社である常代神社(常世神)が所在する。

以上の特徴から、建物群の立地する地点は、律令期の周准郡内でも中心的な場所であると同時に交通の要衝に当たっていたことがわかる。つまり、外箕輪遺跡の8世紀代の建物群については官衙的な性格を持ちながら水陸の交通の要衝に立地していることになり、このことから駅家、若しくは館の遺構との関連を想定することができるかもしれない。周准郡内には、延喜式兵部省式に見られる藤瀬駅の存在が想定されているが(註40)、その所在地については数例の推定地が存在するものの確定はされていない。外箕輪遺跡の建物群についても、駅家関連の文字資料が出土していないため断定はできないが、ここでは、上述した遺構・立地の特徴から、その可能性を指摘しておきたい。

外箕輪遺跡・八幡神社古墳IV期の遺構－IV期(13世紀代)の主な遺構としては、外箕輪遺跡では掘立柱建物・井戸が、八幡神社古墳では堀・掘立柱建物・井戸がそれぞれ検出されており、中世前半の村落形態を推定する上で重要な手掛かりとなると考えられる。そこで、これらの遺構から13世紀当時の状況を復元すると、八幡神社古墳の北側を中心に堀を巡らした方形居館とその付属施設が存在し、条里地割りの2町程度の間隔を置いて、外箕輪遺跡内で井戸と掘立柱建物からなる屋敷地が確認できる。中世前半の村落については、西日本を中心とした例ではあるが、廣瀬和雄氏により分析が行われており、そこでは村落遺構の分類が行われている(註

41)。それによると、八幡神社古墳北側の居館はD型に、外箕輪遺跡の屋敷地については不明な点が多いがほぼB型に、それぞれ相当するものと考えられる。そして、前者において在地領主の、後者において中・小名主層（在家）の存在を推定することができる。また、以上の状況から、13世紀当時においては、条里地割り内に、在地領主の居館を中心として中小名主の屋敷地が1町から2町程度の間隔を置いて散在する、という景観を想定することも可能である。なお、外箕輪遺跡においては、歴史時代の土器量のピークは8世紀と10～13世紀にあり、上述したような条里地割り内の村落は、10世紀以降の条里地割り内の再開発を契機として次第に形成されていったものと考えられる（註42）。

遺跡周辺の鎌倉時代の状況を伝える史料として、東盛義所領に関する一連の文書が存在する（註43）。それによると、外箕輪（17世紀初頭以前では内・外合わせて箕輪村）の北側に隣接する子安村は、13世紀から14世紀初頭にかけて東盛義の所領であったことが知られる。そして、この一連の文書には所領注文、年貢請文、称名寺との争論関係の文書等が含まれており、当時の子安村の状況や伝領の経過について良く伝えている。

ところで、遺跡の所在する小糸川中流域一帯は、中世においては周東郡と称され、12世紀代には上総氏の一族である周東氏の支配下にあったものと考えられる（註44）。ここに、千葉氏の一族である東氏の介入したことは、恐らくは上総介広常の殺害や宝治合戦を契機としていると考えられる（註45）。これは、元徳元年（1331年）「称名寺領東盛義勝三分一分付文書案」中の「当所者周東宮内左衛門秀直跡也」という記述からも裏付けられる。つまり、12世紀から13世紀にかけては、遺跡周辺は周東氏や東氏の強い影響下にあったと推測され、八幡神社古墳において検出された居館の在地領主もこれらの氏族との間に強い関係を持っていたと思われる。

また、元徳3年（1333年）「上総国周東郡内称名寺領年貢請文案」には子安村分として、江崎内入道、藤丞、惣大夫入道、新大夫、円道、平次郎の6人の作人を見ることができる。彼らは田1段半～2段300歩、畠1段～7段60歩を耕作し、米と麦を年貢として上納している。このような作人の存在は、米及び多量の炭化麦が出土した外箕輪遺跡の中世遺構との関連が想定され、興味深い。

### 3. 結語

今回の発掘調査により、以下の諸点を明らかにすることができた。

- (1) 八幡神社古墳は、墳丘主軸全長77m、後円部径42.5m、前方部最大幅38mの前方後円墳に復元することができ、周溝は周溝主軸全長118m、前方部全面幅100mの楯形周溝となる。
- (2) 八幡神社古墳においては、二重周溝及び埴輪の存在については確認できず、墳丘の平面企画については、富津古墳群中の墳丘全長70m前後以下の前方後円墳との間に類似性を認めることができる。

- (3) 外箕輪遺跡で確認された8世紀後半代の大型掘立柱建物群は、駅家もしくは館と関連する施設である可能性が考えられる。
- (4) 外箕輪遺跡・八幡神社古墳周辺には、条境をN～25°～Eの方位にとる条里地割りが存在し、その年代は、外箕輪遺跡の8世紀後半代の掘立柱建物との関係から8世紀後半代にまで遡ることができる。
- (5) 外箕輪遺跡・八幡神社古墳で検出された13世紀代の遺構は、それぞれ中・小名主層（在家）の屋敷地、在地領主の居館と考えられる。

- (6) 13世紀当時の遺跡周辺の状況としては、条里地割り内に、在地領主の居館を中心に1～2町程度の間隔を置いて在家の屋敷地が散在するという景観が想定できる。

以上の中でも、条里地割り内の古代から中世前半の遺構群を検出し、その変遷過程を断片的ながら明らかにできたことは幸運であったと思われる。県内の古代集落では、10～11世紀代を境として、その規模を急速に減少させるか消滅に向かう例が殆どである。このような集落遺跡の傾向と、今回検出された中世前半の条里地割り内の遺構群とを連続的に考えることは、集落の古代から中世への変遷を考える上で重要な視点になると思われる。しかし、今回の調査は路線部分の限定された狭い範囲のものであった。そのため、周辺遺跡の状況については、依然として不明な点が多く残されている。今後、周辺遺跡の状況解明と同時に、同種資料の蓄積が待たれるところである。

#### 註

- (31) 榎山林繼「第4章 古墳時代」『富津市史 通史』 富津市史編さん委員会 1982
- (32) 小林三郎「内裏塚古墳群内大型前方後円墳の築造企画」『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』 千葉県教育委員会 1986
- (33) 上田宏範「前方後円墳」 学生社 1969
- (34) 倭國男「古墳の設計」 築地書房 1975
- (35) 「千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書」 千葉県教育委員会 1986
- (36) 小沢 洋「二間塚遺跡群確認調査報告書II」 富津市教育委員会 1985
- (37) 註(31)と同じ。
- (38) 註(18)と同じ。
- (39) 大場磐雄他「上総国九十九坊庵寺跡調査報告」「史蹟名勝天然記念物」 第9集第9号 1934  
小熊吉藏「上総に於ける古街道の研究並国郡司庁との関係」 1932
- (40) 「延喜式」 兵部省式 国史大系本  
『改訂 房總叢書 第4集』 地誌・日記・紀行 房總叢書刊行会 1957
- (41) 広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座 日本考古学』6 岩波書店 1986
- (42) 小山靖憲「鎌倉時代の東国農村と在地領主制」「中世村落と莊園絵図」 東京大学出版会 1987
- (43) 註(17)と同じ。

- (44) 相田裕昭「平安末期房總における豪族的領主の支配構造－上総氏と千葉氏について－」『史潮』107号 1969
- (45) 「市原市史（資料集）中世編」総説 市原市教育委員会 1980  
福島金治「上総国周東郡内の金沢称名寺領について」『日本歴史』494号 1989

#### 参考文献

- 「千葉県君津郡君津町誌」君津町誌編纂委員会 1973
- 石井新二「上総国周東郡における称名寺領－東盛義所領の分割をめぐって－」『千葉県の歴史』21号 1981
- 服部昌之「律令国家の歴史地理学的研究－古代の空間構成－」 大明堂 1983
- 峰岸純夫「中世の東国－地域と権力－」東京大学出版会 1989

## 付篇 外箕輪遺跡出土の木材・種子の自然科学分析

### はじめに

外箕輪遺跡のSE-1は13世紀代の井戸であるが、そこからは数点の木製品と多量の種子が出土した。以下は、これらの木製品の使用材・種子の同定及び若干の考察を、パリノサーベイ株式会社に依頼した成果である。

### 1. 材同定

#### 1-1 試料

試料は No.067、248(第31図44)、257(同49)、261(同47、48)、265(同46)、266(同41)、273の7点で、鎌倉時代中期(13世紀中頃～後半)のものとされる井戸址 SE-1から検出されたものである。No.067は覆土灰層中から出土した炭化材で、板材(?)とされている。No.248以下の6点は、いずれも最下層粘土層から出土したものであり、No.257は角材、No.265は曲物桶の底板、その他の4点は容器(?)と考えられている。

#### 1-2 方法

炭化材は、試料を乾燥させたのち木口・柾目・板目三断面を作成、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察・同定した。非炭化材は、剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片をガム・クロラール(Gum Chloral)で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版(図版23)も作成した。

#### 1-3 結果

試料の劣化が進み確実な同定のできないものもあったが、以下の3種類(Taxa)に同定され

た。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質は、つぎのようなものである。

・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 No.248,265,266,273.

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型 (*Taxodioïd*) で 2~4 個。放射組織は単列、1~15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis sp.*) ヒノキ科 No.(257),261.

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型 (*Cupressoid*) で 1~4 個。放射組織は単列、1~15細胞高。No.257は劣化が進み、分野壁孔が十分観察できないため類似種とした。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C.pisifera*) の 2 種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora*) クスノキ科 No.067.

散孔材で横断面では梢円形、単独または 2~3 個が放射方向に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III型、1~4 細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。年輪界は明瞭。

クスノキは本州（関東地方以西）・四国・九州に分布し、また植栽される常緑高木である。材はやや軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽・耐虫性は高い。建築・内装・建具・家具・器具材や船舶材に用いられる。材や葉からは樟脑が採られ、また葉はテグス蚕の飼料とされる。

以上の同定結果を推定されている用途とともに一覧表で示す（表1）。

表1 外箕輪遺跡SE-1出土材の樹種

試料番号	用 途	種 名
0 6 7	板材 (?)	クスノキ
2 4 8	容器 (?)	スギ
2 5 7	角材	ヒノキ属類似種
2 6 1	容器 (?)	ヒノキ属の一種
2 6 5	曲物底板	スギ
2 6 6	容器 (?)	スギ
2 7 3	容器 (?)	スギ

#### 1-4 考察

角材・容器(?)とされる試料は、スギとヒノキ属(類似種を含む)に同定された。スギ・ヒノキ(サワラ)製の井戸枠や桶・曲物などの容器は、古代から現代まで広く用いられている。千葉県内には、試料と同時期のものとされる類例はほとんどないようであるが、東京都葛飾区葛西城址(山内文 1974、1975)や、神奈川県鎌倉市藏屋敷遺跡(山内文 1984)、同市千葉地東遺跡(山内文 1986)などでの出土が報告されている。また、時期的にやや新しかったり、時代幅が広かったりするが、埼玉県戸田市鍛冶谷・新田口遺跡(能代・鈴木 1986)や群馬県高崎市下東西遺跡(パリノ・サーヴェイ株式会社 1987)でも出土している。

#### 引用文献

- 能代 修一・鈴木 三男 1986 鍛冶谷・新田口遺跡出土木材の樹種、「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第62集 鍛冶谷・新田口遺跡」、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、398-410.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1987 樹種同定、「下東西遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集-本文編」、群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、945-947.
- 山内 文 1974\* 植物遺存体、「青戸葛西城址調査報告II 東京都・葛飾区・青戸」、東京都教育委員会、122-124.
- 1975\* 植物性遺存体、「青戸葛西城址調査報告III」、葛飾区葛西城址調査会、264-267.
- 1984 藏屋敷遺跡出土の木製品について、「藏屋敷遺跡 日本国鉄道鎌倉駅舎改築に伴う鎌倉市小町所在遺跡の調査」、鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会、227-231.
- 1986 千葉地東遺跡出土の木製品の樹種について、「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10 千葉地東遺跡 鎌倉県税務所建設工事にともなう鎌倉市御成町所在遺跡の調査」、神奈川県立埋蔵文化財センター、575-578.
- \* 原著を直接参照できなかった。

#### 2. 種子同定

##### 2-1 試料

試料は2点で、前出の井戸址SE-1の覆土のうち、材試料の出土した最下層粘土層と灰層堆積物中から調査時に水洗篩別されたものである。本報文中では、前者をNo.1、後者をNo.2と

する。

## 2-2 方法

実体顕微鏡下で観察・同定・計数した。同時に、同定された種実の拡大写真図版（図版3）も作成した。

## 2-3 結果

同定された種実とその個体数を、一覧表で示す（表2）。

表2 外箕輪遺跡SE-1覆土検出種実とその個体数

科名	種名	No 1	No 2
イネ科	エノコログサ属類似種 (cf. <i>Setaria</i> sp.)		7
	イネ ( <i>Oryza sativa</i> )	30	201
	ムギ類 ( <i>Hordeum</i> / <i>Triticum</i> sp.) *	65	9777
クワ科	アサ ( <i>Cannabis sativa</i> )	141	4
バラ科	モモ ( <i>Prunus persica</i> )	1	
	スマモ ( <i>P. salicina</i> )	1	
マメ科	サクラ属の一種 ( <i>Prunus</i> sp.) **	2	
ブドウ科	マメ科の一種 ( <i>Leguminosae</i> spp.)	1	6
キク科	ブドウ属の一種 ( <i>Vitis</i> sp.)	1	
	オナモミ ( <i>Xanthium strumarium</i> )	1	
	その他	10	13
合	計	253	10008

\* ほとんどがオオムギ (*Hordeum*) のようであるが、コムギ (*Triticum*) に似たものも交じっているためムギ類とした。オオムギとすれば、未熟なものが多い。

\*\* スモモに似る。

# 写 真 図 版



遺跡周辺航空写真 (1:10,000) 昭和42年撮影



外箕輪遺跡全景（北東から）



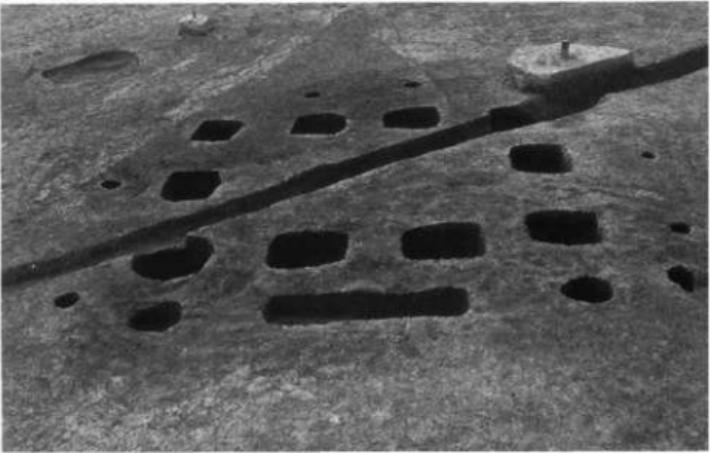
外箕輪遺跡全景（南から）



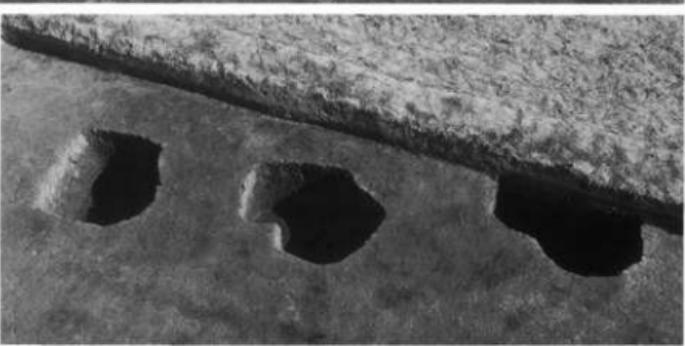
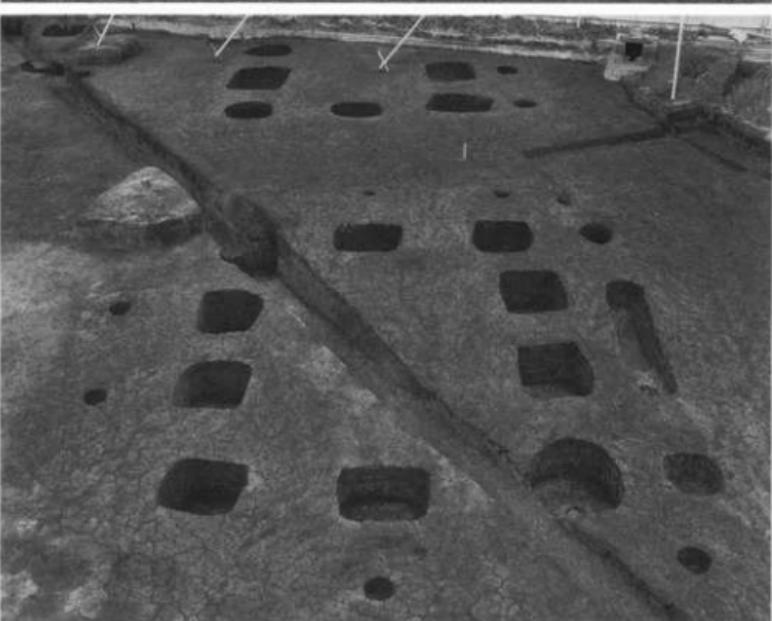
SB-1 全景  
(東から)



SB-2 全景  
(南から)

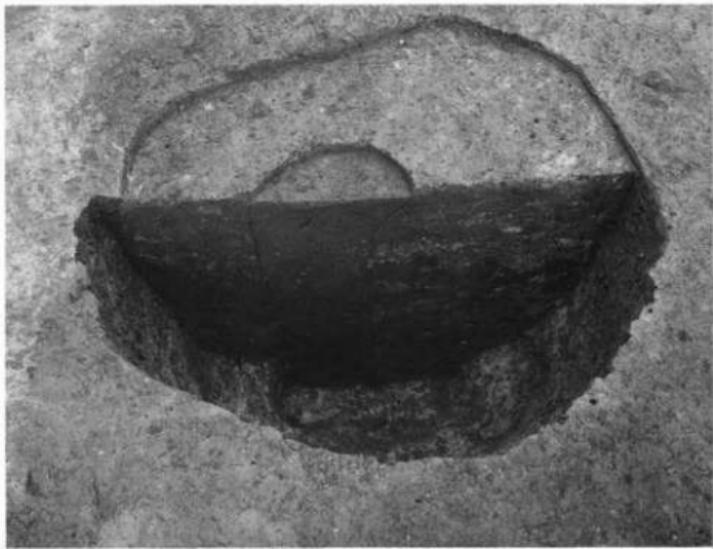
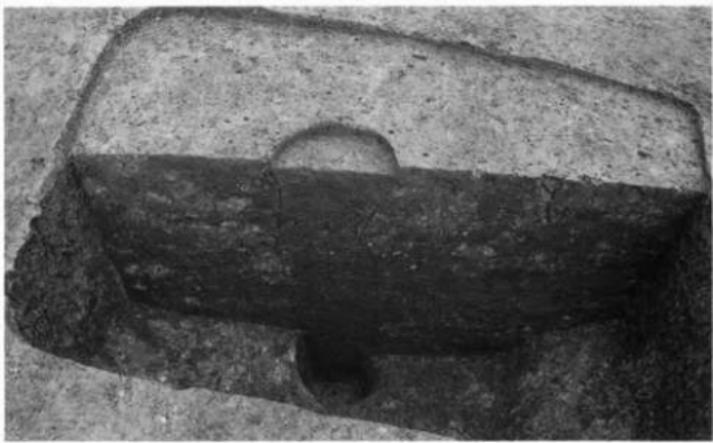
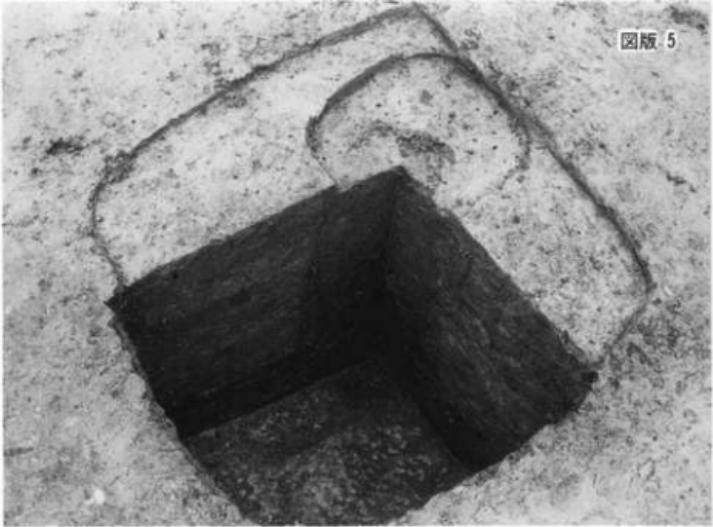


SB-3 全景  
(北から)



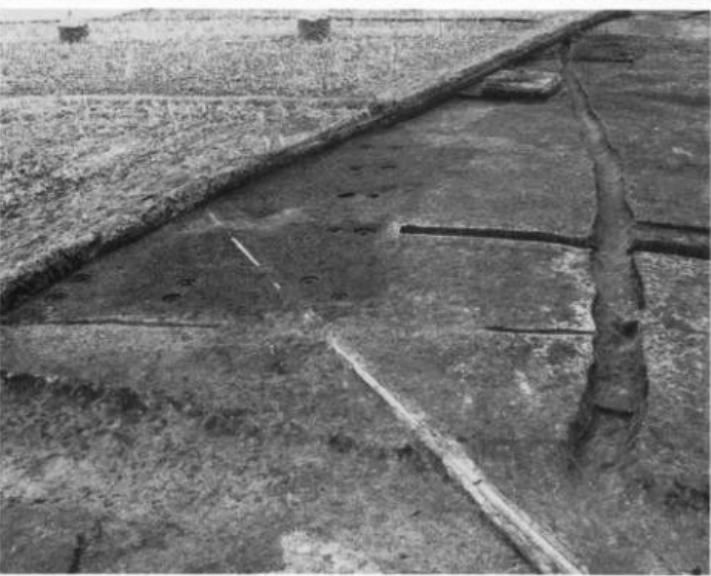
SB-2 柱穴  
セクション

図版 5

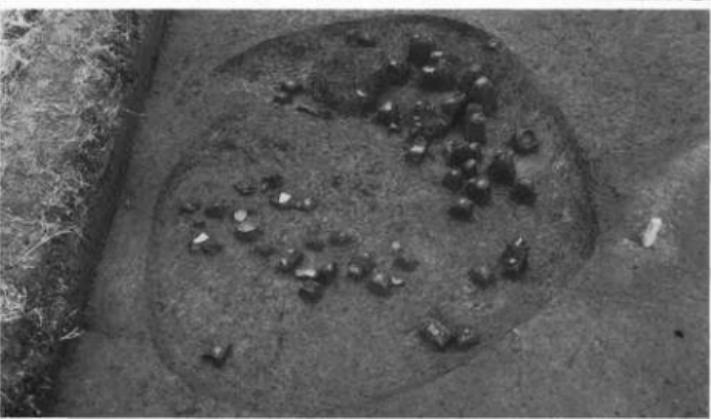




SB-6 全景  
(北東から)



SB-5 全景  
(北から)



SK-1 全景  
(北から)

SK-2 全景  
(南西から)



SK-3 全景  
(北から)

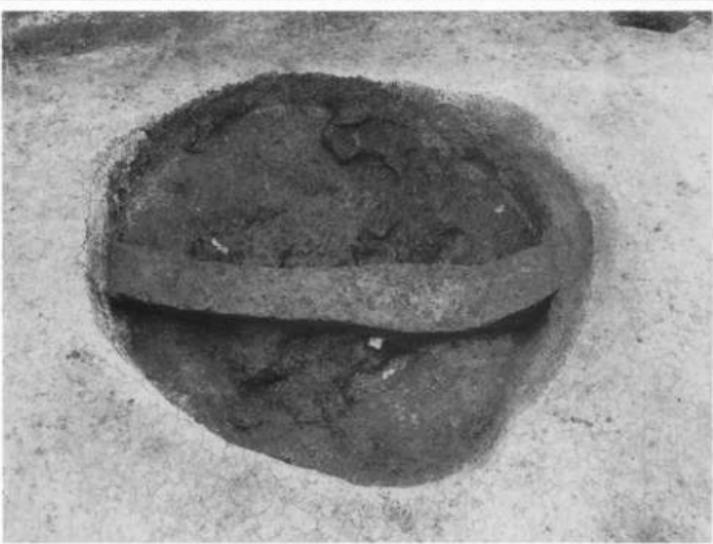


SD-6、8  
SK-4、5 全景  
(東から)

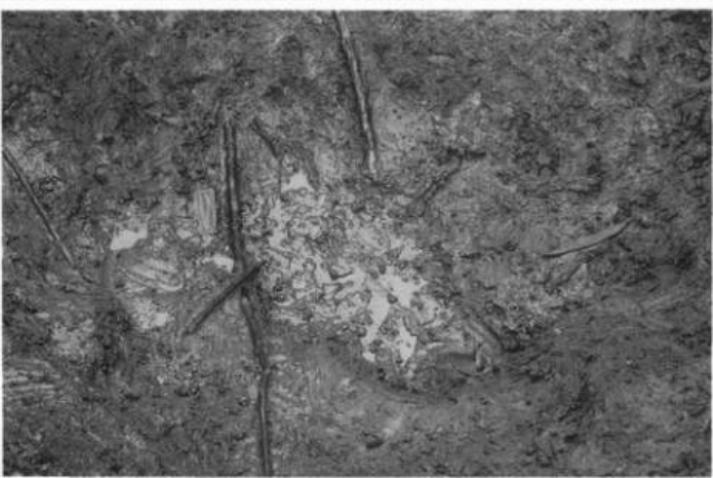




SE-1 全景  
(西から)



灰層検出  
状況  
(西から)



遺物出土  
状況



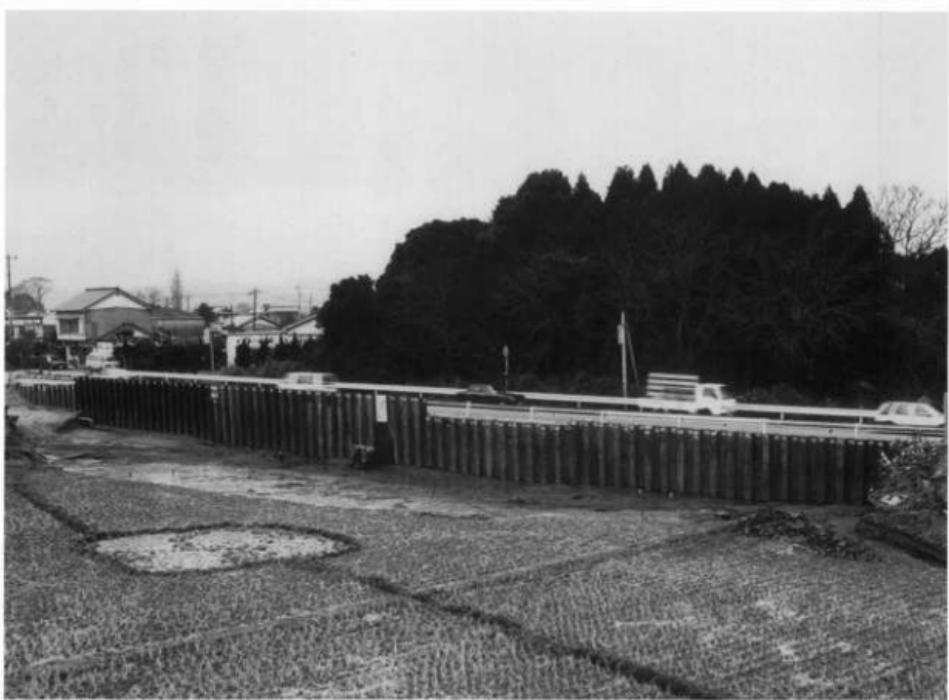
八幡神社古墳全景（東から）



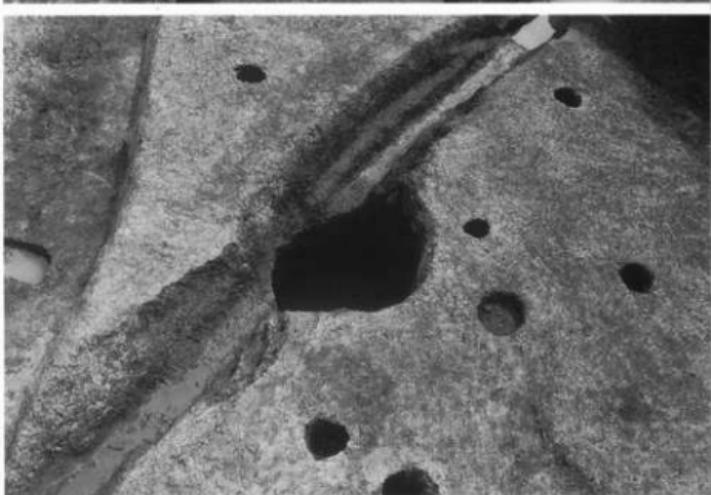
八幡神社古墳全景（西から）



八幡神社古墳周溝（南から）

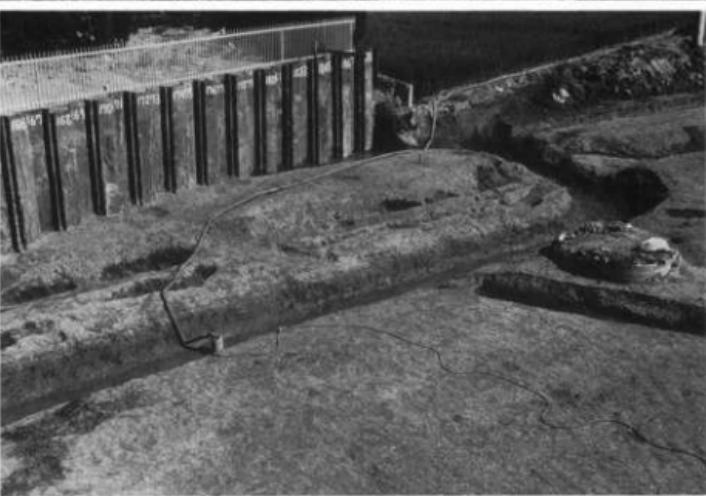


八幡神社古墳周溝（東から）





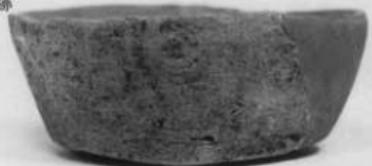
全景  
(西南から)



全景  
(北から)



完掘状況  
(西南から)



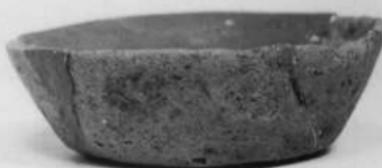
SK-1-10



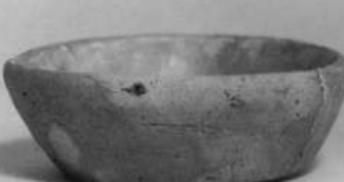
SK-2-1



SK-1-11



SK-1-3



B-6-2



B-6-3



SB-6-10



SK-2-14



SK-2-32



SK-2-15



SB-1-1



SK-2-44



B-6-1



SK-2-18



SK-2-17



SK-2-5



SK-2-27



SK-2-2



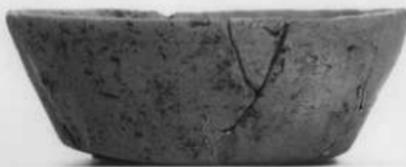
B-6-5



SK-1-1



SK-2-16



SK-4-5



7



6



8



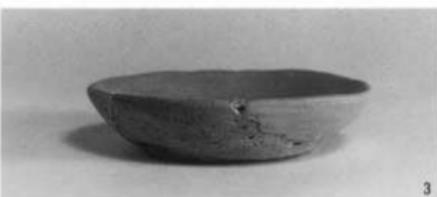
1



2



22



3



24



9



23



27



26



1:2

35



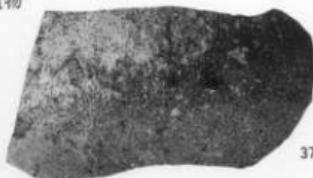
1:4

39

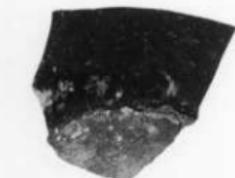


1:4

36



37



38



40

1:3

1:3



33



30



28



32



17



11



18



34

1:2

15



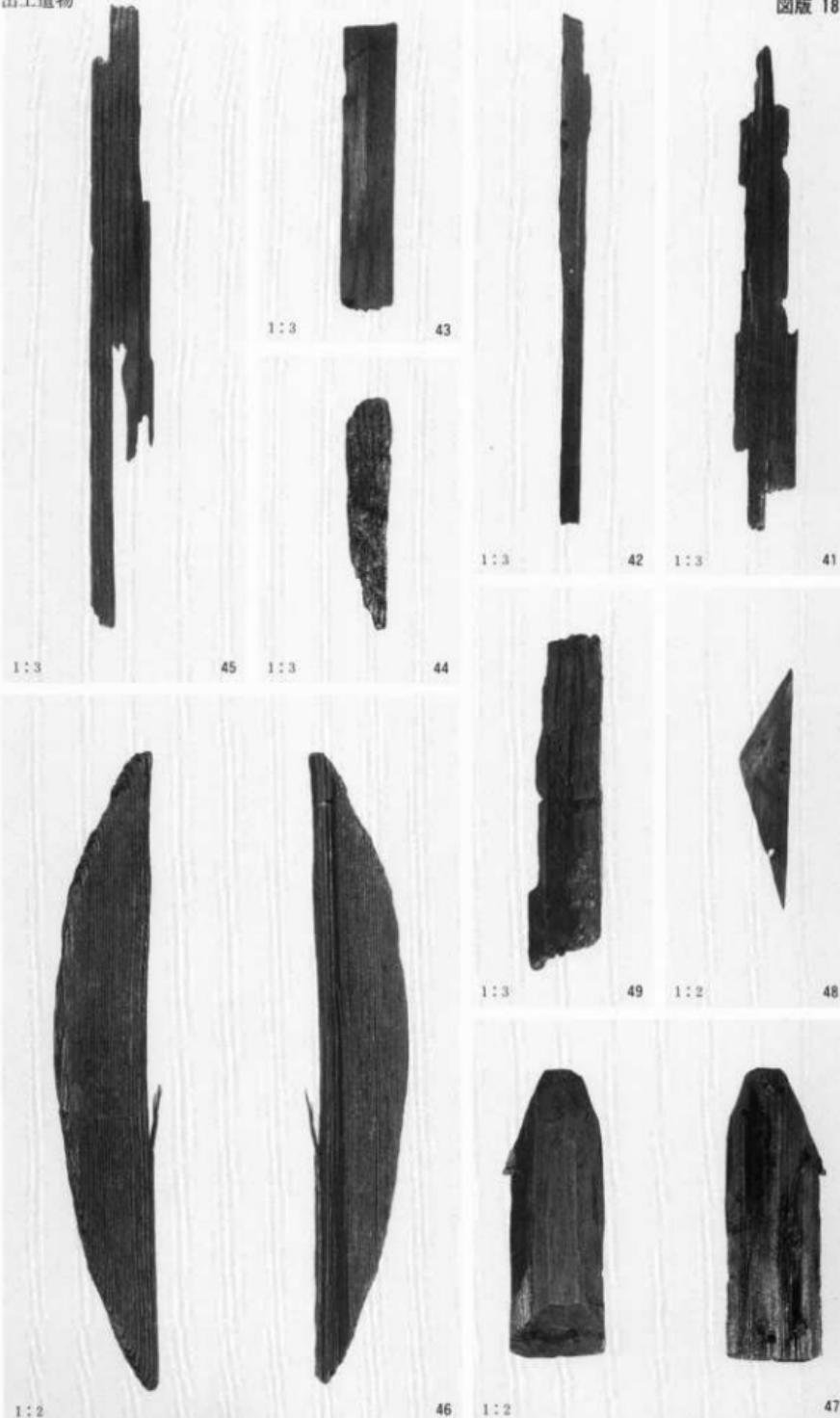
19



縮尺任意



焼付壁材





52



53



51



54



50

縮尺任意



55



58



56



57



59



60

1:2



61



62



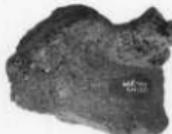
1:1



13



SK-1-23



SK-1-22



SK-2-45



SK-1.2 ワゴ片

1:2



1:3

34



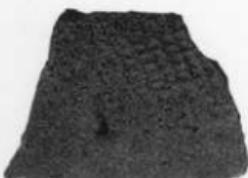
SB-1-6



SD-3-11



SD-1-4



SD-3-16



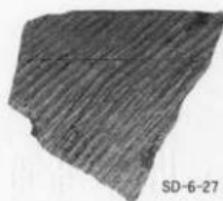
SD-3-10



SD-5-24



SB-6-12



SD-6-27



SK-2-25

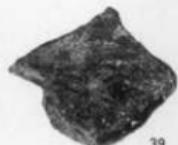


SX-1-12

SD-14



38



39



42



43



SX-1-26



SX-1-10



4

SD-11 出土甕片

6



9



10



7



13

SD-12 出土甕片

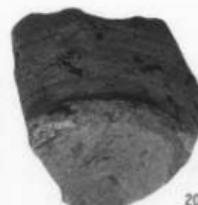


3

1:2



18



20



1:2



23

19

1:2



1:1



21



1:2



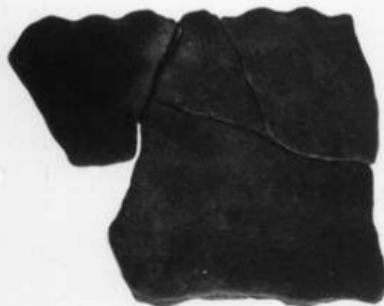
22



11

缩尺任意

SE-1 出土陶片



1:2

缩尺任意

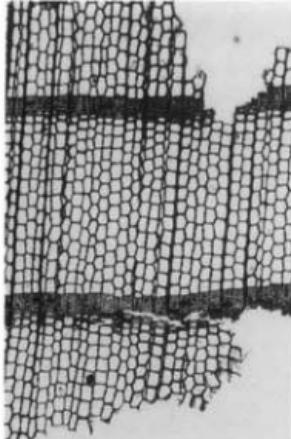
SE-1 出土石材



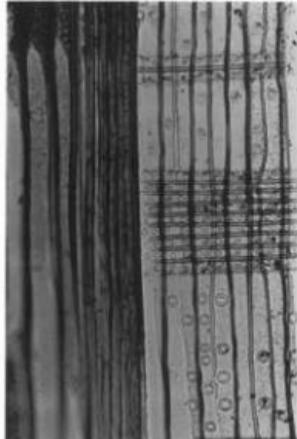
24

缩尺任意

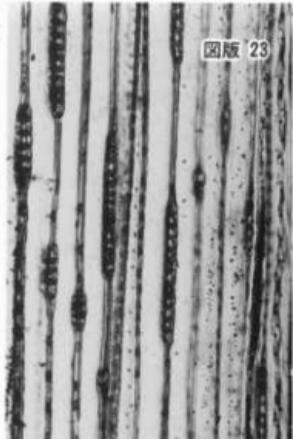




木口 ×40

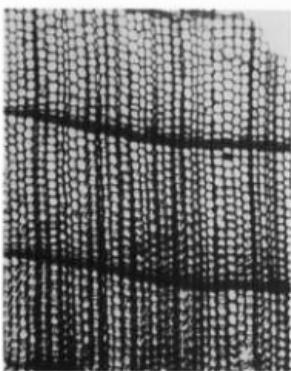


径目 ×100

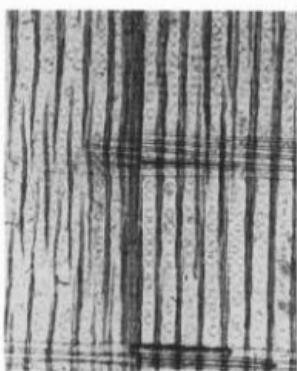


板目 ×100

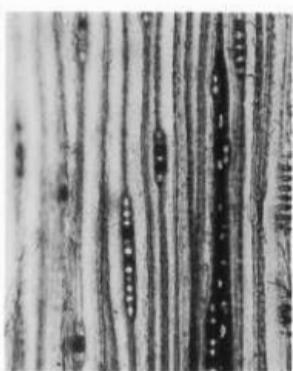
*Cryptomeria japonica* No.266



木口 ×40

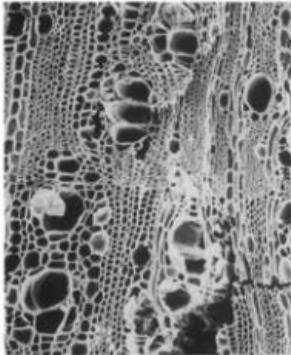


径目 ×100



板目 ×100

*Chamaecyparis* sp. No.261



木口 ×70



径目 ×140



板目 ×140

*Cinnamomum camphora* No.067



A



B



C



D



E



F



G



I

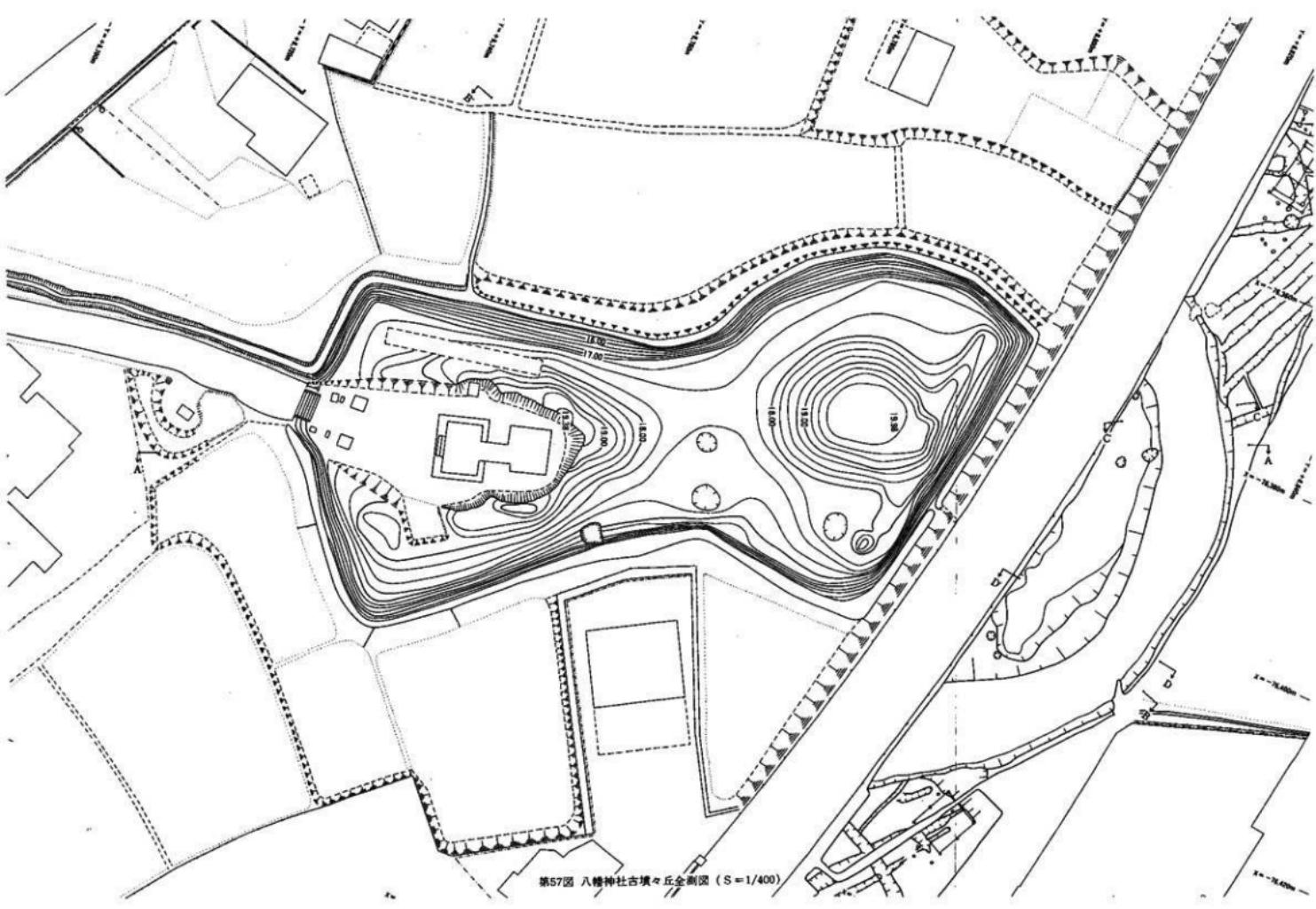


H

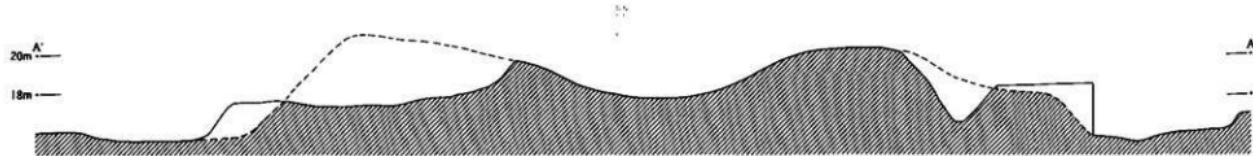
A : cf. *Setaria* sp. No.2B : *Oryza sativa* No.2C : *Hordeum/Triticum* sp. No.2D : *Cannabis sativa* No.1E : *Prunus persica* No.1F : *P. salicina* No.1

G : Leguminosae sp. No.2

H : *Vitis* sp. No.1I : *Xanthium strumarium* No.1



第57図 八幡神社古墳々丘全剖面図 (S=1/400)



第58図 八幡神社古墳々丘断面図

1. 黄褐色砂質土層
2. 緑褐色土層
3. 緑青灰褐色砂質土層
4. 緑灰褐色粘質土層
5. 黑色粘質土層
6. 黑褐色粘質土層



第59図 八幡神社古墳周溝土層断面図

千葉県文化財センター調査報告第180集

平成元年10月20日 印刷

平成元年10月31日 発行

君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳

発掘調査報告書

編 集 財団法人 千葉県文化財センター  
発 行 建 設 省  
印 刷 有限会社 正 文 社